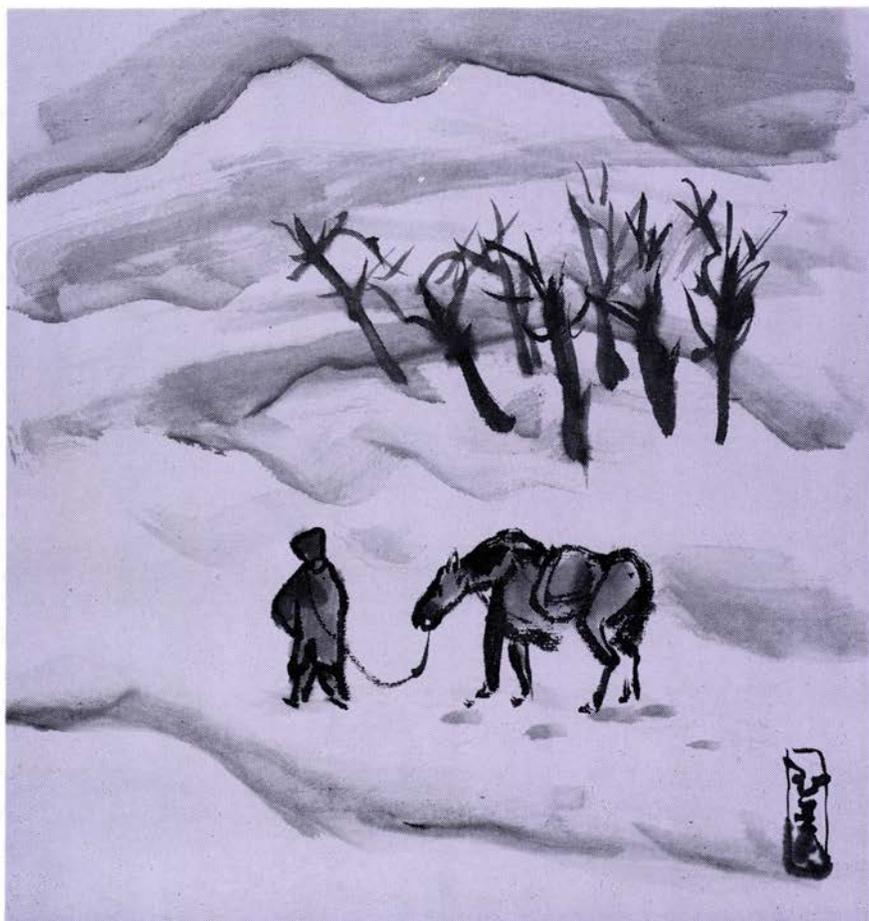


川柳塔

昭和六十年十二月二十五日印刷
昭和六十年十二月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十二年 通卷七〇三号



日川協加盟

No. 703

十二月号

1986年

新春おめでとう会

日時 昭和61年1月15日(祝) 午後一時開会
会場 大成閣

大阪市南区大宝寺町中之町二六
〔心斎橋大丸とそごうの間を東へ約百m〕
電話(06) 271・5230

挨拶 西尾 葉
お話し 東野 大八
兼題 「虎(寅)」 宮口 笛生選
「窓」 橘高 薫風選

懇親宴会費 六千円

◆同人・誌友の皆さんのご参加をお待ちしています。

川柳塔社

■川柳塔七〇〇号記念出版

須崎豆秋川柳句集

ふるさと 復刻版

B6判一三六頁 定価一、〇〇〇円

(送料三百円)

発行所 川柳塔社

〒55 大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第二ビル

振替口座 大阪8-333368番

※お申し込みは本社へ。

▲カラーボックス▼

川柳にみる大阪

藤沢桓夫・橘高薫風共著

文庫判一五二頁 定価五〇〇円

発行所 株式会社 保育社

〒510 大阪市東区上町一-一七

電話06(762) 1731(代)

振替口座 大阪6-12346番

※書店でお求め下さい。

血液型

西尾 葉

九月三十日の朝、立ちくらみがきて、

係りつけのO医師に電話すると、すぐに成人病センターの診察を受けるよう指示されたので、早々に病院へ行くと入院しなさいということ、翌十月一日に部屋の中の空くのを待って入院した。CTの検査、アイソトープの検査の結果、脳の微細な血管に血栓があるという診断で、丸一ヶ月の入院で十月三十日に退院した。その間お見舞や、お見舞状を戴いて恐縮している。有難うございました。

昨日お祝いしたのに、今日は入院とはチヨカチヨカした奴やと、お叱りを受けるのを覚悟で点滴の人となった。

入院や自問自答の午前二時

徒然なるままに、長女がもってきた血液型の本を読んだ。

今年六月に、川柳展望の十周年記念大会が岡山にあった時の受付用紙に、血液型を書く欄があった。さても変わった趣向だと思って、私は自分の血液型のA B型を書いたが、その後の結果が気になっていたところ、このたび発表されたのを見ると左の通りであった。

性別	
男性	119人
女性	133人

血液型	
A	83人 38%
O	62人 28%
B	47人 22%
A B	26人 12%

ある本に、漱石の「草枕」の一節をパロディ化した文が載っていた。

「Oに働けば角が立つ、Bに棹させば流される、Aを通せば窮屈だ、とかくに人の世は住みにくい、住みにくさが高じると、A B型ばかりのところへ引越したくなる。だがA B型だけでは世間が保たぬ、あとは血液型のない国へ行く許りだが、血液型のない国は、人の世よりはな

お住みにくからう」とあった。

Oに働けば角がたつゆえんは、O型の自己主張の強さにあり、Bに棹させば流されるというのは、B型は表現や行動に一定基準をもたないところであり、Aを通せば窮屈だということはA型の性格のひとつとして筋を通す姿勢の強いところであり、A B型は感覚が鋭い合理精神で情緒安定の面を言ったのであろう。

日本人の血液型では、A型が一番多く統計によると、A型三八・一%、次のO型は三〇・七%、B型は二一・八%、A B型は九・四%と発表されている。川柳展望の発表と奇しくも一致しているのが面白い。血液型で、その人を律するのは洵に不穏当ではあるが、何かの時に便利なことがあると思う。ああ、あの人はB型だからなどと、良きにつけ悪きにつけ了解することが出来る場合がある。

ゆつくりと日本シリーズ見るベツド

秋晴をたたえて哀れ病み上り

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

もう一人のわたしの嘘を聞いてやる

土橋 蛍

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

血液型……………西尾 葉……………(1)

あこがれの葛温泉失敗記……………正本 水客……………(2)

川柳塔(同人吟)……………西尾 栞選……………(4)

自選集……………東野 大八……………(31)

■川柳太平記(9) 川柳の群像 岡橋宣介……………(34)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二十三丁)……………(36)

江戸川柳に現われた八百屋お七(五)……………阿達 義雄……………(38)

水煙抄……………黒川 紫香選……………(40)

秀句鑑賞 同人吟……………阿部 柳太……………(59)

水煙抄……………田口 虹汀……………(67)

愛染帖……………橘高 薫風選……………(56)

阿部柳太自選百句……………(60)

あこがれの葛温泉失敗記

正本 水客

太宰治の生家として知られている斜陽館とトサの砂山の歌で心に残る十三湖を津軽半島に黒川紫香君と二人で訪ねたのは五年前の秋だった。青森で工藤甲吉さんに会ってからその夜は十和田湖への途中の城が倉温泉泊り。実はバスで更に50分の処にある葛温泉泊り。葛温泉はブナの原生林に囲まれた一軒宿で、明治の文人大町桂月はこよなく此の地を愛し晩年をここで過している。みちのくの秘湯らしい落ちつきと歴史を持つお湯として前から私の憧れていた処である。

一昨年の秋にフルムーンバスを利用して東北を廻った際、前回にこりているので、相当に早く手を打ったが、やはり予約が取れずに城方倉から少し行つた処の酸力湯温泉に宿をとった。酸力湯は混浴の千人風呂で知られた湯治の湯である。

今年の10月、弟夫婦を誘って四人で東北を廻ることになった。前の失敗にこりて五月に交通公社で葛温泉の手配をした。余り期待していやはると、がっかりしまつせと妻に冷かされながら。さて今年には三沢の古牧温泉で日

市川鱗魚自選百句	(62)
同人アンケート「私のたからもの」	「ちよつと變つた故郷の年末行事」 (64)
心あたたまる九州への旅	(68)
落合正江さんを悼む	(71)
亜欧旅日記(下)ヨーロッパ編	(72)
初歩教室	(74)
「箱」	(76)
一路集「乱」	(76)
「紳士」	(77)
柳界展望	(80)
本社十一月句会	(83)
各地柳壇(佳句地10選/森井菁居)	(83)
■句会日より「翠洋会」/奥田みつ子	94
■12月各地句会案内	95	■編集後記
		97

黒川紫香	(68)
尼緑之助	(71)
田中正坊	(72)
阿萬萬的	(74)
田口虹汀選	(76)
西岡洛醉選	(76)
越村枯梢選	(77)

座右の句

忍従の母のエプロン眩しすぎ

(作者不明)

私の句

火も水も耐えて静かな足の裏

淡路 ゆり子

本一を自称する大岩風呂に一寸おどろいて、翌日は奥入瀬溪流を十和田湖まで往復、待望の葛温泉には15時過ぎに着いた。辺りの風物は前と變つていない。玄関に入ると、すぐ階段の上へ案内された。見ると急な階段が遙か上の方へ続いている。これはえらい事になったと足の悪い私は早速一階の部屋へ變えて呉れるように交渉する。部屋は幅広い廊下をはさんで昔の旅籠の感じで並んでいる。係りの女中さんがシャッキリした人で、注文の時間キツチリに夕食を運んできた。一階の部屋に變つて戴いて感謝してますと真顔で言う。どうしてだと聞くと、あの急な階段を膳部を持って上り下りするのは大変なんですと言う。食事を運ぶエレベーターのような設備を考えなければ、今に労働条件で揉めるんじゃないかと気がなった。各部屋に布団を敷く木製の車のようなものが廊下を通るとゴロゴロと地震のような騒ぎ。部屋は一番奥の便所に近い所だったので、皆が夜トイレに行くたびにオチオチ寝ておれない廊下の軋みである。

静かな山の湯のムードは何処へ行ったんだろう。観光バスを連ねてくる団体を受け入れているせいだろうか。昔の名の上に安易に胡座をかいて、ろくに客の見送りもしない経営方針のせいだろうか。

翌朝の八甲田山の紅葉はさすがに美しくかった。

川柳塔

西尾 栞 選

倉敷市 小野 克 枝

十二月善行いくつ罪いくつ
引き返す勇気を父の背にもらう
真すぐに飛ぶ噴水の一本気
満天の星に真顔をぬすまれる
方針に妻は片目をつむらされ
空振りもある人生が楽しゅうて

堺市 高橋 千万子

桔梗咲く亡母が好んだ色のまま
大島が肩に馴染んだ秋日和
ウソばかり聞いて来た日の耳そっじ
人間も猫もサンマを食べて秋
金もでき肩書もでき女でき
金よりも健康という落ちになり

島根県 堀江 正 朗

歩くより這うのが早い兎に還り

あの時に自慢一つを言い忘れ
盃はいいな明日が踊りだす

妻だけがまたも念押す聞き遠え

真中であぐら黄身にも似た暮らし

彩のない記憶で手繰る彩の数

出雲市 原 独 仙

秋深む想い出してはならぬ人

男下駄寡婦の魔除けと見てくれず

今宵また思い出させる流れ星

温室にない暖かさに触れ涙

三回忌近づくと亡妻よ何処をゆく

栞主幹の慶事に列して

人が好く人の祝賀へ五百人

松原市 谷 垣 史 好

赤インク思えば長いつき合いだ

彼も独身アホの坂田と言うなかれ

ゆうべはゆうべロールキャベツのいい匂い
余韻嬾々身のうちを虫が這い
風寒しイランイラクはまだ戦さ
真っ先に冬の気配の頭陀袋

八尾市 高杉 鬼遊

まつたけの一本を買う奢りかな
九州の雨も秋なり博多駅
からつくんち女地獄の三ヶ日
軽い男と軽い女に子が生まれ
紙人形苦勞ばなしはよしませう
風邪ぐすり藤原啓の陶器展

桜井市 岩本 雀踊子

藁一本もらって祈り深くなる
けだるくなる男の視野に白い道
こんな夜がいつかもあった雨の音
まるい月かくや姫から来たたより
吊橋の高さを白い雪が舞う
学歴を持たない父の弁当箱

兵庫県 遠山 可住

夕立ちが逃げて蜘蛛の巣揺れただけ
虫の音へわが一病をいとおしむ
ことわりの勇気を女持ちあわせ
気まぐれの旅天に会い人に会い
マニキュアの彩も陽ざしのやわらかき
騙されてよい勉強になりました

弘前市 波多野 五楽庵

一粒を都会の鳩にやる孤独
極楽のほうだと鬼を困らせる
気やすめと知らずに包むオブラート
この齡でこのネクタイの似合う人
弾き語り北の窓から秋になる
嫁姑やはり因果の梓の中

岡山県 嘉数 兆代賀

むつかしい話が冬を連れてくる
盗み聞きなどはしてない昼の月
年金でまさかを買ってる宝くじ
札束がうなずいている裏話
四面楚歌鏡へ笑いかけてみる
泣きごとと言うまい今日の陽が昇る

大阪市 西森 花村

稲光り課長が後に立っていた
下の子が生れて姉にすねられる
決めかねた買物安い方女取り
松茸飯炊き方電話で母に聞き
明治生れ年弱わですと強調し
刑務所に都塵を避けて這入りやはり
能面の魅力なんとなく分る
停留所どっこい地名に遠いところ
基礎工事もうテナントの募集ピラ
優待パス咎められそな顔が乗り
右近草一級河川なみの茂りよう

京都市 松川 杜的

院展の余韻コーヒの香に浸る

仙台市 川村映輝

中流の真中に住む年金者

末っ娘も嫁き残された老い二人

お互いにとりすぎました老い二人

読書の秋部屋一杯のマンガ本

夜郎自大リーダーにはして呉れず

定年になっても学歴誇ってる

島根県 堀江芳子

飽きのこぬ不思議夫と白い飯

旅三日お酒も添えて夫の膳

お話がご馳走などと久し振り

ひよっとしてひよっとして夫見えたなら

わがままのキャッチボールで恙なく

初対面心のギブスはめながら

八尾市 宮西弥生

金持のあとついてゆく三次会

生きのびた分だけ軽い罪つくる

秋の画廊で思い出つくるひとと会う

祝杯が待つて門出を信じよう

祝杯がすむまで紳士淑女です

男たち去んで淋しく秋の夜

孤りの灯独りの焰冬が来る

あれもこれも未完で昏れる短い日

日記帖埋めるとの字も佗しらに

和歌山市 西山幸

恋しくて候とは書けぬ便り書く

受け流すための台詞がととのわぬ

退屈だから白装束を縫おうかな

大阪府 津守柳伸

飽食の果てコンニャクに手を染める

神様の愛もときどき依怙蟲眞

キャンセルをしても消えないわだかまり

阿呆らしい噂のなかで老いを知る

省略が過ぎて訝る他人の眼

満月へ一氣に抜ける北の新天地

岡山県 土居耕花

いい声をした坊さんがよく稼ぎ

喧しい父は深うに埋めてやる

蕎麦殻の枕は少し饒舌で

欠伸するのもしよりの芸のうち

弔いで四五票稼いで来た候補

食うて寝て起きて小説にはならぬ

大阪府 西出楓楽

裏切りを考えている不整脈

複数型でしゃべり責任あいまいに

十二月もうアドリブは利かないぞ

負けるのは役者が一枚上のほう

軽いジョークで生爪をはがされる

白菊の凜とわたしを問いつめる

竹原市 小島蘭幸

なにもない強さ男というものは
仏にも秋には秋の飯を盛る

花時計少し遅れて来た男

茶断ち女のあつけらかんとあるいくさ
動物と暮らす余生もあるならん

熊本市 有働 芳仙
辞書にない言葉でヤング意が通じ

生字引一日馬鹿になりたい日

身をかわず嘘を師匠から貰い

自分だけ助かることしか考えず

アクセサリーのつもりで妻です美人です

伴せの星を見つけた月見草

松原市 玉置 重人

標的のひとつにされた廻り椅子

捨て駒のひとつにやがて叛かれる

群衆の中に落ちていた仮面

定年の菊ご近所に褒められる

松茸の香りに軽いドアをあけ

妥協せなあかんとと思うループタイ

和歌山市 松原 寿子

嵐呼ぶ逢瀬へこころ整える

編針も十指も炎える待つ人へ

寂しがり屋のくせして拗ねる雪の傘

行間に蔽しい風の音を聴く

透明な愛を宿して花の芯

ぬくもりを心に入れて封をする

豊中市 安藤 寿美子

歴史小説一々地図を照合し
燈籠の笠にみのむし逆立ちす

例のごとくネクタイ汚れている帰宅

二階から祭り見ている老夫婦

ギャル神輿でっせといえは立ち上り

かえりみて愁いなしとはいいきれず

倉敷市 稲田 豊作

お綺麗な一言欲しい長化粧

遅咲きの恋あだ花で散りました

不機嫌な妻ものさしで指図する

親の借金本家が持つという分家

札束の話は横を向いとれず

小心で律義で胃散嚙んでいる

呉市 林野 甦光

名刺と聞く宿坊のすき間風

さりげなく背抜きで冬を越すつもり

傘持っているので雨がよう降らず

灰皿を洗って罪を逃がれ切る

風と来て別れ上手な都会の灯

少し汚れたとまり木の美女で

米子市 林 瑞枝

シナリオを一步踏み出てちちよははよ

めおと茶碗の音色がとけてゆく夜景

わくわく葉を拾いつづけていて羅漢

少し狂うて太鼓に合わず廻し数珠

ハギレ百枚老母のふところから生まれ
灯を消して深いかまどの風となる

寝屋川市 稲葉冬葉

当然のように一円捨いあげ
駐車違反で別件ついてくる

野仏の涙乾くことしらず

姉さんに悪いと思う角隠し
ゆとりある生活でないが犬がふえ

隣から見ればバカ犬かも知れぬ

名古屋市 越村枯梢

包み紙の中味は知っていた仏
石地藏おいてけぼりに陽が落ちる

墓参道生きて登ると息が切れ

仏像は無言で住職昼寝する
天まで伸びる梯子を買いに村を出る

直線を歩こう愚鈍な僕だから

西条市 片上明水

秋を着る女疑い深くなる
内緒ごと茶の間の障子白すぎる

秋の空真珠は海へ還りたい

菊日和女房の口が軽くなる
稲を干す丁度真上を東京便

言訳を考えながら夜の靴

米子市 石垣花子

あの山を越さねば麦の飯も無い
夫病んで独りぐらしの堅い鍵

雲の峰渡る掙が象にあり
いつからかジント覚えた象の耳
善人にとつても書けぬ私小説
手の節へ母の思い出ためている

米子市 野坂なみ

盆栽になつても松の風格よ
ご先祖がそつと蒔いてた柿の種

国文学をもつと揺すつてごらんなさい
王子様は国文学を選ばれた

ときどきは私の換気扇まわす
重陽や亡母に供える栗おこわ

米子市 林荒介

猫の髭ほどの威厳はもっている
影武者の眉は太目に直される

旅からは影をときどき見失う
神棚に一寸あずけた薬壺

ちちははの影をしっかりと見て歩く
手ぶらにはお猿も鹿も来てくれぬ

高知県 松岡三吉

日めくりの一枚にある命かな
生涯を飽きぬ鏡を女もつ

子は宝積木くずしの子も宝
気兼ねなく生きる二合の米を炊く

恋人と知つてか其の後吠えもせず
子は宝唯それだけで来た夫婦

出雲市 園山多賀子

秋茄子の艶賞でてから嫁を褒め
赤いバラ賞でてハイネの詩が好き
棗熟れ少女の夢も熟れていく

大和路にロマンを拾うこぼれ萩
りんどうの供花紫の似合う故人
永らえて生き恥晒すななかもど

また母のぬくみにふれる袖だたみ
一つだけ猥に食わせぬ寡婦の夢

黙々とただうつつむいて飲む代理
妻の灯へ帰る男の小銭入れ

ただ耐える漬物石は母のもの
青年にツケが溜ったふところ手

決心をしてから無口になっている
珈琲店のすみに安らく椅子がある

内緒話を聞いたあなたも共犯者
隔世遺伝娘に放浪癖がある

突然にお会いできるも此の世なり
妊婦眩し秋の陽射のなかに居て

老いの眸に慈母観音のおわします
ささやかな楽しみ朝の豆を挽く

析るしか知らぬおろかな母である
マンションの隣はバイク持つ佳人
家のことなんにも知らぬ判事さん

尼崎市

西村 かすみ

松原市

佐藤 藤子

西宮市

林 はつ絵

柿の葉の一枚家伝削り出す

和歌山市

福本英子

おだてにも情にも脆い欠け茶碗

消えかけた焰へやつかみ風が吹く

茶を曳いて娘三人よく笑う

百舌鳥鋭声静かに老母が病んでいる

一羽だけ翔ぶ同室の千羽鶴

母家より右へは出ない寄附集め

倉吉市

野中御前

小説を読み読み脊の尻をあやす

胃に溜る空気は吸わぬことにする

地球儀の日本は赤いとうがらし

首やると真赤なうそを吐いている

直木賞の妻が手がけた五目飯

彼岸花先祖の墓にむれたがり

岸和田市

古野ひで

もやもやが晴れた顔して娘去に

何かあるあの顔色は気にかかる

四季の花相手に女ひとり生き

佗びしさはひとり膳の目玉焼き

じんわりと効く葉なら信じよう

めぐりあいよい事許りと限らない

パソコンをかうて愚かになるつもり

電子郵便が帳場を慌てさせ

白内障病んでそろそろ老化かな

竹原市
森井菁居

自払いは便利なりけり気を許す
ホップ・ステップ・ジャンプといかぬから悩み
冬は暇で冬が嫌いな花マニア

重欧の旅(四句)

豊中市 田中正坊

アムールの流れに響くバラライカ

砂塵舞うキャラバンの夢の跡

蒼穹に描く弧重欧を結ぶ橋

円ドルリラフランで狂う計算機

秒針の回る速さよ行く雲よ

ゴールまで走るほかなき競走馬

尼崎市 春城年代

老いらくの恋にもくせい匂い過ぎ

大正のおんなを描く濃むらさき

本屋出て焼とりの香に誘われる

先祖からの手足が恙なく動く

亡母の櫛ひき継いだのはなかの姉

某月某日待ち草臥れたことなども

大阪市 鈴木節子

耳寄りなはなしが横を通りすぎ

ふるさとを捨てて乳房がかるくなる

少々のことは大目に見える齡

街角でホットな種を拾うてくる

浅漬けの茄子少しおだてに乗っている

しばらくは風に吹かれよう秋ざくら

堺市 藤井一二三

うしろ向きに走ろう悟れるかも知れぬ

男泣きの別れは夜霧の駅にする

四天王寺の亀は経木を覗き込み

島を出る決意を橋に試される

孝行か不孝か親の夢も見ず

飼主の心を犬の眼が笑う

唐津市 久保正敏

偏差値は言わずゆつくり虹を追う

哺育器がもうライバルとして並び

美しい毒矢的になりに行く

待たされてだんだん痩せる毛糸玉

定退の婦長にジョーク通じない

オーバーホール出来ぬ脳波が錆びてくる

富田林市 藤田泰子

追いかけて行くにはブライド許さない

コンパスの短い敵に油断する

後悔をしてもポストに入れた後

子の前でとても愚かな母になる

蓋あけるまでの夢なり松花堂

紳士には淑女の貌でおつきあい

近江八幡市 前川千賀子

人の世の定め糸も結ばれる

自縛とも思うみたりの子を育て

一人から一人に還り冬を待つ

近松を真似た台詞で試さんか

今だけは夫で父でない人よ

傷口を癒やしはしない西空

和歌山市 内芝 登志代

夫が居て子がいて私にある世界

乗りきった男の顔がすばらしい

追憶の道に野菊が咲き乱れ

貼り替えた障子の部屋のやわらかき

起ち上る杖ともなつてくれた母

反対の立場になつて聞く叱言

倉吉市 奥谷 弘朗

年金の粹でいたわり合つて生き

人様に期待をされる子に育ち

野心でも無いと弾まぬ性にされ

思い出が一ぱい老後が素晴らしい

念願の土に希望の芽が育ち

生きて来た苦勞のにじむいい素顔

伊丹市 樫谷 寿馬

誕生日の妻と大正温め合う

秋一輪妻エプロンに咲かせけり

冬を待つ襖障子の白さかな

輪に入るときの会釈はきこちなし

野菊を前に秋の地酒を飲み干せり

京都市 都倉 求芽

世渡りの時には火の粉もかぶりまず

踏んばりに耐えた柔い土踏まず

妥協する場面が増える五十坂

玉手箱に核のボタンがついている

裏の隅今度は金魚の墓になる

倉敷市 野田 素身郎

みちのくの日暮れが早い一人旅

いつのまにか愚痴が自慢になつてくる

単身赴任酒量が増える秋が来る

丁寧すぎるほど丁寧な寄付趣意書

後遺症定年までは頑張ろう

大田市 藤田 軒太楼

勘のいい妻で口実練り直し

不本意ながら古老の顔をたて

真偽はさておき合づち打っておき

街角の出会い焼けぼつ杭に火がついた

その顔で面食いなどと笑いぐさ

平田市 久家 代仕男

なあお前父にも有つたよ非行歴

このお札木の葉だつたらどうしよう

見つめると私も呆ける昼の月

大輪が匂い日本の秋にする

腹這いになると伏射を思い出す

米子市 小西 雄々

民話聞く秋茄子うまし爛がつき

過疎すてぬ子に嫁が来た祝い唄

舟舵を妻にまかすと風つづく

惚ばれる方は鼓動に気付かない

母の背で母の思想へ甘えたい

柳井市 弘津 柳慶

あの頃のロマン雑草となりけり
浅い縁でした静かにサヨウナラ

主婦として母として過ちを許さない
肩揉んでソツと本音を聞きただす

パイパスの下をのぞけば蟻地獄

美祿市

安平次 弘道

凡夫にもスリルが欲しい曲り角
四コーナー駄馬にも妻の鞭がなる

空缶を捨てる道徳心捨てる
誤解まだとけず揺れてるヤジロペー

水虫に根気のなさをあなどられ

大阪市

江城 修史

忘却と風化の中に置く絆
地に還る病葉生きるだけ生きた

めぐり逢い男同士の小さい嘘
ままならぬ世だから仮面つけるのさ

媚を売る今日のノルマを信じ切り

大阪市

中川 滋雀

妻の手に寿命を任すサロンパス
晴ればれと駅のトイレで思い出し

アスファルト破れ目の草にも深い秋
鍋井克好みのタツチで暮れなずむ

ハーモニカ月の砂漠をかけめぐり

樞原市

岩井 本蔭棒

出向の先が意外と性に合い

ああ孤児よソ連が攻めてさえ来ねば

もう少し肥えたく苦心してる僕
税金が嫌でぶらぶら定年後
ひと様の野球でここはつかみ合い

鳥取市

両川 洋々

だまし舟これも愛だと決めて槽ぐ
子は産めぬ才女の乳房泣いていた
運一つつかめぬ父を子よ許せ
ロボットが僕が渋々判をつく
会者定離俺を憎んだままに死に

富田林市

岩田 美代

老姉がちんまり住んでる葉鶏頭
コーヒーと秋の深さをおもいいれ
その中の一行だけは甘えたい
友達が秋の特ダネ持つてくる
それなりに葛藤があり十二月

京都市

山本 規不風

握手する激情の手が震う
横這いの不安で峰が歩けない
古都税の結着もなく値上げする
聞くだけは聞いて動かぬ馬の耳
以心伝心少し動いた赤い薔薇

桜井市

河合 茂雄

男手の用事は日曜まで残し
吊忍あなたを待っている窓辺
切符握って安心出来ぬ闇の中
新世紀までもつやろか老いの坂

釣合のとれた夫婦の指定席

兵庫県

辻

文平

点滴のリズムほんとの夜になる
切札を持って揺れてるイヤリング
ちとずれた妻の演技を見る暑さ

言い訳のスラスラが気に入らぬ
旅に出るあなたの影を踏むように

今治市

越

智

一

水

人間の良さとたん場で出てしま
木犀の匂いへ客がひとり増え

妻の死がそれから日々を長くする

人間と対話をきらう冬の雲

エタイの知れぬおばけが女の中にすみ

島根県

小

砂

白

汀

孤児たちへ地球自転をゆるめない
風はらみ帆柱古希の手にあまり

名剣になりたい火花玉はがね

ゴムバンドあまりサイズにこだわらぬ
花ざくろどんなに媚を売ったとて

大阪市

藤

田

頂

留子

成せば成るそのお手本はタイガース
阪神のフィーバー虎年もつづきそう

二人席はんばのように一人かけ

そんなもん捨てろと他人だから言える

御免下さい子連れて宗教売りに来る

大阪市

北

勝

美

人命の尊さ老いの替おむつ
八方が丸くおさまる安楽死

みんなみな口に出さないだけのこと
椎の実の童話に尽きぬ水の音
ふる里のブロック塀にある白け

松江市

恒

松

町

紅

まっとうなものも一人居る呑み仲間
掛け軸の値打ちも知らず家を継ぐ

ひとすじの煙虚しい秋ざくら
故里を語るに亡母のわさび漬
あと半分晩酌追加して達者

松江市

小

林

孤

呂二

生きてゆくはずみを長男から貰う
名を惜しむ先祖で堅く育てられ

渋滞へそれ見たことか歩道行く
チリ紙交換のマイクへ思案打つ切られ
息抜きはやっぱりお酒にかぎる連れ

松江市

柳

楽

鶴

丸

やわらかい言葉でブスツと胸を刺す
中秋の名月へ写る恋人よ

匿名を使う男の卑怯者
柔肌をさす痴漢が海にもいる
死の瞬間踊りたいラストダンス

松江市

舟

木

与

根一

路地抜けて急に腹空く秋の暮れ
レジの娘が若くて宗薫買ひそびれ

草屋も亦樂しこおろぎくつわ虫
前線が停滞トラキチ右往左往
隠れトラ二十一年目に目を覚まし

哀屋川市 柴田英壬子

どの柿も陽をたつぷりと器量よし

小説へ売れる半生抱いている

憂さ晴らす手段女の衝動買い

肩揉んでやると主人が呼びつける

可哀そうすぎると言われ働けぬ

富田林市 板尾岳人

首刎ねた音が聞える十二月

十二月亡母の財布が見つからぬ

貪欲な右手で握る男傘

魔術師の姉は茶粥を炊いて待つ

女傘悪い男と歩く街

吹田市 西川景子

かき廻される様な仲ではありません

こうなったわけを面白げにギブス

いい答出るまでカード切っている

回り道ばかりしている天の邪鬼

退けば万事解決するのなら

西宮市 藤村宏子

諍いのはての落葉は吹きだまる

子の巢立ち実感となり銀杏散る

絵ごころがほしいあの塔あのみじ

文庫本の手軽さすぐに忘れられ

つましさへ子と折れ合った遠い日よ

大阪市 柳原静香

誕生日亡母の齡に近くなる

天気予報信じ切れない洗濯機

秋深む故郷恋し人恋し

十月の風が誘うた母の靴

平凡な暮して猫と丸く寝る

東京都 増田次章

勤勉のジャパン世界が目の敵

一緒にいるだけでやすらぐ友を持ち

おしゃべりを聞いているだけの親孝行

抵抗をしてもひたひた老いの音

予想した通りの理由で断わられ

和歌山市 垂井千寿子

方向を変えても哀しいキリスト像

灯へ向かえば惑わすワインの朱

千手観音どの手も私を守る御手

上ばかり眺めて自分を見失う

青空の色に誤解が溶けてゆく

玉野市 小谷仙山

腹の中どう読まりようと秋の風

答二つ出ても不思議のない夫婦

秋なすに風邪の食欲助けられ

正論を烏裏から攻めて来る

味方にも敵にも妻の顔が有る

岡山市 時末一灯

裏方で終るさだめの靴がちび
校門で別れてからの明と暗
久し振り笑った寄席をふり返り
はしご酒ならいいんだがはしご医者
北の窓男のさらし首に会う

和歌山市 堀端 三男

精巧なメカにもきつとある遊び
亡父の齡越えてレールに乗りきれず
裏話知ってるだけに気を遣い
さりげなく波除けになる祖母だった
せめて最後は大往生と言われたい

尼崎市 春城 武庫坊

靴を磨いて行く先を考える
軽口を叩くが本音言い出せず
判捺して他人になって先に出る
閑があるから名案が浮かばない
不器用に生きて情を知らされる

米子市 青戸 田鶴

絹の道砂のロマンはそのままに
一瞬をさけて神仏ただ想う
コスモスよ秋のころを詩おうよ
人形も照る日曇る日もっている
友とまたはぐれてしまふ秋の道

米子市 菅井 とも子

姉だけが知ってる亡母の涙壺
付き添いの顔に病状書いてあり

わかとり国体

選手等をねぎらうお茶の点て加減
衝動買い返してからは良く眠り
思い出にやがては変わる柿の種

米子市 雑賀 美世

明日からは一つで足りるティーカップ
はぐれ鳥風が止んだら飛び立とう
歳時記に指紋残して老母は逝き
故郷の訛りにはずむ老母の毬
訛から私の秘密洩れていた

米子市 田中 亜弥

亀裂すこし卵の動き早くなる
ビー玉を勿体ぶって兄はくれ
針穴の光が迷う日暮れどき
良心が疼き割箸わり切れぬ
朽ち果てた井戸神様として祭る

米子市 寺沢 みど里

片言の訛を絆だとおもふ
青春のロマン絵皿の真ん中に
人形に聞かすピアノを弾いている
マイカーを同じセリフで送りだす
年齢をかくし切れない象の肌

米子市 澤田 千春

赤とんぼコスモスにゆれ秋の旅
他人とは思えぬきずな掌を合わす
窓ごしの秋の空から亡父の声

雨だれのリズムが狂う迷い風
人形の帯があせても人を恋う

新宮市 川上溪水

本当の苦労は口から出たがらす
落書きの中に本音も夢もある

中流が一番金に苦勞する

おみくじに一寸先の運をみる

汗知らぬ金が倅せ買いたがり

岡山市 川端柳子

栞先生へ祝吟一句

今日よりはダイヤモンドへ光る道

目立ちたがりやの陽もそろそろと冬仕度

生きている証父の父母母の父母

近くて遠い他人になった丸木橋

すばらしい勤で羽音をたててくる

鳥根県 榎原秀子

十三夜月と連れだつ帰り道

秋雨久し二人の話題とぎれがち

立ち話噂の人がやって来た

曼珠沙華遠い仏のかおに逢う

ゆったりと心豊かに老いる幸

西宮市 野呂鶴汀

凶も良しこれから吉へ向う運

恐ろしや背に陰口の目を感じず

蓮枯れて幾何学如く首を垂れ

お見合の席で欠伸をかみしめる
見送りの犬も改札通り抜け

八尾市 山下みつる

秋の宵食欲強い客の群れ
赤だして鯛の頭が狙われる

売れ過ぎる苦勞もあって鮎のれん

冗談もごますりも下手草履取る

子想屋の智恵迄借りて馬券買う

鳥取県 林露杖

木瓜の実が少し色づき童画めく

透折をした友の面に紅葉映え

足腰は弱り食欲衰えす

冷暖房人間社会に戸を立てる

一言を呑みこみ窓の雲をみる

大阪市 神夏磯道子

両方の耳で聞かぬと信じられぬ

種なしぶどうと話をしする満ちている

天高し五十は五十の夢がある

つくしすぎもう役立たぬ梅の種

野次馬に囲まれ勢い下げられず

鳥取県 森田布堂

納骨堂ロッカーにして過密都市

ワイン飲んでるのに毒入りというニュース

鉄橋の下から月が顔を出し

海に捨てた自信犯人口割らず

落穂まだ拾う農家の血が流れ

岸和田市 福浦勝晴

和歌山市 若宮武雄

類は友呼ぶ同士馬で議論する

月中天錆びたナイフが落ちている

師走の風を温いと思う見合の帰り

天皇を批判する孫二十一世紀

十二月三十一日寝るとする

松原市 北野久子

惚けぬよう世間話と熱いお茶

下の世話ならぬ呪い生真面目に

国勢調査娘の欄は娘に書かせ

恋人が出来て手助けしてくれず

手招きと笑顔で窓口から呼ばれ

町田市 竹内紫鏑

神様の名を冠せられ鞆を逃げず

第二の人生メガネの塵わずか

禍福あざなう検診とクラス会

図書館のカード旧師に著書がある

高齢になられて拍手する陛下

寝屋川市 宮尾 あいき

咲き残る芙蓉を蝶はみのがさず

顔知らぬ亡父そっくりの子の体

外の空気吸って来るよと出たつきり

嫁の不足どころか我が体意に叛く

我枯れぬ異性の中にときめかず

同じ道たどって何故に姑と嫁

一人だけルール守って疎まれる

焼き芋も一緒に食べるお人柄

素うどんがほろい儲けを考える

お日さんが西から昇る旅心地

スパーの魔法は二円負けてある

逆説で出した答にうそがある

名案がひらめくうまい酒がある

再起する足へなぐさめなどいらぬ

馬鹿笑いして倅せをかみしめる

大阪市 本間 満津子

恙なき日々おかげさまお陰さま

音のある絵はがき友の旅行談

酸欠の部屋で堂々巡りする

安心して太陽美しく沈む

流行の色着て流れのまま流れ

岸和田市 原 さよ子

六十の手習い先生困らせる

年毎に亡母そのままと友が言う

芋畑子等の歓声よく響き

阿呆になるこつも覚えて家平和

足の傷痛んで今朝の冷えを知る

宇部市 平田 実男

娘と孫が去に淋しさと静かさと
解決を金に任せて共稼ぎ

喧嘩せぬ頃からひびが入り出し
光水空気もつたない過疎地
気に入らぬ向もあろうに吹き流し

大阪市

天正千梢

あの人もこの人も戦場で耐えて来た
草の根運動の署名はためらわず

お中日まぎれもなしに彼岸花
郷愁は国語讀本読みかえし

水涸れし二級河川の広い幅

神戸市

山口美穂

法要の準備一枚ずつ畳替え

球根と共に秘めごと埋めておく
はんなりと秋バラ咲いて日曜日

人恋し秋霖猫はあくびして

睡魔が襲う思考力ゼロ床に入る

唐津市

浜本義美

一日の無事を亡父へ掌を合わせ

生活防衛新聞よりも先ずチラシ
不器用が運転免許だけは取り

あのひとが居るから歩く雨の中
伝統の灯は絶やすまい紙を漉く

唐津市

田口虹汀

楢山でまだ捨てきれぬ夢を抱き

幕切れが良くて楽しい夢となり
方言で通る男の太い眉

持ち寄りで祝う団地のクリスマス
夢一つ持たぬ男の高野

唐津市 仁部四郎

方言で夫婦喧嘩を引き分ける

肩書は忘れず弔電だけが来た
出張で単位がふえた世間学

大衆の英知造花に水をやり
社の赤字お茶飲み論はまだ続き

寝屋川市

江口度

いわし雲冬のスーツを買いに行く

みよちゃんも嫁いだそうなふところ手

特別な味方はずくらないように
早朝ににわとり鳴いて騒音罪

母さんの振り子が止まるお正月

唐津市

浜本久仁於

昭和史へまたまた増えた一ページ

ふる里へ哭きにくるのも不肖の子

悪童が綴る故郷の立志伝
柿熟れて背振は哀浪日和なり

旅を吹く六万石の秋の風

大和高田市

岸本豊平次

退院の空の広さに眼がくらみ
病窓へ忍び寄る秋知る孤独

巻きずしを巻く手が天気予報聞き
おふくろに内緒と妻と待ち合わせ
カラオケとゲートボールを趣味として

姫路市 人見翠 記

計らずもまた観音様の日のデート
家中で猫が良い場所占領す
ホーム炬燵に猫の寝ざまを猫嫌い
簾巻けば夏もゆくなり法師蟬
お見舞いと香典つづく夏の尽

大阪市 大塚節子

星廻り見合い断る伯母が居る
人さし指が電話のコードですわねている
フィクションをノンフィクションにして生きる
蕩たけてお河童頭が才女めき
神様がひいたレールは曲つてた

高知県 赤川菊野

孤に生きて人の情けの裏表
青雲のロマン竜馬のふところ手
生きて来た証かくせぬ鏡ふく
茄子の花嫁も姑もない家に
仲人を責めてみたとして子が五人

西宮市 杉浦婦美子

大正の思想も人もうす汚れ
暴走もガリ勉も同じ青春さ
しゃべりすぎ減点ママを自認する

プライドを少ししたもてる金をもち
映像の不倫をさめた目でみつめ

兵庫県 藤後実男

犯罪が入りしている非常口
ふる里に着けば無口の駅と化し
親知らず塾の梯子で子は遊び
塩壺から無実の声が聞こえくる
男には男の太陽昇つて来

西宮市 西口いわゑ

あいまいな答えの中にある恐さ
殿様の答えはいつもきまつてる
十三夜可愛い恋を見つけたり
一番の母のぜいたく宵寝なり
満月の夜は案山子も恋をする

和歌山県 天満三千代

母娘とも似ている場所にある黒子
言いそびれ会話の渦にまきこまれ
はり過ぎた糸を哭かせる風がくる
六十路ゆく一寸変えたい人生譜
唐がらし甘味を誘いほめられる

八尾市 宮崎シマ子

花に生れ菊の香りの死を願う
新しい靴にかまれて紅葉狩
婚の荷の片づかぬまま冬仕度
住民登録して引越が落ちつきぬ

再会へ過去ある人が又もつれ

諫早市

原田メイシユン

鳥取県 森山盛桜

潮騒を聞いて漁師の子は眠り

漁師の子希望は水平線の彼方かも

職退いたと思えば女房の指揮下入り

謹告の貼り紙バスの又値上げ

何が不足か親父の心臓ストライキ

高石市

牛尾緑良

円周の外で遊んでいる鳥
幸福の色を木洩れ日から貰う
電話器に背かれて出る冬の雨
雪だるまのまままで死にたいなと思う
亀の背を叩く筈が自戒する

大阪市 長谷川春蘭

母の生きざまよ大きな座り併眠

助走路で夢温めている若さ

明日からは追われることになる記録

サイン帳或る思い出のスタートに

情熱を支える細い腕がある

羽曳野市

佐野白水

泡立草嫌われつつも黄に燃え
今日からは危険ともども免許証
消火器を使わぬままの火消し壺
人生の白地のページ繰るじやなし
どこにでも止まる軽さの糸トンボ

富田林市 田形美緒

国勢調査に間に合いました産声

老夫婦素直に国勢調査書き

曼珠沙華老母の極楽へ道しるべ

運動会の実況放送へ孫の声

今日一日イジメ忘れて競技する

和歌山市

神平狂虎

食い下る息子に父の瞳が細し
墨染の衣に包むのも煩惱
喪服ぬぐと赤い靴を買いましょう
飯の世と悟れば悟る曼珠沙華
好きな道支えてくれる手内職

守口市 羽原静歩

雨に打たれて男になってゆくおとこ

引き潮の言葉は胸に溜めておく

口笛で自分を呼んで見てごらん

善と悪椅子取りゲームまだ続く

そんな言葉で明日を飾らないでくれ

王様の椅子から枯野が見えてくる
金屏風喜劇と悲劇の始まりで
人形も私も今夜は不眠症
ちろりん村にも意地悪の子はいらだろ
悪人がベンチで見ている夕刊紙

笠岡市 松本忠三

三度目の正直からも見離され
高齢者の波が押し寄す余生なり
どっちみち白でなければ黒であり
金貯めてどうするのかととうるさくて
女だてらよその女房でほっとする

奈良市 森田 カズエ

新聞のきょうの占い当りそう
梨狩りも楽しかったが重かった
悲しみと怒りに耐える自販機よ
チャンネルをかえても同じ事故ニュース
生まれたを生れ落ちると書く不思議

大阪市 河井 庸 佑

人前で叱り反感買っただけ
つい本音出した自分がかしたなく
愚痴言えは己が負けたことになる
歩を金に変身させる腕を買い
負けて勝つ心のゆとり失わず

東大阪市 森 下 愛 論

飲んで来て家で飲むのは別でっせ
ご近所の喧嘩でビールの気が抜ける
金のこと言うなと益持って来る
きついこと言うけどあんたの為でっせ
障子に目壁に耳あるニュータウン

河内長野市 井 上 喜 醉

新しい敵がアンテナ張りにくる

強がりと言うのはよそうマイペース
薬にも毒にもなりません風見鶏
箸紙を挿んだ旅の時刻表
値切るのが好きかも知れぬ大阪弁

倉吉市 渡 辺 菩 句

駄目だそうなあすは君の身わたしの身
日本列島洗い浄める雨であれ
地球の骨である石ひとつ拾う
窓へ来た月止めて煙草の火を借りる
悪玉も笑えば白い歯をみせる

倉吉市 藤 井 春 日

人生を他人まかせて来た四十路
一年のけりつかぬまま除夜の鐘
愛憎は年の流れが持って去き
ふる里に童心浄土あり老いを病む
ふる里の秋を鱈腹喰うて去に

守口市 野 呂 右 近

老化です言われて返す言葉無し
資本要らぬ言葉で他人喜ばせ
塩胡椒振るよう一言言って置く
自販機のボタンを押して秋を酔う
泣けるだけ泣かして置くも思いやり

神戸市 仲 どんたく

孫が来る日の朝の髭を剃り
御先祖を人質にして回向料

ポディビル美人薄命どころかわ
二次会の余力残して手を締める
隈取れば千両の顔の人となり

和泉市 西岡洛醉

振り上げた拳に平和見当らず
鈍行の暮らしも太陽隔てなし
実直の男の朝に透き間無し
マンションからスピッツと中流顔のぞく
ひと時の無言逆転劇を待つ

倉敷市 小幡里風

蛇口から秋が飛び出す水の冷え
虫喰いの傷を隠した赤い羽根
十月の風ミニスカートを覗き込み
雲動く心はゆるるコスモスの
衣替えこの世を少し暗くする

岡山市 井上柳五郎

もうすこしは頑張れる筈と老いの悔い
紅唇のご意見男つけ入れず
すぐ帰るまた言い乍ら腰あげず
餅屋に委せておけと庭師言う
自主性を放任母娘孫でもめ

西宮市 津山冬子

菊香る身内の招待カレンダーに
老いてなお嗜む紅は捨てられず
三面が人ごとでない目がおびえ

いざこざのあった昔を笑いいい
よく笑う友も悲しい過去を持つ

東大阪市 崎山美子

風向きがかわり逆転する立場
ふるりの風が恋しい都市砂漠
めいめいにメモを残して妻の旅
三枚目に徹し素顔など見せぬ
連風の優雅な舞を乱す風

姫路市 丁坪サワ子

冷蔵庫開けて飽食歎く姑
億よりも日銭の喜びかみしめる
ほどほどを愛して此の世丸く生き
厨から軽いリズムの今朝の嫁
自惚れを失くせば急に齡すすむ

岡山市 花田たけ志

律義者とんだ口火を切らされる
粘れとは強いて言えない過去を持ち
持ち味を勝つてるうちは讚えられ
一言を言いたい団扇の動き急
自然美が見ればポーズのいやらしい

鳥取県 新家完司

祝杯をかざせば月が笑ってる
無礼にも機械の腕が通せんぼ
金箔の紋にコロりとだまされる
わたくしの罪は忘れて口すすぐ

かんじんな事は忘れてゐる顔だ

尼崎市 角野かず子

相続のもめごとを聞く夜の雨

日本語で書けばすつきりするものを

人を指す指が自由になりたがる

曲り角さびしい父の目に出合う

下駄箱の真上に蜂が巣を作る

鳥取県 中原 諷 人

雑兵の汗は忙しく落ちて秋

破れ傘ですが伴せ抱き続け

艶ぶきん温い先祖の貌を拭く

ああ糸図アダムとイブの笑い声

啼き終えて虫のロマンも儂すぎ

西宮市 朝山 千世子

地球には地震太陽だけはヒスが無い

虫の夜を身につまされて読み更ける

旅の夢空気枕が知っている

美田遣さぬ先祖で努力の子が育ち

先祖の血芸能に誇り持つ自信

西宮市 奥田 みつ子

芋判に虎が可愛く彫り上がり

誤解して誤解もされて秋が逝く

秋の夜は作り話がなお冷える

日の当たる道が続いてゆく怖さ

待ち合わせ自問自答の時刻む

大阪市 板東 倫子

大事件ばかり続いて猛暑去る

やさしきを見失うての長寿国

イエスマンを決めて老後に安住す

持て余す衝動買いの派手な服

満ち足りた筈の人から愚痴話

弘前市 田中 叶

鳥葬の山へ続いてゐる小径

ふるさとのりんごの幹に吊るラジオ

新聞に包むと餡が少し出る

ご飯粒付いて開かぬ借りた本

綱引きの外は一番ダメな組

高槻市 笠嶋 恵美子

支え合うことこそ愛と思ふべし

寂しさの果てやすらぎの海を描く

群衆の中の一人で傍観者

稲妻に身を任せたり白昼夢

一粒の米に神有り仏あり

和歌山市 坂部 紀久子

眠られぬ程の心配事もなく

足踏みの秋へ焦れてる一張羅

うつ伏せで絶対死ぬぬ油虫

水割りへマイクの虜が居て疲れ

からくりが無くて善人行き詰まる

島根県 松本文子

ああすればこうすれば結論のない一人ごと

鬼灯をつるし今夜は亡夫と逢う

陽が暮れてカセットテープ巻き戻す

解き放つ無用となった千羽鶴

コスモスの咲いて悪夢の季が過ぎる

岡山市 行吉 照路

職場旅行までも見積り審議する

湯豆腐の季節入歯も出来あがり

病室に健康体が小さくなり

口笛をふいて懐しの土手に出る

花時計雨にもめげず時刻む

出雲市 吉岡 きみえ

コスモスの彩に迷うた赤トンボ

目ざめれば大車輪のねじを巻く

漬物で酌める男に他意はない

またひとり友を見送る野辺の露

台風一過なつめいよいよ色づきぬ

神戸市 山片 紀雄

これだけは残して置き度い秋の空

よく走りよく跳ぶ民の貧しくて

団地族孤独に棲んで恙なし

善人と言われるほどのお人好し

人の世はとかくうるさい趣味に逃げ

倉吉市 広本文子

桐一葉不意の訣れを告げにくる

深い森の一本の樹とめぐり逢う

百輪のバラいっせいに討ってくる

許す朝コーヒーカップ手になじむ

星座から青い約束落ちてくる

高槻市 竹内 花代子

一日が短く秋の用忙し

聾では無いと言いたいコマージュ

三の宮歩けば三の宮の風

早朝の散歩に拾う銀杏の実

朱の橋が綺麗な散歩の水鏡

尼崎市 奥山 美智子

ジョークで消せる心配ならよいが

愛をさとつてリボン結びがうまくなる

持病持つ父に弱味が少しある

虚しさをつつみ港に灯がともる

夢抱けば昨日の空がなお高い

岸和田市 芳地 狸村

金婚は妻と築いた金字塔

吊り橋をすっぽり包む山紅葉

へそくりは素直に出せぬ妻の意地

あほらしい前例生きている役所

子や孫の十膳そろった秋まつり

境港市 細木 歳栄

淋しいがあれから嘘が上手くなり

泣けるだけ泣いて女は身構える

男がいて女がいて始まるドラマ
風に乗りたい旅したいこぼれ種
装うて溜息つけば帯が鳴る

島根県 北川 民子

生ビールうまし自信が戻りそう
薬草にも毒草にも水を給わる
厚顔が得するような世の仕組み
諦めたところへ甘い私語もらう
世の移り働き蜂が叱られる

吹田市 茂見 よ志子

上げ底の箱につめてる人生譜
ロマンスを嫁に話して見なおされ
朝焼けに雨傘持たす自己予報
其の話聞いた聞いたと子に言われ
先着順並んで焦る限定品

今治市 矢野 佳雲

欲はもう無いすんなりとナンマイダ
冗談で叩いた母によろけられ
生きるとはこうと獣も羨する
駅の灯も濡れて夜明けの寝台車

大阪市 鍛原 千里

素直だから淋しそうな顔をする
燃えつきた別れへ憎や彼岸花
あやまちをそつと見ている木守柿
満月に別れ話が切り出せず

風雲を読んで男の握り飯

横文字の小説好きな泡立草

丑満の風は草木も眠らせる

札束にダッチロールをする男

鳥取県 金川 満春

生涯に変らぬ連れは矢張り妻

福祉法愚痴や不平は言えませぬ

井の蛙飛び出せ人生和に如かず

喜寿の坂急くなあせるな慌てるな

宝塚市 丸山 よし津

時は秋運動会が風に乗る

身の程を知ってる間口揚げない

断われず宗教新聞読んでいる

分譲の角地売れずにすすきの穂

高石市 浅野 房子

名月や人の声するバルコニー

菊日和言うこともなし旅に出る

香りだけの松茸となり秋深し

行楽の疲れは帰途を寡黙にし

箕面市 坪田 紅葉

花かえて団子を供える嫁がいる

涼風で主婦は何かと多忙です

納得がいかない親子の変な意地

余生なし現役のまま孫の世話

倉吉市 渡辺 独歩

羽咋市 三宅ろ亭

十行の余白埋めるに重いペン

哀歎の歴史に挑む菊人形

報恩講済ませば冬が追っかける

無器用な夫へ器用な妻がつき

芦屋市 竹中綾珠

女性美を描いて残した絵画展

美術館の庭の白萩真盛り

中流と思う我家の庭の萩

朝鮮の松茸で今年の秋をしる

枚方市 稲葉星斗

自転車で廻る飛鳥の秋祭

独り旅万葉めぐり追い抜かれ

道訪うて明日香の村で柿を買う

飛鳥道野菊小さき別れ道

羽曳野市 中村優

香典の高の高さに負け大姉

大虎と思えば意外泣上戸

考えてみな平等にさせぬ遺書

ライターのか細い焰よ宮任え

大阪市 黒田真砂

最終の電車素顔をさらけ出す

緊張をほぐす茶房のフリージア

考えがまとまらない儘ついて行き

孫のけが包帯をして得心し

貝塚市 行天千代

老人会先輩が座る指定席

湯殿からかすかに聞こえる桶の音

長電話見たいテレビは終ってる

口車嘘で固めた浮世坂

島根県 藤原鈴江

生真面目に生きて一と味欲しい今

まん丸い心で転げてばかりいる

同年の人と話して安らぐよ

アルバムの中の亡父を誇りたし

鳥取県 清水一保

御先祖と一緒に古木庭に生き

俺の目を盗んで雑草伸びて居る

手をつけて待ったはきかぬ我が土俵

何百万の農機が眠っている牛舎(休農をして)

浜田市 中川幸一

美人薄命うちのばあさんよかったね

譬えばのはなしが胸によく応え

勝ったとて夫婦喧嘩にない褒美

肝臓の激務も知らず今日も酔う

島根県 松本はるみ

とめるなら今靴を片っぽはきながら

還暦へ貴方の文句多すぎる

木犀の花が降るふる雀たち

海草もレバーも食べて不幸せ

鳥取県 福田保子

親の敷くレールへ背く角隠し
角隠し父の涙は見せぬまま
子守歌母にドラマの幕が開く
脇役で主役の地位を守り抜く

大阪市 中西兼治郎

雨の音照るてる坊主もきいている
温かい情に出合う白い杖
かあさんが苦しめられた花名刺
本当はそうだったのかと詫びる父

七尾市 松高秀峰

物忘れ元の位置に戻って見
晩酌の衰え母の気にかかり
この坂を登れば課長の椅子が待ち
片親にしたくないから押せぬ印

岸和田市 清野こう

だんじりの見せ場こなから坂の意気
人工孵化されたと鮭は思つてず
風邪気味へ昔ながらの卵酒
国なまり訃報が届く電話口

出雲市 板垣夢酔

神無月になつても貧乏神は出す
火吹き竹恋の種火をけしかける
離婚して良さが分つて来た愚か
責任を果すと腹が減ってくる

大阪の想い出より

岡山県 岩道博友

スカートを持ち上げ住吉の太鼓橋
一銭でちよば焼買うてパラダイス(市岡)
大阪城両手をあてて石を見る
どの町が今日は夜店か母に聞く

浜田市 佐々木裕

お酒なら熱燗秋の腰を据え
夜の蝶子を持つ母の掌に戻る
相打ちで分けた勝負の酒になる
貧乏の癖が抜けない裸銭

島根県 大屋秋峰

ダム反対叫んだ里の蒼い水
又ひとり句誌から友の名が消える
甘くみて女の払い腰に合う
背信へ覗く鏡は影武者か

奈良県 宮川古都路

夫婦にも停年がある七十代
どん底に逃げ場があった西成区
渋柿は落ちる自由の足の下
再会へ怨みわすれて手をにぎる

川西市 松本ただし

はけ口が酒に変つたつむじ風
年輪が淡々として語る過去
夫唱婦随色冴えて来た彼岸花

レールから外れる意地もあつてよい

大阪市 岡田 ふみ

雨降れば洪水降らねば早魃か

子に財布渡して招かれたふりをする

映画村にて

丁髷が電話かけてる映画村

小火出した前科で秋刀魚焼かれない

松原市 小池 しげお

朝日いまあがる新聞少年に

土曜日はギョーザが好きな共稼ぎ

自販機がお礼言うたらおかしから

天高く人間ドックでおこられる

寝屋川市 平 松 かすみ

隙つぶし株式欄へ目を通し

ペンションでいやいや千切るパンの耳

なんどきへ水とラーメン用意する

よいことをしようお日様みてるから

岡山県 二 宗 吟 平

晩年にこんな職場があろうとは

ハムスター逃げて自由をとり戻し

ハムスター逃げた夜軒端へ耳澄まし

天気なら参ると頼りない返事

大阪市 北 山 悟 郎

嬉しさが泣顔にした久し振り

生き残り秘めてる誇り載る戦記

又しても裏目ばかりの出る運命
極楽に近い頂上探してる

交野市 山 本 テルミ

鈴虫のあわれ別れがそこにある

球根を買い老いに夢があり

パンフレット見るだけにする北の旅

乱舞して花はみどりへ座をゆずる

姫路市 松 浦 輝 月

望み一つ友に与えて萩さかり

ライバルに負けて嬉しい恩師の子

やちまたの暮し御先祖皆一つ

梨の果汁いとおしみつつ果芯取る

大阪市 町 田 達 子

親切も程ほどにと言う秋の風

三猿で無くも二猿は守らねば

空似とも穴のあくほど見つめられ

松茸に故郷を聞いてする料理

寝屋川市 堀 江 光 子

肝心のときに時計が止つてる

言い勝ったときの空しさ知りながら

妥協してわが影を踏む帰り道

父逝きし齢まで生きて仰ぐ星

堺市 柿 花 紀美女

ふる里の人も山河もしらじらし

運悪い一日だったしまい風呂

単調なりズム変えたく衣更え
裏道を覗いて札の味を知り

尼崎市 伊藤春子

難聴を伴せですと老いの言う

青年の主張聞き度い六本木

宮々と自縛の縄を編んだ悔い

辻棲を合せる嘘に踊らされ

大阪市 松尾柳右子

一年が早く立ったと又ばやき

海辺での御馳走家族へ話だけ

朝ひと刻通学前の豆台風

女らしいおんなに女憧れる

島根県 岸本輝水

老眼鏡たたみの縁にけつまずき

六十の美容体操の杖にされ

先棒を代つてもよい坂の上

秒針の進まぬ朝が明けきらぬ

寝屋川市 岸野あやめ

星祭るどれが亡父とも亡母だとも

旅靴に入れる推理の文庫本

図書館で斜め読みする直木賞

親は親子は子と軽く言う若さ

松江市 竹内寿美子

風の子になって風の夜を眠り

背信の唇に散薬こぼれ落ち

目薬の冷たき夜に君思う
琴線にふれる言葉を頂きぬ

鳥取県 土橋 螢

男から理由もきかずに夜なべ妻

燃え尽きた男に秋の陽が沈む

二日酔でも休めない朝がくる

コスモスが咲くマラソンの道しるべ

島根県 木村 はじめ

ランドセル夢一ぱいの若葉道

病みもせず貯金とてなし葱坊主

遠廻りしても自信が許す道

組に事なき夕餉刻む音

倉吉市 淡路 ゆり子

惚けたかな神と仏をとり違え

何かまだ言いたそうにし柩逝く

倅を語り合つて秋ざくら

身の程を知って揺れ添う秋ざくら

和歌山県 寺田 裕美

口開けたアケビの崖が高くなり

花活けることから女にまつりくる

満ち潮に母の言葉が匂いたつ

独りぼっちに金木犀がきつすぎて

和歌山県 山川 克子

欄干にもたれて白い眼を意識

あなたにはあなたの世界私にも

難民の汚れなき瞳が痛ましい
美人だったなあ高かったなあと二日酔

枚方市 二宮山久

人生を生き抜く味方の妻がいる
まん丸な月へ未練の遠廻り
騒がしい妻が留守で落ちつかず
大衆の底の力を信じよう

豊中市 上田登志実

あの年であのファイトあり学ぶべし
酒煙草止めてこの世がきれい過ぎ
滝に向い深呼吸すれば天青し
郷愁を誘ういちちょうの御堂筋

鳥取県 中原みさ子

ビックリ箱のロマンを待っている女
針千本妻の掟は破られぬ
佗助の白さの中に罪を置く
太陽の恋へ弾けた鳳仙花

鳥取県 中原汲香

結ばれる二人の良き日ベルは鳴る
秋刀魚の味が似合う私の倅せよ
湯気立てる鍋の温さを話しあう
友はみな老いの姿で語り合う

姫路市 大原葉香

防衛費じわじわ税金食い荒らし
肩幅の広さに男と書いてある

雑沓の足音軍靴ふと思つ

大阪市 坂本仙吉郎

七十年の回顧

伊与節の朝市の町我れ育ち
砂浜のテトラポットも油じみ
試験前坊ちゃん列車で城下町

大阪市 吐田公一

虎虎虎虎なら何んでも売れて行き
関西の景気変わる虎優勝
ただ酒を出しても嬉しい虎ファン

大阪市 塩田新一郎

オクトーバーじゅん子の母は異国人
浅漬の茄子にも似たる女と酔い
大阪の臍だけ残し中之島

大阪市 古川美津枝

胃のつかえいちどにおいた震度3
おがんでもあかんのとちがうか神無月
子も親もつかれましたと体育日

豊中市 奥田満女

インチキ商法呆けて居られぬ老いの日々
腹の虫押え続けて定年期
また会った彼の視線は何語る

岡山県 直原七面山

娘を褒めて腹は別
旅に来て娘は陽気

自選集

長野文庫

秋は燃える紅葉へ詩ごころ

水粉千翁

この位回復腕を振って見せ
素晴らしい自動車で来て無職とか
不特定多数相手にたこやき屋
線香の煙で撫でて安堵する
形よき花にときめきを感じたり

山内静水

古き良き皺の深さを計りたし
けわしさの道にこそ花いろどりぬ
コスモスのお辞儀へ秋を会釈する
万感の秋地に還る彩に炎え
これしきのことよりほかに生きのびん

米沢暁明

恥をかきさらさんあくまで天高し
笑止千万異議なしものと認められ
ふり向けばだあれもない折返し
三枝の札尽しライバル訪ねんか
今日もまた仕事が残る生かされて

藤井明朗

乱れたかに見せて揃うてマ스ゲーム
引き受けぬ肚でごじやごじや聞きかえし
言い分はマダムひかえる性と知る
晩酌の味しみじみと夜の長さ
はや師走たまった重荷肩へ来る

市場没食子

（9月29日）

大会の余韻さめず大阪へさよならす
都会の空気はひとりでは住みにくし

祝栗主幹傘寿金婚の会

思い出は夢やと幸せをもらう
石一つひとつに旧友の顔うかぶ

会場の熱気ねたきりへも感じ
ねたきり老人へテレビ今月大相撲

句会用辞書も半世紀の手垢
いなごの佃煮珍味をもちたなアチロリ
阪神にMVが出た忙しなり

高橋操子

釣られごろなんて人間得手勝手
のむんでないの一气一氣にがんばろう
番組の途中で阪神勝ちました
鐘乱打それから人生狂てくる
万葉の面影残す奈良の萩

八木千代

回転木馬風にロマンのあるかぎり
海は笑って川の小説読んでいる
決め球をひとつ左の掌に隠す
樹陰から出る水筒をたしかめて
回転木馬骨の髓まで風になる

小出智子

この世のなさけ銀杏が散っていることも
秋のあいだにコピーしておくことがある
ほじくってならないものにわが齡
人を恋う千社札とて懐しく
絆かなままして木枯らし吹く夜は

月原宵明

サングラスかけた男に秋深む

涙腺のゆるみ肩書消えてから
道楽者に操を立てた坐りだこ
チャルメラの遠く近くに野分吹く
耐ハイで男同士の別れする

藤村メ女

遺言を書いて心が軽うなり
陸橋で母の歩調を待つ絆
大屋政子に少女が棲んでいる無邪気
あかね雲気ままの向の舫い舟
白玉を今日のお客のもてなしに

川口弘生

十二月の空の青さはターコイス
お互いの狭い心を知る誤解
遅刻者は私一人でない安堵
仏法界やっぱり美男美女がもて
神様の意志を予感として受ける

正本水客

気の付かぬ振りをしている空を見る
指一本ささせませんと酔うている
万円札くずさぬ一人旅つづく
薄気味の悪さは何も言うて来ず

潮花君一周忌

仏前の焰おどって消えじとす

小林 由多香

孤児の目へ無情な雲が富士かくす
本番へ向けた闘志が見えかくれ
自殺して疑惑を晴らす遺書悲し
単身赴任二年覚悟の駅へ着き
延着の列車最後に母が降り

黒川 紫香

ふと燃えた一夜もあってそれでよし
十二月小さな借りを思い出す
来春へ眠りに入るこぼれ種
おとなしい玄海灘を眼に写す(唐津にて)
水前寺くまもとの女よく笑う(熊本にて)

市川 鱗魚

忘年の宴と無理な酒を受け
人世のドラマ男が軸になる
手の内が古い猫で声に会う
積み木よく崩す子がいる孫がいる
愛は一途で父アジサイを嫌いぬく

本田 恵二郎

この辺でラストスパートにかからねば
国訛りませませ旧交あためる
好ましい正体しかと見つけ合い
美人ママ末っ児が描けばこんなブス
雑用に振りまわされた良い寝息

児島 与呂志

努力にも必ず悔いは残るもの
秋茄子は一生懸命実るなり
心配が取越苦労だとわかる
歳感じ妥協点だと妥協する
愚痴めいた言葉はむなししい語に過ぎぬ

工藤 甲吉

アメリカに貯金帳まで調べられ
議事堂の狸ポンポコポンが無し
人生もかくの如しと箒星
恩人へ水花香を忘れまじ
札臭くなって松茸きらわれる

大矢 十郎

じいちゃんにもう頼まないプラモデル
唇が唇に聞く過去の人
議員さんお通夜はみんな見える位置
腹立てて磨いてくれんか流し元
ご安心まだ戦える国でなし

野村 太茂津

泣きを師走の風が消してゆく
詮索好きな狸寝入りへ忌憚なく
諦めがまだ身につかぬ暮の風
精悍な目になる癌を憎む時
退屈を知らぬ今年も暮れていく

川柳太平記 (91)

川柳の群像

岡橋宣介

東野大八

を五十六歳の私は聞いたわけである。

思えば、当時の旗艦の(青年将校たち)の多くは亡くなり、生き残ったわれわれもまた次第に老いの影を濃くしつつある。片山桃史戦死、白城四郎事故死、そして日野草城、富沢赤黄男、神生彩史それに水谷碎壺のいづれも病死。このたびのせんば大会に出席はしたが、伊田三樹彦や私にしても、往年の同志はことごとく、四十代後期以上の年齢である。

愛謡やむことなき(支那のランブ)を朗詠しつつ、宣介氏の胸中を去来した感慨は果して何であつたらうか。(昭43年9月号「せんば」所載。赤黄男以後。平井一雄)

岡橋宣介が主宰した「せんば」は、昭和24年一月創刊(同年五月に「表現」と改題)同年十月再び誌名を「せんば」に戻す。リアリティを失わないロマンチズムをキヤッチフレーズに約30年間にわたり、川柳界に一時代を画し、数多の優秀作家を養成し、彼の死によつて「せんば」は消滅するのだが、その柳歴は、厳密にいえば昭和25年にはじまり昭和48年に病臥した時点で終っていた。したがって彼の青壮年期は俳人で終始し、しかもその俳壇生活は、生涯赤黄男に傾倒した詩調が基盤で、「せんば」に拠つた同志の川柳作品は、新興俳句の血脈が培養源であつたと

「潤子よ おとうさんは
小さい支那のランブを拾つたよ

「灯をともし潤子のよくな小さいランブ

その日(七月七日、せんば二十周年記念句会)のフイナールをかざつた、この赤黄男の俳詩の一節はナレーター自らが、その回想に引き込まれ、その一語一語をかみしめてゆくナレーションは、聴く人々をも魅きこまずには置かなかつたのである。

そのとき、一瞬、童顔の瞳に還る宣介を見た。激しい回想のなかの哀歓をむさぼりとうとするのを見た。この人間懊悩の詩に魅きつけられた余りの、かつて知らない程の、無防備な「裸」の眼付きを見たのである。幾星霜の郷愁に打たれ、かすかにけいれんしているのさえ見えた。

この「ランブの詩」のもつ何ものが、宣介を惹きつけたのか。かくまで宣介を魅了させたのは、一体何なのであらうか。(昭43年10月号「せんば」所載。先導する者。脇田一骨)

ところで、おそらく出席者の多くは初耳だつたらうが、「支那のランブ」(故富沢赤黄男作品)の朗詠こそ、わが宣介氏の、とつておきのおハコなのである。というのは、私がおきめてそれを聞いたのは、昭和14年ごろ、俳誌「旗艦」(故日野草城主宰)の大阪句会においてであつたからである。(略)当時宣介氏は四十代初期、私は二十代後期(お互いになお若かつたのである。その夜もポータブル蓄音器を提げてきた宣介氏は、その伴奏によつて、壮重な抑揚をつけながら「潤子のような小さいランブ」を朗詠したのである。そして茫々三十年、古希の宣介氏のふたたびの朗詠

筆者は考へる。

参考までに富沢赤黄男（一九〇二—一九六

二）の作品を一べつしておこう。

—南国のこの早熟な青貝よ

赤黄男

—恋人は土籠のやうに濡れている

赤黄男

—かかん鐘鳴るときの花の清

赤黄男

昭和十年創刊された「旗艦」に水谷碎壺と同人参加、右の浪漫的作品によつて新興俳句の旗手と目され、つぎの名作がある。

—蝶墜ちて大音響の結氷期

赤黄男

宣介は昭和十一年旗艦同人となる。昭和15年草城の俳壇引退声明によつて、草城なきあとの旗艦を支えたのは水谷碎壺・片山桃史・富沢赤黄男・安住敦の四本柱で、宣介はその発行編集事務を担当しつつ作句でも活躍した。

「俳句」(昭32・10新興俳句特集号)で安住敦は宣介の名を特にあげ、旗艦廃刊後の「琥珀」誌発行の労を讃えている。

ともあれ宣介の俳句における詩情の宝典は赤黄男句集「天の狼(昭16)だったと本人からもまきいているのだが、「せんば」はまた昭和43年7月号に、俳句・川柳尚部門の作家からみた「富沢赤黄男作品鑑賞」を七頁にわたり特集している。注目されるのは俳句作家のみならず赤黄男特集の記事は、昭和16年8月号の俳詩「琥珀」所載の再録であったことだ。

昭和43年秋、奈良のいかるが荘で開かれた大陸川柳人同窓会で宣介と筆者の雑談の際

「せんばは新興俳句の川柳道場みたいだ」

と齒に衣をきせず筆者が口にした際、絶句した宣介の羞恥に充ちた顔を今も忘れない。

岡橋宣介は本名岡橋留蔵、明治30年4月20日新宮市佐野に生れた。職業は弁理士。

昭和八年頃、川柳に関心をもち番傘に投句をはじめたが、昭和十一年水谷碎壺を識り、「旗艦」同人となる。

昭和十六年当局の指令により「旗艦」「瑠璃」「原始林」の三誌を統合し「琥珀」創刊

この頃同人、会員の出征相継ぎ無人の編集部に在つて編集経営に全力を尽す。

昭和二十一年旧旗艦同人因り「太陽系」創刊、同人として参加す。昭和二十三年「太陽系」を「火山系」と改題す。

昭和二十四年川柳誌「せんば」を創刊す。昭和二十五年「火山系」廃刊を機に俳句活動を停止。以後川柳一筋の道を進む。

昭和四十八年一月三日発病(病名脳血栓)入院治療三カ月にして退院するも、尚自宅療養の生活を続け今日に至る。

以上が遺句集の「熊野」岡橋宣介作品集(昭54年刊)に収められた彼の俳柳歴である。この句集の序文に長田喜代治は

—子が傍でねていてくれる目をとる 宣介の句を掲げ、この旗艦誌上の処女作に続き

—大空を飛ぶ足の毛に風の音 宣介の「白日夢」の一連の句で、彼の作品に深い関心を寄せたことを述べ「昭和24年宣介氏は川柳改革に情熱を燃やし柳誌「せんば」を創刊して俳句界を去つた。(略)彼が何を如何に改革せんとしたのか、また成し得たのか、私に知る由もない」と記している。

想うに筆者は、宣介が身をおいた新興俳句が成し遂げたよくな定型川柳への頂点の道をめざし、それを川柳改革への針路としたのであるまいか。ともあれ「せんば」における宣介の論調には根強い俳句への郷愁にさいなまれながら、川柳に対する宣介自身の価値感昂揚への焦燥が色濃い。その根底には俳句から川柳へ重点を移しかえた一種の人的コンプレックスも見逃がせない。「川柳は趣味である」(「せんば」昭39)と居直りながらも、古川柳から推移した現代の川柳は人生諷詠に徹することこそ現代川柳の骨格を歩むものだと出張していた。昭和54年8月19日没。享年81。

霧を着て模造真珠の軀をふさぐ 宣介

★次回は「石原青竜刀」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十三)

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野真孝・本多正範・多田 光

故岡田 甫

378 水さうすいといふ腹へ異見ン也

石田成「水雑炊」は水分の多い雑炊。酒の酔を醒ますためや病人用。「耳たらひ水をう水と入かハリ」(拾七21)とあるように、妓楼では居続けする客の朝食として出されたもので、本句は多分居続け後の息子の朝帰りをよんだものであろう。

からつ腹かかへて異見聞いている

焼もちハ御免ン水雑炊のはら

安四松 4
八七・13

南「拾七21」の句「耳たらひ」はお菌黒染めのたらいですから、遊客の朝食でなく、遊女のものとして解せられますが……とすると、

水雑炊の腹は遊里のものでなくて、朝帰りに先ず水雑炊を食べさせて、その上でお説教がはじまったものと解せられます。

多田「礎稿賛」

岡田「二日酔には水気の多い(そして消化のいい)水雑炊と決まっていた。遊里で出すのは居続け客へです。

379 猫がはらんで一家中まゆにしハ

石田成「猫」は芸者上がりの妾の異称。

本句「吉原志」「妾」の項に「御妾の懐妊」とあるとおり、大名旗本など武家階級の妾が妊娠したことを奥様はじめ心ある家臣たちが眉に皺よせて、当惑の表情をあらわしている

有様をよんだもの。

奥中が胸をわるかる妾がへど 八一・10

多田「私としては『風俗志』『懐妊』に引用されているように——同じ家にて人と家畜と同時に産をすれば人の方、獣に負けて難産すといふ——との注がついての句「嫁はもう猫の身重を里へやり」(傍三14)という句と同系統と思つ。せつかく嫁が懐妊したのに折あしく猫もまた、と不吉がつているのではないか。その猫が嫁のかわいがつているのだとなると「責めて産み落す迄嫁置きたがり」(安)という気持ちになるのだろうか。

岡田「一家中眉に皺」の表現からして、やはりお妾の懐妊。

380 三分くらひハ不断ありさうなてい

石田成 三分の女郎は、着飾つた高級女郎であるから外見上は平生、金には何不自由無く見えるが、実状は食事代、家賃の外は一切合財、日常の細かな出費に至るまで、自前で負担しなければならず、金の苦勞が絶えなかつたようだ。

句はその遊女の貧についてよんだもので、川柳では質入れと空竈箭の句がそれを代表している。

打身にハ何不足なき女郎也

傍三・37

外面女はさつ内しんは火の車

三五・8

八木 いつでも金三分くらいは手もとにありそつに見える。ちよつとばかり三分女郎の札賛句めかしている。

鈴木 賛。有りそつで無いのが金、無きそつであるのが借金の諺の通り。

多田 八木説賛。

岡田 同。

381 どちらてなひ四ツ手麦わら細工つけ

石田成 例年六月朔日は、江戸市中のあちこちにある人造富士で祭礼が催された。この日はいずれも麦藁細工の蛇を土産に売った。

なかでも浅草の富士権現は、吉原遊廓に極く近いので、富士詣にかこつけて遊びに出かけるものが多かった。

本句は、四ツ手駕籠では土産の麦藁細工の蛇が嵩ばつて中へ入れられず、外にぶらさげて掃る状況をあらわすことにより吉原へは行かず真直ぐに家路へ向わねばならぬ放蕩者でない入簪などをよんだもの。

四五人まへの蛇を持って罨降り

傍四・6

麦わらでのれば四ツ手も恋で無し

安六義3

鈴木 賛。この男仲々PRは上手。

多田 私は大森の麦藁細工とつていた。しかし大森のは「器物」が多いよつなので、駕籠にぶらさげるのは不適當かもしれない。

岡田 やはり礎稿でいいでしょう。

382 本性を違へすいつちいへさし

石田成 「生酔本性たがわす」「酒の酔本性違わす」「上戸本性違わす」「酒酔いが本性を現わす」の諺、即ちなまよいの時はその人の本性がかえつてよく出、酒飲みはどんなに酔つてもその本性は変りないこと、をふまえた句で、大一座の中かなり酔つている者で

もいざ女郎を選ぶ段になると、一番いいのを

選んで盃をさすというもの。

八木 賛。

大一座美へさすむしのつよいやつ

二〇・33

南 賛。

さかづきで運の定まる大一座

一〇・21

人の欲すじかにさす大一座

傍五・13

多田 賛。岡田 同。

383 さう御座らふと存たと飛車を逃

石田成 将棋を差す一方の眩きを読みこんだ描写句。
会話等をそのまま句に取り入れることにより、その者の風貌やその場の雰囲気等を直写しようとしたもので、このような句を「話体句」と呼称し、阿達義雄氏は『江戸川柳の史的研究』において、明和期川柳点の一傾向として

をむくろくなりハ成たと飛車を引

拾十・6

小野 賛。王手飛車をかけられ「判つてるよ」といながら飛車を逃げる、そんな状況が想像されます。

多田 賛。

岡田 同。

江戸川柳に現われた八百屋お七(五)

阿 達 義 雄

(五) お七の放火と年齢詮議(承前)

次の句から考えてみると、第一番で直ちに火焙りあまの刑になつてしまつたことになつてゐる。

すなわち、取調べの奉行が、お七に向つて「お七、そちは十五歳だな」とたずねて、それを鸚鵡返しに「ハイ、十五歳でございます」と答へさせようとしたが、お七が真正直に答へたために、奉行の思い遣りも水の泡になつてしまつた、という風に伝えられていたことが推測される。

今、その句に対する題ともいへべき前句をも併せて示してみると、

お七へは鸚鵡返しをしろかしと

(宝暦八・十一・五)

——前句「尋ねこそすれく」

十六とすつてんべんから申し上げ

(宝暦十二・信二)

——前句「とんだ事かなく」

何れにしても、十六歳と答えるか、十五歳(又は十四歳)と答えるかが、江戸に於て、前代未聞の少女火焙りの刑が執行されるか否かの重大な境目であつたのである。

お七の親や町の重立つた人々は、第一番のお七のように単純ではなかつたから、お上の思召しを有難く思いながら、名主は皆の代表として、お尋ねに対し、

「いかにも、御意の如く、お七は当年漸く十四歳でございますが、前々から何処かへ奉公に出したく思い、それにしては年が少なくて奉公にも有りつけぬので、親も当人

も、又、御屋敷へ御目見えの節なども十六歳だと申し上げておりましたので、今度もツイ十六歳と申し上げてしまいました。現に人別帳にも十四歳と認めてあることを名主たる私が御請合おたがひい申し上げます。」

と言つたので、中山勘解由も愁眉を聞いてホツとしたのであつた。そして、それからお七を牢から出して家来の中山独ひとという者へお預けということになつた。これで済めば危い瀬戸際でお七も救われたことになる。

ところが、此のお上の処置に対して、躍起となつて抗議する者が、思いがけない所から現われて来た。

江戸幕府の老中、土井大炊頭と火方盜賊改の中山勘解由の情ある取はからいが通れば、八百屋お七も火焙りの刑にはされなかつたであらう。

然るに、吉祥寺門前の無頼漢吉三郎は大悪無道の曲者で、お七の罪がゆるめられたのを嫉み、自分だけが刑せられることを無念に思つて、中山勘解由に訴えることがあると言つて、次のようなことを言い張るのであつた。

「お七が十四歳だから、其の罪を許し給うと承りましたが、是は公儀ではどういふ思召しでござりましょうか。

依怙蟲貞おとこのないのが奉行と存じます。お

七が美しい女だから中山殿は其の色香に愛でての御沙汰でございましょうか。こんな大罪を許し給うのなら、直接火をつけたわけでもない私などは、どうなるのでございましょうか。」

と罵らんばかりの調子であつた。それで、中山勘解由も大いに怒り、

「おのれ、につっき大罪人奴、幼少で前後をわきまえない小娘を色々欺して、火をつけさせるとは、お前が手を下さずとも其の罪はお前にある。言語道断の奴だ！」

と叱りつけたので、恐れ入るかと思つたら不敵な吉三郎は、むしろ嘲り笑うような調子で、

「左様なことを言つて欺こうとなさるのこそ御奉行のお心にうしろ暗い処があると申し上げたい位です。」

子供心の愚かな小娘をそのかしたと仰有られますが、お七は何故に火をつけようとしたのでしょうか。それは恋ゆえではありませぬか。男女が色情を思つて、何で幼少だとか子供だとか言われましようか。年の長けてゐることは、お七の色情の深いことによつても知られます。」

と、死罪を覚悟した無頼の吉三郎は、上をも恐れず、もつやぶれかぶれの抗弁をするの

であつた。勘解由もこの返答にはいささか困つたよつて、

「黙れ！お前に詮議の指図は受けぬ。『ふりわけ髪をむかしより井筒にかけしまろがたけ、君ならずして誰があぐべき』と古歌に詠まれている。之が恋路の情を幼い頃から知っている証拠だ。それにお七の十四歳なことは町所の名主家主、さては父母までが確と申している。親でなくして、誰が子の年齢を知っていると思ふか。」

然し、無頼漢吉三郎は益々強硬になつて、「このよつな所で、父母の申し分などは、どうして信じられましようや。俗に言う縁者の証拠で、助けたいと思ふから、白をも黒と申すのでありましよう。父母よりも何よりもお七が十六歳に違ひない第一の証拠がございませぬ。」

と言ひ放つたので、中山勘解由は立腹し、大いにいきり立つて、

「其の証拠を見よう。早く出せ、早く出せ。」と言つと、無頼漢吉三郎は憎々しくも落着き払つて、

「如何にも申し上げましよう。かのお七が十一歳の時書いて、谷中の感応寺の祖師堂に上げた額に、常在靈鷲山、法華最第一といふ文字があります。そして、其の下に、は

つきりと、本郷お七、拾一歳筆、延宝四年春二月と書いてございませぬ。」

まさか神仏へ虚言を書いてあげることはございませぬまい。数えてみれば、延宝四年から五・六・七・天和元・二となり、丁度今は十六歳の筈ではございませぬか。

それなのに、どうして、左様な見苦しい庇い方をなさるのでしようか。」

と、悪口まじりの、躍氣となつての異議の申し立てであつたので、中山勘解由も心には怒つておるものの、道理に詰り、「然らば、感応寺の額を取り寄せよ」と、下役人に命じ、急ぎそれを持参させて見るに、全く吉三郎が言つた通りであつたので、事ここに至つては今は、はや天下の大法に逆うことも不可能となつた。此のよつな証拠が世に一般に知られているからには、用捨も出来ず、此の由を老中へ申し上げ、お七の刑は世にも恐しい火焙りときまり、江戸引き廻しの上、鈴ヶ森に於て御仕置にされることになつた。

その罪ばかりでお七はにくまれる

(二五・26)

勿論、放火を教唆した無頼漢の吉三郎も同罪で、お七と一緒に火焙りの刑にされることになつた。

(つづく)

水煙抄

黒川紫香選

佐賀県 寺中 三枝子

十二月おんなはジシングルベルに酔う
七彩に弾む熟女のレオタード
耐えている痛みが愛の重さかも
指切りの今バラ色に燃えている
投げ返す石は真綿で包もうか

富田林市 田原 久子

人の口どうあれ明日も陽はのぼる
虹の橋恋しい人の住むあたり
気をひけばピシャリと平手打ちがくる
やんわりと他人の古傷突く女
新しい出会いへ女紅を選ぶ

尼崎市 福田 礼子

妻の手が温くて旅に出られない
片想いばかりしている肌ぶとん
退屈な男と乗ったローカル線
家並みまだ続き別れが言いにくい
型破りの夫婦と思う梯子酒

米子市 小村 てい子

雨降りへ策を練ってるかたつむり
母の炊く飯に笑いの種がある
気にかかる人から届く招待状
あきらめを映してたたむ紙人形
俯いてすわる少女をのぞく猫

羽曳野市 吉川 寿美

折り目節目亡姑の小咳が耳につく
自画自賛出口は一つ開けておく
真つとくに生きて悔いなし茄子の紺
掌にのせた噂を弄ぶ
自画像をシビアに画いている自虐

熊本市 永田 俊子

拍手することに馴れてる平社員
ゆきずりの愛の風待つ募金箱
愛の琴線鳴らして去った憎い風
真実一路ざくろは割れて見せ
夏柑を爪立てててむく反抗期

藤井寺市 赤木和子
プログラムどおりに進まない恋よ
お手を触れないでください大切な人に
不意に逢いたし天馬いずこに消えたのか
ならば今狂気の沙汰を見せましよう
開けたページがそのままにある余韻

長岡京市 木本如洲
子に縁のうすい峠の曼珠沙華
吊り橋の風は素直な人を待つ
よい話もち縫紋の叔父がくる
裏切った言葉が憎い雪つぶて
世渡りを知らぬ帽子を父はもつ

尼崎市 田中晴子
すかたんをいちど覚えたまま信じ
冬花火まさかの時を話し合う
割勘でほどよい距離にいる安堵
御先祖の血が流れてるお人好し
十二月おんなじとこでけつまずく

大阪市 清水康恵
お日様が優しい女にしてくれる
真っ白いお皿に嘘は言えません
水割の氷は夜を深くする
珈琲の中に沈んでいくロマン
絵本から私に似合う夢をよる

富山市 舟渡杏花
無敵へは弓も鉄砲も届かない

タコ壺のたこ大胆な夢心地
足腰は貧乏ゆすりて鍛えます
いつからか酸素不足の箸二ぜん
逆ろうた辞表にひそむ秋の風

八尾市 高杉千歩
残月へ生きててほしい名を明かし
優しさに飢えてすすまぬひとり膳
器ばかり褒めて早々著をおき
うたた寝へ置手紙して暮れの町
アカサタナ辞書引く勘も鈍り出す

西宮市 紀市郁栄
陽が沈む小さな時効意識する
群れを離れて二人で話すだけでよい
老人が眼鏡もかけず読んでいる
タイガースファイバーとても手に負えぬ
前例が気になるナンバーツの席

熊本市 宇野昭代
ローカルはうれし電車が待つてくれ
何時からかカツ井よりも京茶漬
マイペース過ぎて周りに疎まれる
散水車路地の乾きは知らんぷり
座ぶとんをすべって本音の声になり

熊本県 大川幸子
折目ない札束が気を太くする
ワープロへ頭の方が溶けきれず
この服がたまたま靴にマッチした

おにぎりの出番が多い十月で

能登の旅

ここがかの東尋坊なりしばし立つ

山口県 高崎雀声

体重を測つて秋を知る夕

敬老日すめば老人じやまにされ

ギャル御輿中に大根足が見え

曼珠沙華境に稲の出来不出来

エプロンの汚れる程に料理下手

東中市 小山悠泉

人間不信別れ話を聞く真珠

一億を守る総理のスケジュール

故里の童話を知っている野菊

台風の進路不安な夜のしじま

結納の使者を迎える菊日和

岡山県 矢内寿恵子

新婚へ真白い画布を贈ります

半生は似た者夫婦の数え唄

仇花を咲かせて蝶を狂わせる

今日の悔い明日の知恵に生かされる

熊本市 黒田緑

蟻地獄の底に自己陶醉の風

そこまでを言わぬ心があたたかい

混沌の世を泳ぐ術爪を切る

ただ読めば無味行間の叫び声

名古屋市 藤井高子

今日を終えてポツカリ風呂へ浮かす首

鍵穴にプライベートルな風が抜け

これしきの事が許せぬ夜の長さ

何度でも叩かれもぐら銭にする

米子市 光井玲子

ひよつとして星のしずくか流れ星

セレナーデ思い出たぐる兄の詩

丸出しの訛が好きで花を買う

仕上げたら月とふたりになつていた

滋賀県 安田志津

野仏を拝むどなたもいとお顔

赤とんぼとまりにおいで母の指

義理一つ背負うて今年も暮れてゆく

足早に過ぎてゆくから秋が好き

久留米市 鶴久百万両

養育費めぐつて愚夫のまま終る

宮城道雄の琴を愛する齢になる

帽子欲しくて秋の樹海へ翔んでみる

ふり向くと鬼が仮面を脱いでいた

今治市 野村京子

尼僧行くむらさき彩の風が立つ

気がつけば私ひとりの青写真

頬杖をついて無題の章めくる

肩に力入れて私の狭い視野

岡山県 山本玉恵

結論を急かすお腹の子が動く

仏典をひらいて雨の音を聞く
淋しげな女に二の矢は向けられぬ
ときめきがこぼれた日から失語症

京都市 松川芳子

ふる里を描けば素直になる心
アルバムの此処から平和と言う時代
まだ来ない友へ気使う花時計
せめてものおごり二人のティータイム

尼崎市 丹下玉子

唯物論捨てた女の瞳がやさし
口だけのやさしさ少女騙される
舞台裏稽古不足が踊ってる
頭から布団かぶって拗ねている

米子市 茂理高代

虎落笛独りの夜をかなします
冬に舞う蝶はかなしい運命もつ
どこまでも続く芒の廃止線
亡母偲ぶ悲しきまでも柿光る

竹原市 石原淑子

精一杯のペンペン草がひきぬけぬ
和やかな笑顔でみんな美人です
手をつなごう一人は淋しすぎるから
たおれてもコスモス可愛い花をつけ

熊本県 高野宵草

充実の今宵よテレビが消えている
菜食と肉食の差の子を見上げ

上役へベコベコベコと出世した
泣き顔をなぐさめに来た猫を抱き

熊本市 北川一進

お料理はおあずけ祝辞まだ続き
かけ直すメガネの先に良い便り
雑音をのがれてからの二人の手
反抗期変な理屈をよくおぼえ

鳥取県 太田幸枝

風吹いて夫婦の糸が結べない
彼女に飛ばす強い輪ゴムを隠してる
妻の座も星座も深夜よく光り
潮を恋い手桶の具は泡を吹く

唐津市 浜本ちよ

リフォームもせぬ世につづれさせと鳴く
元句友に川柳天国電話する
安らかな終着駅は母になし
着飾った分だけ老いが滲み出る

京都市 森川春子

登りつめた史跡の村で餅を食べ
馬籠での土産のカルタ本棚へ
角切りに外人さんも声をあげ
お手製の見舞に可愛いリボンつけ

竹原市 信本博子

つむじ風だんだんわたしを強くする
キューピットの弓矢を借りる月の夜
けじめとは少し淋しい時もある

信号の黄で待つ人渡る人

鳥取県 福田 あや子

おふくろの味が袋にセットされ

二ツ三ツ栗飯の栗夫に足す

老母の風呂敷に教育勅語匂つて

奔放な主で消ゴム等持たぬ

広島県 望月 はるひこ

万病の器こわさぬように生き

本心は別のところのほめ言葉

こけおとし分からぬ言葉借りて来る

前納の減税分に判が要り

尼崎市 児玉 歌子

ウインクをうっかり受けた日の狂い

太陽の視線ひまわり咲き果てる

機嫌よく妻が手を振る給料日

物音が無くて気になる来訪者

岡山県 小林 妻子

集会のメインやっぱり寄付のこと

子のためと言うことにして木を植える

順調に年だけ重ねている演技

年金を待ち詫びている夕茜

唐津市 米倉 彩女

安らぐ日などないトップの棒グラフ

孫の留守背中が膝が冷えて来る

非常灯消して女の大胆さ

善人の夫へ悪女のあのねのね

ソプラノをさわやかに聞く秋の夜

理解ある言葉待つて籠の鳥

二次会に門限破る友連れて

占いを少し信じて守り札

吹田市 井上 照子

バス停で銀杏の吐息きいている

シャンソンが聞きたくなつた秋の風

鉛筆をさがしてる間に句を忘れ

「愛」というお店でひとりホット飲む

伊丹市 山崎 君子

鍵穴をのぞいてママをさがしてる

風吹いてたつた一度のうわさ聞く

軽い嘘好きという字がもつれてる

無雑作にひげそり落し旅に出る

大阪市 上田 柳影

難聴になつて平和な顔になり

登校の黄色の帽子追うとんぼ

お互いに伴侶を連れた戎橋

ジョギングの犬が知つてる万歩計

今治市 月原 つくし

ジョーカーをからかいくる悪いくせ

気づかない無器用者の勇み足

コーヒーで安らぎもらう友を待つ

誤字当て字女悲しい夢を追う

吹田市 栗谷 春子

ちっぽけな村の池にも日は沈む
秋ですねめがねをかけて針持って
石焼いも突然きこえ出して秋
一度だけ嚙ってみたい鹿せんべい

西宮市 松本一郎

自問自答亡母の意見が聞かれない
器用貧乏地で行く父を笑えない
秋茄子をお皿に盛って姑と嫁
代替り故郷だんだん遠くなる

八尾市 椎尾公子

残業は妻の打算が待っている
再生のテープへ入る妻の声
青年の主張をきけば夢多し
おもちゃ屋は素通り出来ぬ手をつなぐ

豊中市 小畑よし子

十二月人も車も音立てて
虹を追う夢も失い日向ほこ
虹色に見えた隣が揉めている
受話器から熱が伝わるような声

静岡市 渥美弧舟

子供から集まって来る盆踊り
孫が弾くララバイの音が頼母しい
ホラを吹く客がいつもの席で飲む
ひとり旅妻を想いつ夜は更ける

鳥取県 田村きみ子

倅せが欲しくて汗をかきに出る

鶴と亀赤い帽子とちゃんちゃんこ
素直になれと白い割ぼう着が笑う
見栄をはる女明日の絵図に酔う

兵庫県 東浦砥代

似たもの夫婦で黄門さまが好き
妥協して少し傾くヤジロペー
泣き出すと孫がずしりと重くなる
たとう紙を開いて過去を読み返す

和歌山市 桜井千秀

初霜に昨日より今日編み急ぐ
ひとひらの雪にも想いそれぞれで
かたくなな風紋冬の日に晒される
申訳けなさそに冬日急ぎ足

兵庫県 脇田米朝

言うことはそれだけですかとおちよくられ
古稀からの進軍ラッパは妻が吹く
嫁と娘の冗談そつと聞く安堵
風雪に堪えた昔は振り向かぬ

尼崎市 鈴木良征

鉛筆の芯を削る寒い部屋で
計算の合わぬ胎児が腹をけり
ふるさとを捨てた日からのアイシャドー
裾分けのカボスに秋刀魚添えてない

尼崎市 山田保蔵

五十年つづいた味に飼育され
酒やめよ言われて医者を変えました

勉強部屋なぜか気になるすきま風
国宝の塔も鳩には泣いている

守口市 森川 まさお

貝割菜ひとり酌む酒熱くする

時間くるまで噴水を見ていよう

老眼鏡キタのどこかに置き忘れ

灯ともせば京の小路は水を撒く

大阪市 横山 為子

色眼鏡はずせば世間は澄んで見え

吊橋の足のふるえを風に聞く

万歩計歩け歩けと足叱る

落葉踏む靴の高さの見えかくれ

高槻市 河瀬 芳子

霧の緞帳あがり乗鞍ぬつと立つ

広重の鈴鹿を抜ける二階バス

無理解な親と思っていた若さ

ひと箱の寿司へ寝た子も顔を出し

尼崎市 吉永 伊三郎

男の子家来にしてる孫娘

家計簿はいつもスリムなマイホーム

寝る前に明日を生き抜く靴磨く

年金の首に手頃なループタイ

豊中市 辻川 慶子

秋深し和服に出逢う展示会

流星にピクリと動く猫の耳

主婦の座を嫁に譲って丸く住み

酔う程に本音を語るイヤリング

青森県 波 ただお

サロンバスの匂いっぱいの待合室

アサガオの垣根を伝う秋の空

包丁が切れると妻におだてられ

島根県 小田川 智重子

ささやかな住まいにビルが押し寄せる

この糸の先が見たくて巻き返し

部屋一つ時計が三つ置いてある

鳥取県 羽津川 公乃

本番はたった二分の聴診器

兎にも亀にもなつて完走し

弁解をしながら遊ぶ戦中派

呉市 蔵重 成人

赤字線コスモスだけが美しい

妻だけに解ける合図のパスルおく

窓からの話題が欲しいガラス拭く

竹原市 岩本 笑子

湯豆腐が好きで一合飲めますの

双生児の寝顔同じ夢を見る

鏡台の引出し夫は知らないが

唐津市 相葉 あき

宝塚セントルマンも乙女たり

乱雑な部屋で主の定住地

コンピュータに心の乱れよまれてた

岡山県 黒住 美穂子

率直にわびて心が楽になり

ウインクで寝息を知らず子ぼんのう
イヤリング揺れると恋がしたくなる

出雲市 小玉満江

からみ付くヘチマはずせば秋の風

ポン友にフライドチキンの店で逢う

旅立ちの前夜は一人のファッションショー

西宮市 秋元てる

無いの閑をむすんで長電話

閑そうな売場素通りしてしまふ

反芻の思い出色が深くなり

出雲市 河原恵美子

にげ道にまったをかけた風の詩

きつと良い明日を信じた赤トンボ

叱ったがやはり私に似ているわ

堺市 桜沢あかり

だんじりについて廻った鱈雲

陣容を構えて動くうろこ雲

世帯主が私になってからの坂

岡山県 伏見すみれ

やわらかな陽ざし編棒よく動き

二人三脚とうとう家を建てました

枕の位置替えて名月話しかけ

島根県 森山英子

雲切れるまで名月見ておれず

雨蛙でんとかまえて今日も雨

鯛買っただけで二人の秋祭り

貝塚市 池田寿美子

ファックスで旅のスケッチ送ろうか

台風一過窓を磨いてみたくなる

何時も同じ事願うて年の暮

指宿市 渡辺伊津志

本庁へ叱られに行く靴磨く

雑草の祈り小さな花をつけ

音立てて水が水追う川柳

兵庫県 奥野テール

冗談の通じぬ人といる疲れ

涼風に女衿せの旅に出る

狭い庭四季咲きバラの一人占め

岡山県 松本元江

秋の夜のしじまの中で抱く炎

思い出をそのままそつと萩の道

本音ひとつ言えぬ受話器のもどかしさ

兵庫県 平和茂一郎

ワッペンをいろいろ貼って宝箱

外泊許可貰い秋天へ手を上げる

見舞客同じ言葉をかけて来る

桜井市 前山美恵子

クリスマス子等にピカピカサントの目

亡母のいたぬくみ恋しい十二月

冬仕度出来て木立の勇しい

堺市 矢倉五月

一人旅好きな作家を一、二冊

良い知恵が出ぬまま鍋の底みがく

美術館解ったような顔で出る

高槻市 笠松高子

故郷の無縁仏に声をかけ

星月夜未練心をつのらせる

盆栽をおもてに出してやる時雨

新発田市 上鈴木春枝

孫の名で書けばすんなり来る返事

届くよとポストの口へする背伸び

投函へ人目気になるラブレター

弘前市 真喜内實

高校になつたら孫はもう来ない

着い地球ここには僕が立っている

先頭を行くからみんなにマークされ

唐津市 筒井朴竜

名月へ陛下も眼鏡拭き給う

満天の月も侍従長悼む

松浦河の淀へ留め置け夜半の月

泉南市 坂根流水

生きすぎて子らの白髪が気にかかり

ホケ知らず世間の風をまとも受く

夢に出た極楽案外寂しすぎ

米子市 大田みさと

雨降りのお月様からもらった鈴

望郷の訛りひとつが支えです

ダイヤルの向うも同じ鍋が煮え

堺市 山本半銭

色街の猫友禅のよだれかけ

べべたでも走り通した汗をふく

噴水に人待顔の立ち替り

大阪市 渡部さと美

ハイキングコースにお寺のある人気

捨て犬と二度も眼が合う街は風

落葉もす寺の煙も京都の絵

岡山県 後安ふさえ

梳く度に抜毛がふえる秋さびし

絶壁に風雪耐えて松の意地

荒波を立てることなき母の海

鳥取県 灘尾民子

わがままを許しあつさり捨てられる

スーパード逢う先生はママの顔

敏腕の刑事があくびする平和

吹田市 西岡豊

酸欠の首ばきぼきとなる湯舟

吸い過ぎに気をつけながら五十本

金毘羅の駕籠にゆられてホイサツサ

米子市 川上より子

地震が恐くて密会やめた鳥

ちぎれ雲変化自在に遊んでる

青森県 富士トキ

手を引いて下さいなちははの虹
通院に夏が来てまた秋が来て
この指に止っておくれ赤トンボ

旭川市 朝倉大柏

栄養が行きわたつてる女史のあご
頂点で反芻している悔いの数

愛してゐるなどと小指の悪だくみ

大阪市 榎本落児

海見えて心がなごむ旅となる
シャッターを押しましょうかと土産屋が

野瀬昌子

昨日見た夢も醒め果て別れます
男女同権せめて布団を揚げてんか

お悔みの見舞が出せず今日も過ぎ

大阪市 亀井円女

人間のエゴ詫びても済まぬコアラの死
一言の多い友だが離せない

遠い日の夢生きている桜貝

鳥取県 乾隆風

豆鉄砲の中に夫婦の音も込め
寝ころんだ達磨同情など買わぬ

人間臭さが好きです地蔵さま

島根県 菅田かつ子

コスモスの笑顔にふれて朝を出る
名前だけさりと読めば若そうな

名前だけさりと読めば若そうな

窓の月にそつと素顔を盗まれる

兵庫県 森脇和子

息抜きの三時に足りた餅一つ
ロケットにお伽噺を教えとく

乾杯へ笑顔つぎ足す仲の良さ

灰皿に吸殻溢れる秋の夜
フルムーン愚痴を忘れた五日間

散歩道街路樹の彩日々変り

職人はコールマン髭理容室
餌を追わぬ鳩も二三羽天王寺

たこ焼が匂う彼岸の仁王門

出雲市 小白金房子

ダムの底哀しく消える村役場
新築の土間へ記念の孫の足

セーターに編み込む柄は愛深く

コスモスの特権風と話してる
店先の松茸ながめて秋盛り

陽だまりのうわさ話が大きくなる

曼珠沙華哀愁ただよう好きな花
色あせた亡母の香しみる箱枕

箱詰のメロン嬉しい空輸便

大阪市 今西静子

八尾市 鷺見章

大阪市 井上白峰

大阪市 今西静子

竹原市 古田比呂子

大阪市 橋本悦子

大阪市 今西静子

ジョークがうまいガイドが眠らせず
太陽が昇れば愛大眠くなる
女ひとり一輪さしに四季がある

羽曳野市 田中隆二

酒が出て亡父の話が盛り上がる

思い出を語らぬ父の失語症

やさしさに負けてしまった夏帽子

高槻市 芦田静江

ループタイ多情な男にあるおごり

秋ふかむ点字明るい糧に生き

庇護のない気丈を妻の目に出逢う

河内長野市 大西文次

体重計昨日も今日ものつてみる

税金は酒と煙草で納め過ぎ

メモとペン置いてあるので留守らしい

西宮市 飯森泰世

曼珠沙華何を望んで燃えてるか

夕焼の色が明日を勇氣づけ

隠岐の島手型残され島に消え(後鳥羽上皇)

鳥取県 西川和子

口車乗って坂道ころげ落ち

帰省子を迎えて母は元気付く

りハーサル無い人生を演じてる

和歌山県 森三枝子

招かれた席へ仮面をつけて出る

見る方が肩に力の武道館

立ち読みの積りで開いた本を買う

新宮市 田中国彰

かさこそと落葉ころがる街並木

息子よりコレクトコールのベル頻り

目線より高い息子に言う小言

唐津市 山口高明

門付けの瞽女の親子に雪しきり

流浪の民の足跡溶ける砂嵐

蒼天に禿鷹舞うて月が病む

新潟県 高野不二

玉串料とは神様へのつけ届け

食欲に負けて美容は明日から

金賞とあるからいいのか菊花展

大阪市 末永芙久枝

炭焼の手すき松茸取りに行く

松茸山入札したと便りくる

彼岸花咲いたら母の命日で

岡山県 富坂志重

生き甲斐の自由をうばう診断書

病む夫の従順さみる今日の日々

先生の言葉半分顔もよみ

尼崎市 佐藤美代子

帰り道オヤ地蔵さん対話しよう

呉服市着せかけて見る男物

こまの芯廻るだけでは能がない

愛媛県 八塚三五島

母ありてこそ古里が生きてくる

英会話すこし使つて小商い

ヘルメット夫婦汗の鼓動が響き合う

たんば栗ごろりと寝てる亡父の畑

定年の幸せ友がよってくる

日めくりが瘦せると亡父が顔を出す

伴奏を握る鍵束なら欲しい

琴の糸切れて女の背が寒い

秀才を育て農継ぐ子がいない

さりげなく乳房にふれる風も秋

コーヒーが冷えても別れ切り出せず

手のひらに秋陽をすくう日向ぼこ

三代で暮す我が家が姦し

中流の暮しに無駄な金が要り

空港に着いてやれやれ生きて居る

人混みを避ければ月に覗かれる

パートにも慣れてペダルもはずむ朝

嫁姑歩幅揃うて笑い声

老妻の外出香水ちと匂い

ゆっくりの仕事丹念とも見られ

軽い舌人の痛みは解るまい

朝一番つとめて笑うようにする

鍵穴に行き先書いて貼つてある

掃除器に姑の愚痴を吸わしとく

先生の立場に立てぬPTA

バーゲンで買ったコップはこわれない

乱れ箱旅の疲れを脱ぎ捨てる

長命の親のみ仏の顔を知り

名月ややっぱり兎信じたい

カセットで鳥を鳴かして森が出来

「お早う」の声新聞の子は弾み

サルビアへたつた一つの蝶が訪い

わが青春を喋つてくれるサイン帖

寅さんに似る友がいて四季がない

秋桜ジョギングコースに咲き乱れ

ゆく秋をおしむ虫の音かほそくて

出世して落し穴を埋めにゆく

庭がなく屋根上で花咲いてくれ

鳥取県 土橋 はるお

鳥取県 さえき や え

鳥取県 横山 房子

鳥取県 高尾 よし子

堺市 江辺 天鳳

岡山県 杉本 伊久栄

岡山県 池田 半仙

大阪市 大倉 圭介

大阪市 平井 露芳

鳥取県 乾 喜与志

富田林市 片岡 智恵子

西宮市 待田 麻黄

大阪市 稲本 凡子

大阪府 喜与志

片岡 智恵子

待田 麻黄

稲本 凡子

喜与志

麻黄

凡子

喜与志

麻黄

凡子

喜与志

麻黄

凡子

標札の名はそのままに三回忌
茶柱に何かようこと予感する

高知市 北川竹萌

じゆず玉の指輪が一つたから箱
この噂出どこ女と限らない

茨木市 堀良江

子のピアノ夫婦にワルツ踊らせる
赤チンをつけてる指に問いかける

弘前市 齋藤 岳

パチプロが呼び出されてる拡声器
手短かで事が運べる友一人

寝屋川市 立床晴風

遺言が家族の絆堅く締め
扇風機まだ片付けぬまに炬燵出し

岡山県 牧野秀香

仲人の口が仕上げをしてくれる
負け戦だけを悔んでいる怖さ

川西市 野村静雄

中身より大きい箱を欲しがると
ガラクタが夢一杯のおもちや箱

大阪市 神崎 貴代美

同窓会才女よく飲みよく喋り
坊さんも来てくれはると祇園茶屋

吹田市 山田里子

仏心を地で行く父で波たてぬ

鳥取県 津村 八重子

他愛なく孫と焚き火で芋を焼く

益田市 里本 たかし

仲直りし乍ら妻の白髪抜く
女に戻りバケツの水を溢れさす

羽曳野市 麻野 幽玄

日帰りを一泊にして老いの旅
いざという時の味方を妻と決め

大阪市 堀口 欣一

秋ひとりユル・プリンナーの死を憶う
成田山のお護りつけて特急車

大阪市 川原 章久

名ばかりの渡れぬ橋の数をよむ
楓の葉風が脱がせる御堂筋

新宮市 山田 平和

三面鏡こんなもんだと納得す
雲掴む様な話に乗って見る

愛媛県 石手 武

豪邸のチャイムしばらく待たされる
うっかりと約束二つダブらせる

島根県 岩田 三和

支局長に手配をさせた宿に着き
いい住い幼稚園児の声とどく

奈良県 和田 萬里

猫にだけねこなで声で話しかけ
秋篠寺方言交えて雨やどり

豊中市 一瀬 福一

意のままに染る弱みをもつ女
上品な顔で終生嘘を言う

大阪市 山脇正之

影踏みの楽しさ知らぬ塾通い
娘の写真配ってそろそろ焦り出し

大阪市 高森文子

主婦業もまだまだ楽し七十歳
宵寝して早朝に咲く老いの花

岡山東 千原理恵

美意識が狂い出してる流行服
それはそれは深い愛父の愛

河内長野市 植村喜代

彼岸花今年も赤を忘れない
出たり入ったりして子の遊び

岡山市 河野青銅

許してもやはり器が小さすぎ
もう一度ポケット確かめ縄のれん

八戸市 島田昭治

残飯を妻は湯漬でさらり食べ
来世はあれもこれもと思う日よ

兵庫県 野々口ゆう也

無抵抗の白灰となり地に還る
火遊びの甲斐性なくて匂に炎える

守口市 若林市郎

故郷の味覚か重い宅急便
仏門に心の乱れ聞く説法

大阪市内 田中節子
叔父叔母が居てくれるから故郷へゆく
すだち届く迷わず今日はさんま焼く

鳥取市 若林一止
湯上りの着痩せどころか花浴衣
首を横に振る人形はわしゃ好かぬ

奈良県 山村有佳
玉手箱蓋とるまでの甘い夢
プレゼント箱の小さい方がよい

竹原市 古田鈍舟
雑草の实のからみつく遊歩道
不器用な妻と二人の走りっこ

藤井寺市 菊地繁男
ひと切れの松茸ガムほど噛みしめる
ジョギングで付録もあった小火を消し

大阪市 野村八重
乱雑な中でノートを枕にし
重箱と一緒にのこる母の味

島根県 城角鶏生
難聴も電話の声はわかるらし
古新聞読んで掃除も小休止

広島県 田村新造
漣にヤッサ踊りと港の灯
雨宿り雀もしてる軒の下

大阪市 喜多佐津乃
満月を一人眺める風呂帰り

百円で買えると知れば寄って見る

堺市 宮本 かりん

チャルメラに誘われ月が冴えている
雨模様古いバッグを持って出る

島根県 園山 世似

ケロイドの肌を灼かるる百日紅
お彼岸や物故者名簿に妻もおり

茨木市 井上 盛雄

やる気にも突走るのや歩くのや
だるまの眼じつと何かを求めてる

大阪市 富岡 温子

飢餓の国心とどくか赤い羽根
秋本番国から梨の箱届く

和歌山県 北山 凡太

美人とは言えないまでも笑顔よし
俺も男だ背中で物を言うてやろ

岡山県 後安 江山

叱られて叱って親子共に泣き
出来すぎた女悲しい運命あり

大阪市 新井川 青舟

前夜祭に最高潮となりました
御仏に会わずにめぐる北嵯峨野

兵庫県 伊沢 午郎

うどん箱仏壇にする仮住居
夫婦喧嘩母ちゃんの方よく乱れ

一生の百科事典を息子に譲る
「ほか90名発送をもつて」未だ届かず

新宮市 船越 正

すれ違う嫁の荷で知る大安日
初孫よ何処で覚えた人見知り

泉佐野市 真崎 浪速子

夕闇へ口笛吹きたくなってくる
強情が一人ホームに残される

橿原市 西本 保夫

余生まだ煩惱と言う敵をもち
生きて行く道に詩あり妻があり

高知県 山下 登舟

徒らに詮索しすぎる週刊誌
折箱の香り仄かににぎり飯

大阪市 宇久 はる子

箱の中子供の夢がつまってる
老いてみて始めてわかる老いの味

大阪市 朝田 晃世

間食がすぎて重たい箸となり
裏街と呼ぶ人もあるネオン街

愛媛県 西山 えつ美

覆水を盆に返した金とコネ
無器用な男器用に世を渡る

八尾市 松下 蕉露

岡山市 中嶋 千恵子

嫁がせて何やら空し親心
ハワイから手土産嬉しお仲人

大阪市 服部 頼一

重箱の中味讀えず塗りを褒め
子や妻にシートベルトを促され

岡山县 戸田 種子

一人っ子親の砂糖をなめている
一人言犬に聞かせて罪も無し

岡山县 福原 悦子

声あげてカラオケ歌う車椅子
良い返事待つてポストに頭下げ

大和郡山市 岡田 寿美礼

孫よりの便りにマンガ心込み
句にこころお蔭で老いる時忘れ

広島市 花田 繁子

薬箱昔話に花が咲き
生みの親育ての親で身は一つ

米子市 宮本 佳女男

忽然と死んで往きたい老いの贅
健康に合掌して八十路坂

堺市 本田 草生

勇ましく足音高く征ったまま
北の風落葉が遊ぶふきだまり

泉佐野市 大工 静子

敬老日嫁の心のお赤飯

出戻りは自分の掛ける椅子がない

兵庫県 市川 亀男

賞状より箱の中身が気にかかる
内職で秋の夜長に箱造り

兵庫県 岩橋 敏子

長き夜は一人居には淋しすぎ
箱入りで嫁げば苦勞多かりき

島根県 堀江 百代

老人手帳いつもバッグに持っている
栗拾い取らぬ狸の皮算用

和歌山市 三谷 周三

心では根にもつけれどよく笑い
負けるからしゃべり続けてやはり負け

島根県 喜島 ノブ

柳友は優し臉の堰を切る
貧乏の辛さを知らぬ若い人

豊中市 額田 明吉

UFOが尾翼おとして流れ星
喜寿の日に若づくりの正ちゃん帽

ジュニアの部 枚方市 二宮 撰子

運動会授業がないのがお楽しみ
アカトンボ秋はあなたがヒーローね

枚方市 二宮 正彦

家一けん大こく柱のお父さん
ピカピカと星になりきる花火君

愛染帖

橘高薫風選

足の爪明治と同じしなで剪る

唐津市 仁部 四郎

ナツメロのアルバムにある革命歌

麦飯にします今夜は新秋刀魚

西宮市 松本 一郎

赤ちゃんの瞳があざんへメッセージ

宿坊の枕に懺悔置いてくる

米子市 茂理 高代

椿の実はじけて誰に愚痴を言っ

悲しみを隠すお面を孫がくれ

長岡京市 山田 葉子

まんじゆしゃげ燃えつきすにはいられない

きんもくせい角を曲つた風に会う

和泉市 岡井 やすお

追い付いて追い抜く奴は憎まれる

アニマルの国へ招かれ死ぬコアラ

寝屋川市 岸野 あやめ

なくすものもうありはせぬ蛇の皮

手に負えぬ星の一つは地球かも

島根県 堀江 正朗

みんな秋箸の先から秋が湧く

鍼を持つ手からお喋りついこぼれ

岡山県 土居 耕花

何処をどう歩いて出たか梅田駅

待っていた様に鳴らして救急車

堺市 山本 半銭

アイラブユー死んでもよいと訳す仲

来世も絆がほしい写経する

豊中市 田中正坊

ねぶたからスタミナもらう北の旅

亡妻と来し青葉の城に小糠雨

富田林市 藤田 泰子

失意の日ゆりかごになる妻の膝

憎めたらどんなに楽かシユカーボット

森井寺市 赤木 和子

縁のないものに男と薬屋と

後ろ手に隠した思春期の目覚め

守口市 森川 まさお

病む妻の果物籠の柿貰う

曼珠沙華いつも踏切り開いており

兵庫県 野々口 ゆう也

一滴の朱老春に迫る彩

裾分けのその裾分けて土瓶むし

西宮市 草刈 墮駄

熟年の蛸たこ壺で眠りこけ

デジタルの次々時の消えてゆく

寝屋川市 堀江 光子

あんなどこに塔あったかと秋の空

辻まがる赤提灯の星明り

岡山県 山本 玉恵

理想論吐いてひとりて茶漬食べ

堺市 桜沢 あかり

転んだらポケットベルが鳴っている

羽曳野市 吉川 寿美

不意に病夫と流れてしまふ笹の舟

高知県 曾我部 裕

ゆるす気になるまで庭の草を引く

島根県 榎原 秀子

重い荷を負って仏心湧く日なり

琴ヶ崎市 山上 元孝

薪能見所も面をつけたよつ

芦屋市 竹中 綾珠

和歌山市 西山 幸

ミサへ行く樟脳臭い服を着て

わたくしの重さで軋むミサの椅子

天国を信じる顔でミサの列

笠岡市 木山 遠二

寝たきりは目をあいたまま夢も見る

寝たきりの目をやるとここに窓があり

青森市 工藤 甲吉

亡妻と子の乗る浮き雲へ手をかざす

北の海一気冬の色となる

大阪市 小出 智子

テーパーの皿に大小あるように

夫にはまだ被せられぬベレー帽

米子市 八木 千代

晴れてから綴る雨夜の物語

筒先を向けてくるのは欠けた月

近江八幡市 前川 千賀子

さよならの握手男の偽善だな

子が眠りてるる坊主の大きな目

今治市 月原 宵明

中国が一番嫌なのは軍歌

自分に住む小人なだめる腹立つ日

大阪府

朝倉 利義

病む妻の止ったままの腕時計

鳥取県

福田 あや子

独身でいつも仕上げた顔でいる

堺市

高橋 千万子

七十五日風はびびったりやみました

高知県

松岡 三吉

酒たばこ嫌いで何をしてなざる

大阪府

西森 花村

五百羅漢今年も無遅刻無欠勤

高知県

山下 登舟

会釈から会話に変わる散歩道

東大阪府

津雲 一

更衣心齋橋に用がある

愛媛県

石手 武

モナリザの暦も一つ齢を取り

今治市

矢野 佳雲

なまぐさな愛の真上のお月様

名古屋府

越村 枯梢

一樹一樹に声ありグムに沈む村

鳥根県

松本文子

抜けがらで生き足跡を残すまい

岸和田市

原 さよ子

先生の卵生徒にある人気

河内長野市

植村 喜代

紫の好きになった娘を案じ

羽曳野市

田中 隆二

擬餌針で釣った魚にあやまろう

和歌山市

山川 克子

人形はアダムにもイブにもなれず

川西市 野村 静雄

結論がなまじい読めている孤高

米子市

林 瑞枝

雪だるまの熱い吐息が聞えませす

八戸市

島田 昭治

墓参り人の栄華をかみしめる

米子市

林 荒介

平仮名の最後の「ん」に僕がいた

鳥取県

新家 完司

日の奥の深いところで水が湧く

和歌山市

福本 英子

達筆の裏書だから油断せず

京都市

森川 春子

鼓笛隊先生の声邪魔になり

豊中市

奥田 満女

森林浴繁り放題うちの庭

京都市

松川 杜的

紙ヒコキはばったり落ちてドラマが終る

和歌山市

坂部 紀久子

きつちりと日課守っている怖さ

岸和田市

武 俊春

期待する人から期待されている

豊中市

額田 明吉

シーズンに茅渚を見返す秋刀魚の眼

和歌山市

北山 凡太

散る桜散らぬ紫陽花寂しく

唐津市

久保 正敏

職人の意地は製図に目もくれず

唐津市

浜本 義美

個室からふるさとがみえ浄土みえ

尼崎市

伊藤 春子

修羅場ぬけゆらゆら足の向くままに

西宮市

朝山 千世子

能を観る興奮に酔う菊日和

高槻市

笠嶋 恵美子

愛されているのに風が吹き抜ける

西宮市

奥田 みつ子

芋判に子猫のような虎の顔

富田林市

浦田 トシエ

おのが顔車窓に恐く外は闇

尼崎市

春城 年代

酸いも辛いも知った男女で他人なり

岡山市

川端 柳子

涙もろい花だと思ふ萩盛り

富田林市

岩田 美代

浄め塩ますます秋が深まりぬ

米子市

光井 玲子

引出しのロマン何時しか微びている

弘前市

波多野 五楽庵

いわし雲津軽おのこは泣きやすし

西条市

片上 明水

住職が撞いているなとわかる鐘

旭川市

朝倉 大柏

黙っててくれる神様だから言うつ

守口市

結城 君子

リレーの子みんな孫に見えてくる

吹田市

西岡 豊

車座の酒が効いたか踊る鬼

八尾市

山下 みつる

中国に少しお灸をすえられる

益田市

里本 たかし

野村京子 今治市 脱皮する少女に童話忘れられ

久家代仕男 平田市 サボテンの花の奢りはひと日だけ

青戸田鶴 米子市 水面へ軽いリズムの雨の足

ささき やえ 鳥取県 鍵穴を覗く危ない秋の風

赤川菊野 高知県 満ち足りた心を秋の風が抜け

東浦砥代 兵庫県 言い勝った妻がだんだん啞になる

カズエ 奈良市 モナリザの微笑を老婆も持っている

小村てい子 米子市 色は匂う私を救う彼岸花

後藤火鳥 吹田市 女房の良きよ料理と聞き上手

奥谷弘朗 倉吉市 行動派なぞと情熱非難され

松本元江 岡山県 冷たさもえにしと思う風の音

板垣夢酔 鳥根県 六十を子供に還す父母の墓

神平狂虎 和歌山市 独り相撲の結果は聞かぬ方がいい

藤井春日 倉吉市 頑張った二人三脚だが別れ

河瀬芳子 高槻市 卑しければ座右に置いたちひろの絵

清水悠貴女 岡山県

小松市 小森靖江 良いこともあって日めくり瘠せてゆく

佐賀県 寺中三枝子 風向きの変化にさどくいるおんな

松原市 小池しげお 無為無策嘘をつくよりいいだろう

堀江芳子 鳥根県 からかった女の身の上話聞く

山口高明 唐津市 懐しさみな蘇らせる祭り笛

真喜内 實 弘前市 領いて居ればオブジェ通とされ

小林妻子 岡山県 涼風が君と僕とを隔ててた

北川とみ子 兵庫県 草刈機へ野菊ふるえてる様子

武庫坊 尼崎市 一と泣きをさせて泊めずに返す母

平松かすみ 寝屋川市 秋の雨斜め男の傷洗う

裕 浜田市 さあどうぞ手とり足とり落とし穴

田口虹汀 唐津市 悪役が育てて凄いいデカになる

相葉あき 唐津市 ライバルに感謝夫の今日の椅子

相葉あき 唐津市 先代の遺徳を旅の宿で知り

田崎あき子 静岡市 妻の笛朝からフォルテ慈無し

田崎あき子 高槻市 脱ぎ捨てた毛皮のように眠る犬

一瀬福一 豊中市 子の見栄と大人の虚栄きりが無い

田村新造 広島県 浮かれてるヤッサ踊りについていく

竹内寿美子 松江市 夜が来て同じ時刻にベルが鳴る

上田登志実 豊中市 独り寝の夢もふくらむ暖かさ

伊津志 指宿市 霊山の紅葉導く朱の鳥居

筒井朴竜 唐津市 パーティーの紳士は酔えぬ身嗜み

丸井円女 大阪府 手が四本欲しい小犬が四匹居る

筒井朴竜 大阪府 手が四本欲しい小犬が四匹居る

筒井朴竜 大阪府 手が四本欲しい小犬が四匹居る

NHK川柳募集

課題「部屋」 選者 森中恵美子

締切 12月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局 さわやか広場 係

発表 12月22日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

阿部 柳太

初恋の女を忘れるほどに呆け

原 独仙

高齢化社会の副産物と申されている。呆け老人。ほど哀れなものはいません。初恋の女とは、案外その看護に尽くされているおくさんかも知れませんね。

「悲劇は喜劇に通ずる」と諺にあります。まさにこの作品は、的を射ております。

感情を殺す電話を持ち変える

岩田 美代

相手の顔のみえない電話では、ときには思いがけないドラマを生むものです。

まるで火花を散らすような鋭さと、一面その会話にまで読みびとをひき入れる華やかさを秘めている作風には頭がさがります。

ロボットのよう天皇歩かれる

土居 耕花

「ロボット天皇」これほどはつきり天皇の近況を伝える言葉はありません。天皇の日々の

素顔に接した親しみを与えてくれます。

しかしこの句は敗戦前の日本なら、いっぺんとな。不敬罪」として、憲兵や特高警察の餌食となっていたことでしょう。

靖国神社公式参拝で、お隣の中国が目をはからせ、国会では問題になるのは無理のないところだと思えます。

平和日本のありがたさを、しみじみ感じさせる句であります。

玄関に隣の犬が来て座り

田中正坊

一匹の犬とおして隣人友好の実を、この句はあげております。ユーモアの句が少なくなりつつある今日では、暖かいこのような作品は貴重な存在であり、宝であります。

遊ぶのに大義名分いる私

田形 美緒

「大義名分」と開き直ったところにこの句の生命があります。それがいるということ、あなたの家庭内での存在が、いかに大きいかを語るパロメーターともいえましよう。

「遊びに行ってくれば、みんなが助かる。」と思われようでは、一巻の終りというものです。

惚れているから返してほしくないお金

谷垣 史好

「恋は魔もの」と申しております。そのためには、自分のもてる力を最大に利用し活用するものであります。

たいへん恐しく感じますが、句を読み返して、砂上の楼閣のような哀れさを感じさ

す恋の詩でもあります。

パンの耳妻もやっぱり戦中派

野田 素身郎

飲まず食わずに耐え抜いてきた戦中派の傷跡であるといえましよう。

同じ世代の夫婦の共感をパンの耳で表現をしたあたり、作者の人生観を直視する姿勢が毅然として表明されております。

やすらぎを求めて川は海へ入る

藤田 泰子

紆余曲折して苦しむように流れてゆくと、ころに川としての特色なり個性があるのです。やすらぐことが出来ても海へ入れば、そこにはもう川はないのです。

仏典にある「悟さとり」をこの句は平易な言葉で綴られていることを見逃してはならないと思えます。

大仏の大きさ御利益が薄いよう

丸山 よし津

奈良朝時代に、この大仏さまを鑄造し建立した工人が、この句をみれば、さぞなげくことでしょう。日に何千人週に何万人になるだけいびとの希望をいちいへんお聞きになるどうでも大仏さまには、たいへんなことだろうと思われてなりません。そのうえ、あの大きなおからだでは、大阪弁でいう「なんば仏でも、そうこまめには、いけまへん」とおっしゃることだろうと思えます。

これもひとえに大仏さまを信仰するあまりの川柳眼の表われとして、お許しをねがいたいものです。

自選百句

阿部 柳太

表札は出張社長昼寝中
挨拶が長こうて西瓜ぬくうなり
土産みな同じに見えて旅終る
子沢山仕掛け花火を残し出る
墓まいり隣は洋酒好きらしい
酒飲んで死んだ親爺に掛ける酒
錦絵の夕立針の降るごとし
看護婦へ旧患やさいも買うて来る
びりけつのママも束子を貰ろて来る
軍拡はせぬのに税金なぜあがる
涸れ切った涙と知らず笑いかけ
計画をされた無駄口とは知らず
奥さんから頼めばコロリ強い奴
土壇場になっても動かぬ妻の腰
風鈴も借金話に音もせず
腹の中笑っているなと妻の目よ
まるい顔してどぎついことを言う
占い師またまた迷うことを言う
不揃いな湯呑み飯場の酒となる
おみやげの湯呑みは自画像のマンガ
下心私はピエロになりきれず
下心ネオンの赤に見すかされ
探したら財布は妻の手に戻り
相手など誰でもええとぐれていた
すかたんな女毒針持っていた

姑と同じ言葉で針探す
スレスレの落選赤飯炊いていた
飛んで出た電話へ通話料払え
泣くだけが芸だと腹を見透かされ
温もりが汚職へ続く席にいる
温もりも無いと家裁が匙を投げ
囲みが解けたら裸だった私
金銀で囲み結局王手飛車
けつたいな夫婦リズムはどこで合う
正業に就いたでリズム狂わされ
仲よしになって荷物を持たされる
落選と聞いて取り巻き消えていた
ペアで着る毛糸の文字は絡み合い
遠くから来た石仏の艶めかし
値切るだけ値切ってチップを出すゆとり
札束はねだる度合を読んでいた
初詣テレビですます職につき
銭と暇あれば飯場はお正月
洋モクの箱にピースを詰めて吸う
新聞がどうあろうとも君と僕
四捨五入されているお世辞
極楽の切符は俺に届かない
ペアの切符私に呉れてどうするの
紙吹雪青一色にする舞台
人類の警笛尻目に核で賭け



約束は手帳の中で消されてた
銭くれたほうへ約束ついてゆき
約束を団結をして破らんか
看護婦のつめたいほうが美人なり
逆光の背にシャッター意識する
その乗り気サクラで囲み読んでる
銭だけが味方ですとはさびしいね
反核で港の水を騒がせる
うどんの好きな女で嘘が下手
出口だけあけて銃口待っている
ひとり来て夢ばかり追う旅の風
夫婦旅昼はうどんですます駅
買わぬ旅他人のみやげ持たされる
大物の居眠り作戦とみられ
世話好きが結局鍋の底つつく
草餅は売り切れました俄雨
同様の裏でアジトはテロを練り
借金舌へ味噌汁熱すぎる
肘鉄へクールな顔でまた口説き
やせ馬に重荷だつせと辞令言う
けちんぼに育て親にもくれぬ金
見せとない新聞故郷の母も読み
吾が日記罫という字は持っていない
伝統をのぞけば楽屋火の車
鮎はたる競うマナーで戻る川

神様も団体さんを優遇し
プロ級の汗は見えないとこでする
軍拡は承知減税夢を追い
温水のプール過保護と言うなかれ
手を切ると見えぬデートへ春の風
巨人また負けて虫歯がうずき出し
パソコンに失恋ですと割切られ
出初め式帰りガス栓締めなおし
年玉に貰うたスキーで足を折り
ポーナスの税額なんでも読み直し
寺内町くわえたばこへ碑が論し
テレビまで粗大ゴミというお国
出目金に失恋の顔のぞかれる
いつからか夫婦スタイル口にせず
戦争を語るぬ父の傷痕章
鳩時計空巣ドッキリさせて鳴き
鈴つけてぬずみの捕れない猫にする
カレンダー連休さまを読む若さ
核心を突く下馬評を遠ざける
知恵と金借りてやりくりまだつかず
借金に來たのに炭をついでくれ
ナイターになっても決まらぬ議長選
空財布ナイキミサイクル買いました
パン食がだんじり囃子遠く聞く
近隣のよしみへ迷う日本史

自選百句

市川鱗魚

師を思う深さに跳べぬ水たまり
まだ種火ほこほこ派手にする下着
無礼討ち妻が笑うと討ちにくい
一揆の碑過疎は御辞儀をして通り
里のもてなして心から酔わされる
脱ぎつ放しの下駄へセールス座り込み
糸流す蜘蛛に舌うちなどきかず
夜の蝶紅を落とすと子守唄
きつと翺ぶ一羽を希う千の鶴
人妻と出会いきわめていい話題
代理出席無礼討ちから外される
踏みつけた花から果し状が来る
切れてから女は履かぬ男下駄
商魂はたくまし二の矢もうつがえ
絆とは他人夫婦の糸ぐるま
逢うだけで唯それだけでバスを待ち
もう妬かぬ女月日がある指輪
年いくつ重ねても恋花を選ぶ
壺の中の暗さ他人の悪だくみ
黄授万才しみつく土の手を洗い
笑い羅漢で怖い父とは思われず
昭和一と桁父の歩幅にやや左
宮仕えいつか菜種の彩でいる
空缶も蹴ると不逞な面構え
母がいるからふる里の夜で火鉢

真つすぐな訴状は庶民だけのもの
タンポポの綿毛あわてたアスファルト
生ビール娘ののどが美しい
罪責める活字で鬼が喋り出す
プラカードその贅沢な労働歌
子が継いでくれる余生のふくみ酒
地に逼って叙勲御紋菓子に語る
悪あがき世間は味方だけでない
母へ言い過ぎて溶けない角砂糖
忠君愛国父の遺言ならわかる
妻を打つ拳ぐらいの意気地なし
日の丸を振る仕合せよ背を伸ばす
逢うて来た温もり鈴が鳴り止まず
風のない方へ向いてるお人よし
フアッションは美学女の官能美
真つすぐに歩く歩幅に妻がいる
菜の花の彩でだましに来るうわさ
生花一對バラは仏に許されぬ
女医として水子の闇は哭きつづけ
止め釘がぬけたこの人よく喋り
雑魚は雑魚群して生きる知恵もち
商いは鬼とも見える河内弁
昂ぶりの背筋をぬける怖い風
野鳥保護ふる里そばを蒔くところ
窓ぎわの机牛乳ビンの花



会うた夜のうつり香まぶたとして

仮面から女のとしは読みとれぬ

独り芝居で妻亡き酒の後始末

にわたりの首面白う餌をもらい

後添いの賭けた桂馬が効いてくる

師の影に三歩どころか足をのせ

まだ女ですと嗤った生理痛

村はダムどの樹もみんなよく喋る

手話の指からませとても話ずき

灯を消すとかなしころころ子が背く

都市は砂漠とても足跡のこせない

消しゴムを七十と言うとして持つ

赤ばかりの仕置きで交差点ぬける

日の丸はいいなと思う松のいろ

濡れツバメ会いたい心深くする

人の背を指さぬ小指が美しい

食うだけのゆとりが風を丸くする

椿の朱尼僧の袖にある若さ

春の風女が裾を油断する

青竹を持つと子供をさつくする

いいんだよ損する向きに立つた兄

そんなはず無いかと覗き窓を開け

貧すれば鈍す小銭をにぎりしめ

一筋縄で行かぬ疑いもち初め

莫迦は承知ですと神様困らせる

ハンカチの白き飼育の中にいる

直線の言い訳きかぬ葱坊主

桃彩があるから女ずるくなる

ニユールック程よい嘘でにくめない

紳士の面ぬぐと餃子の好きな人

蟻の列冬の長さを知っている

流れ雲いつか故郷へ来てしまふ

地藏開眼事故より続く母の花

唐草の荷が来る今日は父も酔い

柿すだれふる里低き軒づたい

見下ろされ嫌いどの家も鬼がわら

北の海軍歌のままの島がある

瓢たんの駒を気弱にまっている

千の写経いっこう刑余にはなれず

ほだされる情は針がさしてある

女一人住んでするする開く雨戸

樹海冬勿論春のはなしする

庭の隅今年も覗く露のとう

バラの深手は他人に言えぬ阿呆鳥

父の目の中で育てる男の子

鈍行の酒売る駅は月がある

寡婦鈴をふる日一途な物思い

親と子の水は一つでなぜ解けぬ

疑わぬ妻に砥石がねむくなる

会えば皆明るい春のメッセージ

◇ 同人アンケート

「私のたからもの、
「チョット変った
故郷の年末行事、

整理・榎谷寿馬

寝屋川市 北田 綾子

我が家の三代前の祖父は浄瑠璃を教えていたらしい。歳の中で細長い箱を見つけた。開けると將軍様の御簾のようなのが巻いてある。その下に黒のピロードの貼った板へ上り竜下り竜が金で貼りついている。みすの左右に立てかけるらしい。この中で曾祖父が浄瑠璃を語っておられたのかと想像する。箱の蓋裏にお弟子さんの昔式名がずらり並んでいる。連中と書いた墓石や位牌に「辞世、佐恵ぎ禮し

雲も霞もはれ渡りさやけき月を今そながめ無」と刻み込まれている。相当盛んだったらしい。私の住所寝屋川市堀溝は、昔関所があり鶯が沢山いて鶯の関といった。宮は鶯関神社、寺は鶯関院一心寺、住職の名は関本巢本の地名鶯の地蔵とある。実家の父は昔、堀溝まで夜テクシーで冠句会に来、茶碗、焼網等を貰って来た。秀逸に和綴り達筆の立派な選句集が贈られたようだ。地藏盆には冠句を奉納したと聞く。川柳と冠句は親戚と聞か、有りし日の短冊のすがたを偲んでいる。

鳥取県 新家 完司

長さ二十センチほどのペーパーナイフ。

握りのところは純銀で飾りが彫ってあり中に豆ナイフが収まっている。私の二十歳の誕生日に小学校時代からの友達五人が金を出し合ってプレゼントしてくれたものだ。以来二十数年重宝している。送り主の友人達は奈良、高松、茨木、尼崎、神戸とみごとに散ってしまったが、年に一度正月三日には鮭が故郷の河に戻ってくるように遠路はるばる全員集合する。雀卓を囲んでの久しぶりの語らいは時の過ぎるのを忘れ気がつけば朝顔や休つきはどう見ても中年のオッサンだが話している

ことは中学時代そのまま、たわいないことと笑いころげ初恋談義に顔を赤らめる。そして又さよならだ、振り向きもせずそれぞれの戦場へ戻ってゆく。いずれ時が来れば順番に消えてゆくのだろうか、そんなことは信じられない。大切な私のたからものである。

鳥取県 北川 民子

私の宝ものといえは結婚した翌日、亡父が仲良く強く生きるようにとくれた古びた掛軸で、虎が二頭描かれたものでした。あたかも戦後間もない頃で食料は勿論物資不足で宝ものなど縁のない生活でした。歳月は流れ定年退職した主人は誘われて陶芸へ、私は川柳に入会させていただき井もと抹茶碗ともつかぬものへ川柳か何柳か判読できぬものを書きなぐりましたが、そのうち小砂白汀先生、先輩の方達のご指導のもとに抹茶碗に川柳らしきものを書入れて楽しんでおります。遠方へ嫁いだ娘がお母さん、これ私の宝ものとして大切にしているからと、他の品々と共に宅急便のお世話になりました。その後、電話で「宝ものでのお茶は格別ね」の言葉が嬉しくて今年には梨も一箱余分に送りました。こんな身近に宝ものがあるとは夢にも思いませんでした。「同

伴が歩幅あわせて今日がある」茶碗に書いた拙吟です。これからも歩幅あわせて末長く精進したく思っております。

岡山県 二一宗 吟 平

私の宝物は沢山ありますが、その一つは柳友です。柳友の内で当町公民館に設けられた老人のための春陽大学川柳クラブの柳友について紹介します。昭和五十年四月に発足して私が会長となり、ただ今会員五十三名で柳誌百二十二号を発行しております。当クラブは有名な作家を志すものではなく、上手下手を問わず一人から一句は必ずとり、楽しい環境を作り辞書の一つでも引いて忘れた字を思い出したり、温かい人情と楽しい雰囲気での化防止の一助になればと頑張っております。五十号を記念して句集「輪」を発行、また川柳五十撰の額を作り百号を記念して川柳五十撰を当町名所お滝様と福祉センターに掲額しました。その他年一回の吟行旅行も行なっております。発足以来柳友の他界者十五名あり協力して戴いた方はかり私の宝物として心の奥底に納めております。川柳塔の藤村メ女様や当町川柳会の方々には大変お世話になっていきます。

私の句「川柳で余生楽しむ輪をひろげ」

高槻市 竹内 花代子

今まで私の宝物としては何もなく又欲しいと思つたこともありませぬ無頓着な私でした。ところが昨年九月十日、夫若柳潮花を亡くし遺品が皆宝物に見え何とも言えない不思議な気がし、その中でもとりわけ柳歴五十年に及ぶ川柳の数々、色紙短冊に自筆の絵や句を書き残してあり、些細なものですが、私には何よりの宝物と思つています。

次に失くした物で宝に思えたのは夫が勤めていた頃、同じ職場の人に定退記念にと特別指に合わして細い彫刻をした手作りの指輪を頂いたのを私にくれました。それ以来私のくすり指に納まり昨年まではめていましたが、夫が亡くなって間もなく紛失しました。私の指が細くなり抜けてしまったのでしよう。それを今も悔いています。

夫と過した想い出を宝として胸の小箱におさめ残りの人生を大切にしたいと思ひます。

宝塚市 丸山 よし津

「あなたの宝物は」と尋ねられたら「人間

関係」と躊躇なく答える。昭和二十年三月の空襲で、最愛の妹と甥、それに物質のすべてを失つてしまった私だから……。

姉が焼夷弾で負傷して収容されていた病院で「ここは○日迄に出ないといけないの」と一言友人に漏らせば、すぐに恩師が、市民病院外科部長への紹介状を書いて、お見舞に来て下さった。丸裸で両親も無く、結婚願望など全くなかった私に、強く結婚するよう勧めて下さったのは、職場直属の上司であった。子供達が巣立つたあとに私に川柳セミナーへ誘ってくれたのは同窓の友である。そのお陰で私には勿体ないような先生方、多くの心温かい句友に恵まれ、また私の宝物が殖えたことは本当に嬉しい。

語り尽くせないほどの恩恵をもたらせてくれた「私の宝物」、感謝を忘れずに、大切にしていきたいと思つて行きたいと思つて。

兵庫県 松本 ただし

生まれて間もなく、這いかけの時分、二階の手摺からはい出して屋根に落ちた。幸い物干しの柱に引掛つて隣のおばさんの知らせて事無きを得たことを後年知らされた。今もつて高所恐怖症はその時の物かも解らない。命

拾い第一号である。

長ずるに従つて学生時代、海で沖に向つて泳いだところ、疲れて戻ろうと後を見ると、岸ははるか彼方、後戻りの自信も心許なく必死の力泳で、足が砂に触れた途端、膝がくずれそうになったことがある。爾後工場で数十種の距離を置いてあわや荷物の下敷になりかけたのが二回、戦時中、焼夷弾が足元に落下して、幸い不発弾だったので七十年近く世の中の大きな移り変りを目にすることが出来た。私と一番長く、浮き沈みを文句も言わず共にして来てくれた私の命、この宝を家族のためにも大切に温めてゆきたい。

名古屋市長 越村 枯梢

貧農の二男に生まれ十八歳で家を飛び出した私には伝来の家宝という物には縁がない。「私の宝もの」の題を頂いて思いついたのは古女房であつた。酷使五十年近く何一つ報いられなかつたのでこの際一つ婢どのを持ち上げて宝ものにしておこうと決心した。草案もまとまつた時は丁度主幹某先生の喜寿金婚祝賀大会の前であつた。先生のご挨拶を拝聴している内に何だか私の書こうとしていたことがみんな先生に先取りされてしまつたようであつた。

あつた。妻の姿態容貌は欲目に見て中の下か下の上位の所だろう。誰かさんではないが頑丈に出来ている重戦車の上である。二人で歩くことはめつたにない。「川柳の人に会つたらいやだ」とこのことで名古屋柳社の同人でも私の女房を全く知らない。「枯梢さんの奥さんはきれいな方でしよう」と言われる、そのまゝのイメージを残しておきたいからである。

近江八幡市 前川 千賀子

滋賀に特別な年末行事はないのですが、奈良を凌いで、京都に次ぐ神社仏閣の多い地でも「お伊勢参らばお多賀へ参れ、お伊勢お多賀の子でござる」と信仰を集める、彦根城から車で約十五分の多賀大社に、年末を取材してみました。ここは、国土万物をお生みになつた伊邪那岐神、伊邪那美神をお祭りし今年、三カ日の人出は三十八万人。沿道、境内は通勤ラッシュを並みですが、それを迎える大社も、十二月になると鐘矢、絵馬、土鈴、くまで、笹、箕といった縁起物の準備、二十日を通ると、御札作りの夜なべに追われるそうです。ところで、お正月、楚々とした白衣、緋の袴でお手伝いをする巫女さんのアルバイト料、どれ位だと思われませんか。若さで

売る筆者？が電話で尋ねたら、学生と疑わず教えてくれたのは、元旦一五日朝八時から夕五時、食事、衣装支給、交通費なしの一日三千八百円でした。

姫路市 人見 翠記

日本一の城と謳われている姫路の町に相応しい。ゆかた祭り。という祭りがある。六月二十二、二十三、二十四の三日間ゆたかの着初めをする。幼い子供は母親の手に引かれ手に手に提灯をさげて大手門から立町の長壁神社まで練り歩く、その姿がお堀の水に映る様はまことに平和な情緒豊かなものである。戦後活気のないそして梅雨期で人出も少ない季節になんとかして町に活気を取り戻したい念願から先ず呉服商組合呉友会長の三木正二氏が立上り、市の観光協会呉友会員の方々の協力を得て今日の盛況を見るようになったとか。ちなみに三十二年も継続して来た今日、人出は年々ふえ約四十万人、出店は南から北から集り約八百軒とか、その盛況に色を添えるに現城主酒井様、市長、ミス浴衣達がオーブンカーに乗つて城下をパレードする盛況振りなので、こんな祭りはおそらく他に例を見ないものではないかと思ひます。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

田口虹汀

母のない子が満月を描きたがる

紀市郁栄

丸い月に愛を求める子供の心情を描いて妙

煮干し乾す匂い故郷近くなる

福田礼子

若い頃私も地引網に出て煮干しを作ったことがあるが、晴天の砂浜に乾いて行く煮干しの匂いは懐かしい故里の匂いだ。

母の手になじんで光る鯨尺

永田俊子

大勢の子を持つ母親は子の晴着、浴衣と丹念に針を運ぶ。おそらくこの母は明治か大正生れか、メートル法の今日、鯨尺を持つ母の手に愛の光が見える。

亡夫との思い出楽しい事ばかり

森脇和子

生前の夫は厳格人でうるさい人だった。し

かし今亡き夫を思う時、あの空の旅は、温泉の一夜は、と楽しい思い出が走馬燈のように。

やっと捕まえた尻尾を放すものですか

赤木和子

良妻賢母とて女である。私の顔も二度「放すものですか」が効いて恐い強い女の裏面を覗かせた。男よ夫よご用心。

働いた今日を満足して眠る

茂見よ志子

汗ばんだ体を湯槽にひたり、妻子の笑顔に囲まれた夕餉の膳、今日はよく働いた、一本の晩酌に眠る顔に満ち足りた笑顔すら見える。

振り袖が出来てくるので伸ばす髪

矢倉五月

手塩にかけて育てた娘も振り袖の似合う齡になった。和服には黒髪がほしい。母娘の楽しい日々が目に見えよう。

ジャンケンで負けたら妻の肩を揉む

笠嶋恵美子

若夫婦の離婚沙汰のニュースの多い中に、微笑ましい家庭の一コマ。

一杯は義理お芽出度へ下戸の酒

小山悠泉

私は不調法で、などとは言えぬ芽出度いお祝いの席、下戸はいっきに飲み干した。

出稼ぎへ洗い晒しを詰める妻

待田麻黄

待ちに待った夫の出稼ぎの日取りがきまる。せめて小綺麗な仕事着を、と妻の情愛を詰める姿に臉が熱くなる。

ピカソの絵解説読んでから観よう

信本博子

この頃よく見る川柳にもピカソ調のものが多。己の力不足もさることながら、味の出るまで咀嚼することが出来ぬもどかしさ。

幼虫の昔は言えぬ黒揚羽

山口高明

不動尊を祀る杉木立の奥から滝の音が聞えて来る。悠々と羽をひろげる黒揚羽にも幼虫の昔はあった。成長した彼はなぜか昔を語ろうとしない。貝のように口を閉じたまま。

言葉まで変えさせているダイヤです

大川幸子

にんげんの性よ哀しや戦さ好き

高杉千歩

折れそうでいてコスモスのしたたかさ

安田志津

ジュニアの部

えんぴつをもって机ですぐねてる

二宮拱子

ぼく一べんにゆうどう雲に乗りたいな

二宮正彦

心あたたまる九州への旅

— 川柳塔唐津支部三周年記念川柳大会参加と熊本 —

黒川 紫 香

唐津へ

■九月十二日(土)

新大阪駅の朝は旅立ちの人でいっぱい、ガヤガヤと集まって来た連中がしゃべりあっている間に予定より早く全員の顔が揃う。

薫風、形水、太茂津、寿馬、雀踊子、鬼遊岳人、凡九郎、正坊、メ女、紫香の諸氏に交って新顔の上田佳秋、園田文子さんの顔が見える。直に大阪発のひかり22号に乗車。

大阪を出た頃から危なかった天候は岡山を過ぎるともう雨が窓外を叩いた。雨後晴、これが川柳塔吟行の常識でありそれを信じて列車は山陽路を走る。車中で昼になったので持参の弁当を開く者、車内販売を買う者、残り一人立ち二人立ちして食堂車に来る。さすどに大阪仕立ての車だけあってメニューはうどん一色、誰かが「浪華情緒たっぷりやなあ」と言ったのも道理、食堂車でうどんばかりというのも珍らしい。関門トンネルをいつしか

通り抜け九州に入ると間もなく博多に着く。

博多構内ではもう「川柳塔唐津支部」と大書した紺色の旗を掲げて田川虹汀氏、浜本義美氏と久保正敏氏のご夫妻そして浜本久仁於氏、筒井朴竜氏、相葉あきさん等が迎えて下さる。賑やかで和やかな出迎えになる。一列車遅れて規不風さんも合流したので用意された豪華な観光バスに乗り込む。

繁華な博多の街、玄海灘が見えるというバスの中は華やかである。話の輪が広がって爆笑の連続、こうして直ぐ打ち解けるのも川柳塔誌上で馴染みのある人達ばかりなのであろう。川柳っていいなとふと思つた。

博多を出て約二時間、少憩のため寄った唐津駅は近代化されて立派である。以前来た時降りた唐津駅とは様相が変っていた。ここで仁部四郎氏外の出迎えを受け再び乗ったバスで人員の点呼をしたがどうしても一人足りない。「誰やろ」と顔を見合せたが判らないの

で名簿を出して名を読み上げると太茂津さんの所で行き止った。

「あつ太茂津あんを博多へ忘れて来た」

と異口同音に声を出す。博多を出て約二時間、誰も気づかなかつた迂闊さと焦燥にかられた頃、念のためにと鬼遊さんが構内を探し廻って運よく汽車で後を追って来たという太茂津さんを見つけ出して連れて来た。トイレに入っている間に皆とはぐれてしまったと言う太茂津さんに誰かが「さすがは大物だ」と感嘆しきり。以後事ある毎に「太茂津あんは居るか」の聲がかかるようになった。

バスはやがて古唐津焼の窯元に着く。豊臣秀吉が朝鮮出兵の折、連れて来た陶工によって始められたという唐津焼、「詫び」に通じるといふ。叩きの手法は無形文化財になっているほど見事なものである。

窯元を出て二日間厄介になる宿、洋々閣に着く。昔は遊廓だったというこの宿は自然風に植えられた松原の庭、銘木をあしらった部屋、の落ち着き、廓といつても上流武士が豪商が一夜の夢を結んだ所らしい風格がある。その夜は内輪だけで宴を張って明日への期待と闘志を沸かせて眠る。

■十月十三日(日)

大会の当日である。朝食が済むと迎えの車が来たので会場(文化会館)に向う。着いた会場ではもう受付が始まっていたが、時間もあるので隣の曳山展示場に寄る。十月二、三、



あいきつする田口虹汀氏

四の三日間豪華華麗に催される有名な唐津くんに曳行される曳山が展示されている。漆の一閑張りと言われる曳山は重さ一丁四トンあって赤獅子をはじめとし兎、鬼、鯛、飛龍等十四基それは見事なものであり、くんち祭りの素晴らしさを想像させる。

やがて時間が来たので大会場に入る。僅か十数人で発足したという唐津支部も今は大勢の方々が順序よく、そして行き届いた接待で会場いっぱいに参加者で埋まる。司会者によって開会が告げられ挨拶、来賓の祝辞とつづきご病氣静養のため来られなかった某主幹に代わって太茂津さんが壇上に立ち「五十五万五千石の紀州から駆けつけました」の言葉からはじまるお話は万雷の拍手を浴びた。昼食の後再会のはじめは唐津ご自慢の「曳山ばやし」が豪壮にアトラクションとして演出される。黒木綿の腕貫、腹掛、股引き等に身を固めた若い衆が十数人、笛、太鼓、鉦ではやす見事さは鬼遊さんをして「涙がこぼれた」と

言わしめたほど賑やかで感動を覚えた。披露に入る。大きく呼名するもの、はにかみながらする人、何処も変わらぬ風景の中で二人の少年少女が声を張り上げての呼名に皆から大きな拍手を貰う。とにかく大会は他柳社の方の応援もあって盛況裡に終わり祝福しつつ三五退場する人達に満足感と次に来る五周年に期待をふくらませていた。

すっかり止んだ雨に気をよくして宿に引き上げる。その夜は唐津支部の肝入りで大歓迎



大会会場

宴となる。すっかり打ち解けた人々と共に唄あり踊りあり美女を交えての酒宴は更け行く夜も忘れがちになる。

■十月十四日(月)

迎えのバスに乗込んだのは九時、袴を脱いで観光を楽しむ。郷土史家山崎猛夫氏のご案内で唐津の皆さんと共に延々とつづく虹の松原を抜けて鏡山に登る。今日は空に雲もない好天気である。見晴し台から見ると景色は本当に素晴らしい。真下の唐津城、そして城下町、玄海に浮ぶ島々は絵のように美しく遠い彼方が志岐だという。

再び唐津に戻って近松門左衛門の墓と曾呂利新左衛門が造った庭のある近松寺に詣で一路名護屋城趾へ。

秀吉が各大名に造らせた名護屋城は跡形もないが、広大な台地から見る玄海灘も美しい。呼子の漁村を通して寄った海鮮料理の「マンボウ」は海に浮んで生きた魚を食べさせてくれる。唐津には七ツ釜その他見るべき所が多いが、来るべき五周年大会に心を残してやがて博多に着く。

唐津の皆さん本当に有難うございました。

出迎えから送りまで心の籠ったもてなしに感謝の言葉でいっぱいです。五周年には倍加して訪れようを合言葉に皆さんとお別れました。

熊本へ

博多で一行と別れた私とメ女さんは特急有

明で熊本に向った。午後五時半、熊本駅の改札を出た途端、にこやかに迎えて下さった芳仙さん一行の姿が瞳に入る。熊本の皆さんもそうであったらしく別に旗その他の目印を掲げなくても直ぐに判るほど親しみを感じるのも唐津同様川柳を楽しむ者の絆ではないかと思ふ。

予約しておいたホテル東急インに案内して



熊本川柳会の人々と共に（熊本東急ホテル）

前列左から永田俊子・藤村メ女・黒川紫香・黒田緑・高野青草

後列左から大川幸子・宇野昭代・北川一進・有働芳仙

いただくともうこの地下特別室に歓談の場が設けられてあった。ここで待つておられた熊本川柳会会長の黒田緑氏、それに駅まで来ていただいた有働芳仙氏、高野青草氏、北川一進氏に女性の永田俊子さん、大川幸子さん、宇野昭代さん等、既に川柳塔誌上でお馴染みの方達ばかりである。みんな故田中辰二先生ご夫妻の教え子達ばかり。

田中辰二先生は鳴風と号し、学者で麻生路郎先生とは非常に親しく特に川柳雑誌では客友としてよき川柳の理解者であり指導されていた。その田中鳴風先生が永らく病床に臥されたのを心配して路郎先生は空路熊本へ飛び見舞われたことが川柳雑誌昭和三十一年十一月号に載っている。

二十一年後の同じ十月私が熊本を訪れ田中先生にご薫陶を受けられた人達とお会い出来たのも奇しき縁と言えよう。その時鳴風、路郎両先生と共に当時川柳雑誌社八代支部長だった佐野ト占氏を交えて撮られた写真が同じ号に載っている。これを写されたのが黒田緑氏であったことも記事で知った。ト占氏もお体をこわされてお会い出来なかつたのが残念である。

鳴風先生亡き後、夫人の美喜子さんが遺志を継いで指導に當つておられたが、夫人も昨年他界され、今は緑、芳仙両氏を中心に十人余りで熊本川柳会を発足させて研鑽を積んでおられるそうである。

九州には名ある柳誌も多いが、あくまで鳴風先生の遺訓をそのままに、終始一貫して川柳雑誌「川柳塔」の句風に親しんでおられる姿は美しいと思う。それやこれやの懐旧談に花を咲かした熊本での一夜は楽しく忘れ難いものになった。

■十月十五日（火）

快晴の朝を迎え、ホテルの窓を開けると熊本城の青い森が清々しく眼に入る。程なく迎えに来られた皆さんにご案内いただいた近隣の熊本県産館に入る。県下の名品名産の数々を見て廻り車を拾つて水前寺公園に行く。ここは三、四年前、川柳塔九州吟行の折、立寄つた所だが、いつ来ても美しい公園である。五十三次を型どつた緑の庭園、透きとおる池には鯉や鮒その他の魚が生き生きと泳いでいる。修学旅行の団を抜け、話しながら熊本城の皆さんと歩いていると古い友達と会っているような気になる。やや歩き疲れて寄つた茶室で一服ご馳走になっていると澄んだ空美しい庭が一幅の画に写る。水前寺公園を出て途中昼食をいただいて熊本駅に出る。

最後迄ホームへ見送っていただいた女性陣と固い握手を交わし、再会を約してお別れをした。

唐津が動なら熊本は静、どちらも心に触れるものがあつて川柳のつながりとは楽しいものだなとつくづく思う。ご厄介になつた皆さまに心からお礼を申し上げたい。

落合正江さんを悼む

尼 緑之助

いずも川柳会の朗らか外交のエキスパート落合正江さんの訃報を聞いたのは九月十六日。見舞いに行かねばならぬと思っていたが、順調に回復されているとばかり思っていた矢先のこと、しばし絶句。

六月頃から全身が痒いとかで不調は聞いていたが、六十三歳熟年七十キロの巨体、別に表面は何ら変化を見られず、まさか死が待ちうけていたとは夢想だになかった。間もなく県立中央病院に入院されたが、すぐ退院、自宅療養が一月、そして医大病院に再入院、胃潰瘍の疑いありとかで手術。ああその手術がすんだら当然回復されるだろうと信じていたのだが、意外にもその後が芳しからず、遂に悲しい日が来たのである。見舞いに行けなかったことが悔まれ、長く尾を引いている。

正江さんは性来明朗闊達、男まさりの快活、長年会社勤め、小企業の勤務先だったが、その支配人的立場で男性職員を巧みに指揮しておられた。数年前退職、家庭の指揮官とし

て悠々自適の最近だった。

元來器用な人で、書、画をよくし、ちぎり絵、陶器にも一見識があり、川柳に入られたのは十年前からで、踏み出し当時は、器用だけで作句されていたが、いずも川柳会の準同人の頃から進歩が見られ、と同時にそれなりの研究、勉強も進み、いずもの同人、川柳塔同人に推されてからは、目に見えて向上が見られ、衆目を浴びる最近、今後の成熟を期待されていた。

十九日葬儀には多数の柳人が会葬されたが遺影が話し足りない、不満の目を向けて居られたように思われたことである。

左記遺作を並べて追悼の意を表したい。

炊飯器バチリと今日の音がする
満ち足りて自己を忘れた青い鳥
建前と本音を抱いてヤジロペー
春ですよ紅梅笑う白盞壺
納まらぬ虫がじつくり語を選ぶ
丑の日にうどん二つ老いの幸
繕った破れ袋に満たす愛

入院

しばらくは休養なりとほぞを決め
入院の独楽はしばらく音立てぬ
独楽ころり倒れ切腹待っている

川柳塔社常任理事会（11月1日）

出席者―栗・薫風・形水・紫香・大茂津・敏萬的・雀踊子・柳宏子・文秋・鬼遊・重人・岳人・天笑・小路・凡九郎・寿馬・笛生・白浜子・杜的・智子・武庫坊・射月芳・一二三健司・正坊・史好

〈議事並に報告事項〉

▽栗主幹が10月30日退院され、美与子夫人同道、元氣なお姿を見せられた。新顔、多数出席、新しい会場も手狭まなほどである。

▽川柳塔唐津支部結成3周年記念川柳大会の報告が紫香氏よりあり、心あたたまる地元のもてなしに感激、今後も交流を深めたいと強調された。

▽61年1月15日（祭）恒例の新春おめでとく会を別掲（表紙裏）の如く決定。

▽古川美津枝、茂見よ志子二名の同人推薦を了承。

議事終了後、9月29日の記念大会の8mm（白浜子編集）を映写、7日本社句会での上映を決める。

■12月の常任理事会は2日（月）

会場は高松会館別館

亜欧旅日記

(下)

ヨーロッパ編

田中正坊

七日間にわたるシルクロードの旅を終えた私たち一行は、ソビエトの客船ベルロシア号で黒海からエーゲ海を経て地中海へと、五泊六日のクルージングをつづけた。船内における黒海の水をたたえた円形プールでの水浴、各国人競演のコンサート、ウォッカ・パーティーも楽しかったが、やはりすばらしかったのは船上からの眺望であった。

八月十二日、ティー・タイムの後、デッキに上ると、ところどころに堡塁の跡がみられる両岸がしだいにせはまり、ボスボラス海峡にさしかかるところで、往來する船はいずれも赤地に月と星のトルコ国旗を掲げている。船はやがて「東西文明の十字路」といわれるイスタンブールを二分する海峡、そして亜欧両大陸を結ぶ巨大な吊り橋の下をゆっくりと

通過し、マルマラ海に入った。この橋は一九七三年、イギリスの企業によつて完成したもので、今、日本の企業も参加して第二ボスボラス架橋が計画されているという。

ベルロシア号は、北イタリアのジェノバへ到着するまでにギリシャのピレウスと南イタリアのナポリに碇泊した。ピレウスからバスでアテネを訪れ、アクロポリスの丘に登ったが、炎天下、灼けつくような石だたみが色とりどりの各国人観光客でこたえ返す有様で、映像で見てあこがれていたバンテオン宮殿や六人の少女像で知られるキャリアティデスもさほど感動を呼ばなかった。

また、十五日にナポリに上陸したが、ここはかつて古代ギリシャの植民地であったのがナポリ王国の首都となり、後にイタリアに統



一された町。海岸に突き出したアンジュ家のエッグ・カステル(卵城)、歌劇場のテアトロ・カルロ、武装した歴代王の大理石像が並ぶブルボン王宮などを見学し、フェニクスの並木道や真紅のカンナが咲き乱れる海岸通を通つてナポリ湾を見渡す丘に立った。しかし、この日は霧がかかり、ベスピオ山がかすんでいたこともあって、「ナポリを見て死ぬ」といわれるような風光には逢えず、あまりにも観光地化された名所の悲哀を味わった。

いよいよジェノバ上陸。イタリア最古の港町で、古い塔やロマネスク・スタイルの石造建築がひしめき、中世の城門の傍らにコロンプスの生家がひっそりと建っていた。海岸通は松並木がつづくピラ(別荘)地帯となっており、中国風の屋根の門がどことなく東洋的なふんい気をただよわせていたが、夕食後、誘い合わせて夜の観光に出かけた。

バスの窓から見る表通は美しいが、足で歩く裏通はやはり汚れが目につく。道を歩いていると、頭上にピアノが鳴っている。その建物の玄関から大理石の階段を昇つて廊下を曲がるとギヤラーがあり、古い油絵がこともなげに並べられている。その奥は内庭となっており、照明灯の下で大ぜいの市民がテーブルを囲んで、野外のピアノ演奏を楽しんでいる。古い貴族の館で、今は文化会館となっているらしかった。

さてこれからは、イタリア・フランス両国



アヌシー湖の船着場

内の列車の旅。十七日朝、ジェノバ駅から乗車してトリノで乗り換え、車窓からアルプスの山々を眺めながらエクスレバンに着いた。列車内で国境を通過したわけだが、チロリアン・ハットの婦人と髭面の入国管理官がリーダーのパスポートをチェックしただけで簡単に入国OKとなった。エクスレバンは、国立温泉研究所のある人口二万余の避暑地だが、日本人ツアーが訪れるのは初めてとあって、私たちが十六世紀の城であった市庁舎を訪問した際、市長が歓迎の言葉をのべてくれた。そして翌日、バスでアヌシーのサヴォア王家の霊廟があるオットコンブ大修道院を訪れ

た後、遊覧船でアヌシー湖を一周した。紺碧の空とそれを映すやや緑がかった湖水、三色旗のひるがえる船首にはかもめが群れ飛び、シャトー（古城）が点々とする周囲の山波を遠望してさわやかな風光美を満喫し、湖畔のレストラン「サリノ」で本格的なフランス料理を味わった。

フランス料理といえば、リーダールの黒木名誉教授が料理通で、ポーヌの「エルミタージュ・コルトン」、リヨンの「レオン・ド・リヨン」、ブローニュの森の「ブレ・カトラン」と、いずれも一流のレストランでエスカルゴや子羊の脳髓といった珍味も賞味したが、花壇に囲まれたベランダのマロニエの樹蔭で食べた鱒のワイン蒸しの味はまた格別だった。

次の訪問地のリオンは、シーザーが開いた町で二千年前のフランスの首都。中世は絹織物の町として栄え、現在、近郊町村を加えると人口百二十万人、パリに次ぐ大都市だが、年間訪れる日本人は、パリ五十万人に対して二千人とあまり知られていない。

見どころは、紀元前十九〜十七世紀の遺跡があり、市内を一望できるフルビエールの丘で、今から八十年前に発掘されたローマ劇場は、大理石の舞台を半円形に囲んだ階段式の客席が一万二千、別に三千八百人収容のオデオン（小劇場）もある。丘から見渡して目立つのは、新市街に建っている鉛筆型の九ビルで地上三十階、シヨッピング・センターが隣



フルビエールの丘から見たリオン市街

接している。ルーブルに次ぐといわれるリオン美術館が休館していたのは残念だったが、サンジャン教会や建物の内庭から内庭へ縦横に通ずるトラフル（路地）のあるオールド・タウンを見て回った。

旅も終りに近づき、二十一日はポーヌのワイン倉を見学、デイジョンからフランスの誇る新幹線TGVでパリに着いたが、マロニエ並木はすでに色つきはじめていた。

初歩教室

題 — 夢 —

阿 萬 萬 的

「夢」と言えは希望もふくらむものだと思つていましたが、川柳人口が老化しているせいでどうか、何故か淋しい句が多いようでした。希望ある句からはじめましょう。

空翔る夢は飛んでくシャボン玉 カネ
シャボン玉じやはかないですね、私なら
赤い風船飛んでけ青い空の夢)

稜線の向うへ少年夢を置く よし津
カール・ブッセの詩に

山の彼方の空遠く 幸住むと人の言う……
という詩がありましたね。

銀婚へ娘が夢くれたフルムーン 公一
(フルムーンの夢を娘が組んでくれ)

夢のような気がする今の仕合せが 八重
(仕合せ過ぎる暮して不安な夢も見る)

六十路夢ホールインワンまだ画く 明吉
(ホールインワンの夢から醒めた朝の雨)
でかい夢温めてるだけの懐手 悟郎
夢だけはせめて大きいコップ酒 かつみ
(夢だけはでっかくもとう大ジョッキ)

若者よ夢は大きい方がよい
千代女
そして若い夢にはこんなのもありました。

黒髪の前から夢があふれ出す 寿子

炎える瞳の奥ではぐくむ夢もある 寿子

また花に托したきれいな夢も句に……

夢を見ぬ淋しさ語る彼岸花 有佳

夕茜夢が炎えてる曼珠沙華 ただし

遠い日の夢も沁みてる桜貝 円女

蛇の夢見たと黙つてよう居らず 露芳

花言葉昨日の夢を思い出し 達子

よい夢が見れそう宿の百合匂う 高代

夢をみる女きれいに描く夢二 悦子

(夢二描く女はかなしい夢見てる)

中流の夢物足らぬ葉鶏頭 ただし

恋は夢を、夢は又恋を育てるものらしく

夢おうて女 男を追いかける 登美子

恋の夢あと一と押しで眼が醒める 姿洋

白い手と握手の夢に胸躍る 周三

(白い手と握手のとこで夢が醒め)

もう一度続きを見た醒めた夢 斉々

(続きが見たい夢へ枕を裏返す)

子育ては夢を育てているようなものですが

母子手帳うれい夢がこぼれてる 愛子

(うれい夢が見えかくれする母子手帳)

母になる夢へころがす毛糸玉 春枝

子に持たす弁当箱に詰めた夢 博子

(母親の夢も詰めてる弁当箱)

それぞれ夢が重たい絵馬ゆれる 実男
鷹になれそんな夢見る親の愚痴

子に夢を賭けた時代が花だった ちよ
吾が望み果せぬ夢を子に托し 白峰

ちっけな夢への一步パートに出 方子

(パートタイムちっけな夢を育ててる)

だが夢はこれれやすいものでした。

子にかけた夢も破れてひとり住む 静子

母の夢育ち過ぎたり子は遠く 松子

成人へだんだん潤い親の夢 義男

夢もまた年とる毎にしばみ行く 有佳

母の夢一つつ消して子は育ち 新造

夢一つつ消れ女が年をとる

(一つつつ夢がこれれ年をとる)

夢の夢又ふりかえり刻流る カネ

(夢の夢女へはやい刻流る)

老人の夢ひからびた河川敷 静子

六十年夢の一駒浮き沈み

(バラ色ばかりでなかつた六十年の夢)

時はハイテク時代、こんな句もあります。

科学者の夢が神様こわがらせ 義男

ハイテクの技術が夢を消してゆく 里子

ロボットに人間の夢見られまい サワ子

だが産業ロボットは原子炉を操作するし、

小さなものはICのピツとの理込みまで、そ

して科学は夢を無限に育てているのです。

宝くじの句が七句もありました。他人の句

と自分の句を比べて勉強してみても、

宝くじはかない夢をしはし見る 房子

千円ででっかい夢買うジャンボくじ 勝美
夢を買う人延々と競売場 倫子

宝くじはずれるまでの夢を購う 喜多志

夢画く事の嬉しき宝くじ 正之

宝くじ年に一度の夢をくれ サワ子

又夢で終り外れのくじが増え 露芳

また日航事故の時事吟も悪夢として 公一

空の旅夢見が悪いので止める 倫子

熱帯夜悪夢のような飛行事故 久留美

夢ならば覚めよと願う空の事故 方子

そして夢は故人をしのぶものらしく 悦子

夢の中亡母と茶を飲み喋り合い 昭治

喋らない主人(故)の夢をたどる朝 正之

夢でくる亡父は鼻歌千鳥足 寿美子

亡き母のようこぶ姿夢に見る 章久

亡き夫と存分に話した夢の中 温子

夢に見る亡友精霊の川流れ 明吉

時事川柳にこんな句も かすみ

トラキチが夢でよ荒れる甲子園 実男

夢を買うそんな上手な手にかかり 登美子

豊田商事ですか、それとも投資ジャーナル? サワ子

古里に夢抱いて来る戦争孤児 やすお

夢にまで見た肉親に会えぬ孤児 章久

昔をしのぶ夢の跡にも詩があります。 白峰

八軒家昔の夢の下り船 繁男

夢破れ栄華の平家西へ落ち 白峰

朱回廊栄華の夢跡西日射す 繁男

(西日にあかく平家の夢の巖島)

さて、夢のETCを：

いい夢を妻の軒で覚まされる 公一

妻の軒より貴男の軒の方が大きくて、奥さんの方に言い分があるのでは。

涙あと悲しい夢を見たのかしら 繁男

(悲しい夢見たらし枕ぬれていた)

消しゴムで見た夢全部消していた 芙久枝

(消しゴムで全部消したいような夢)

水中花夢覚めやらずいつまでも 寿美子

(水中花の色あせて来て夢消える)

かまきりが刃向う程の夢を持つ たかし

(かまきりが刃向う程の僕の夢)

あの夢この夢とび去りて

今はふつうのおばさんに 松子

(夢はもう消えてふつうのおばさんに)

願い事みんな叶った夢の中 輝月

(願い事叶ったところで夢が醒め)

あの夢もこの夢もあり老人知らず 姿洋

(夢えがく一句老人ばけ防く)

夢がないこの頃の子はこましくくれ 新造

(色のない夢少年はこましくくれ)

ピエロにも夜は淋しい夢がある 実男

(ピエロに今夜も淋しい夢が待っていた)

病んでいて果せぬ夢を見続ける 芙久枝

(病床の夢へ青空澄んでいた)

若き日の夢見て今朝はほほえまし 静子

今朝の夢誰にも言わず一人笑む 是る子

(若き日の夢見てひとりほくそえみ)

陰口は平気大きな夢がある よし津

夢のない話口紅赤すぎる 克子

悪い夢つづき故郷へ出す便り かつみ

三男がすんなり継いだ親の夢 春枝

たわいない妻の夢なら聞き流す 保夫

そば殻の枕で横文字入りの夢 てる

井戸端で生れた夢のない話 克子

煩惱の嵐に夢を抱く女 房子

夢入れる袋は強いのを選ぶ かつみ

残り火が夢で火花を散らして 輝月

夢の様な話と父は妥協せず 兼治郎

夢多き時代はモンペの戦中派 麻黄

学園祭夢一杯の青春譜 里子

脱サラで一旗挙げて見たい夢 保夫

鞭あげてさらば夢もいつまでも 草生

題 「石」 12月10日締切(2月号発表)

「種」 ハガキに5句以内

宛先 1月10日締切(3月号発表)

〒598 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬萬的

渡辺独歩氏(倉吉市)より

金一封

拝受致しました

川柳塔社

箱

田口虹汀選

貝殻を貯めてる孫の玉手箱 静子
 底のない箱へ善人水を汲み 明水
 此の箱は立派我が家では金庫 不二
 閑取りの臍緒小さい小さい箱 上げお
 宅急便箱をはみだす母の愛 三五島
 ボックスに立てば三割打者の顔 新造
 若くなる玉手箱ならいただこう かすみ
 石南花を入れて山から降りた箱 伊津志
 拾ったお金は賽銭箱へ入れました 正坊
 骨箱の父と故郷の寺を訪う 雀踊子
 臍の緒の小さな箱に母の思 鶴汀
 箱庭の中で地団駄踏んでいる 螢
 健康でよし下駄箱の子の育ち 速子
 日焼した父の大きな弁当箱 公一
 ト口箱の鯛が無念な眼で見つめ 悟郎
 箱庭に街が見えまます鏡山 朴竜
 針箱へ女は愚痴を溜めて耐え 宵明
 マンションと言う名の箱に棲むオウム 花柳
 ためらいのある菓子箱をもつてくる 四郎
 中味より箱が立派なブレゼント 千代女
 髪付の香りが懐かし箱枕 章久
 福引の大きな箱が軽すぎる 素身郎

可愛くて箱から出せぬサクランボ 三枝子
 寶石の箱でイミテーションの私語 大柏
 おもちゃ箱へ僕の踏み絵も飾ろうか 百万両
 週刊誌読む鷹の目が箱師追う 高明
 五十年タイムカプセル夢の夢 あり
 衣裳箱の底には亡母の香が残る 理恵
 悲しみの箱は首から吊るすもの 本蔭棒
 空箱で五匹の母になつた猫 兼治郎
 箱だけは立派になつたみやげ物 幸一
 貰うならやっぱり大きい箱がいい 千秀
 貯金箱値切つただけの金を入れ 実男
 三日目に開けよと亡父の玉手箱 規不風
 箱書きで変な茶碗に箔がつき 満津子
 文箱にいのちの恋が風化する 婦美子
 思い出を箱に少女のさくら貝 悠泉
 玉手箱貰えば税金ついてくる 久仁於
 空箱を千代紙貼つて可愛い 芙久枝
 募金箱師走の風を肌で聞き 可住
 僕の価をさめる箱書きひとが書く 佳雲
 桐箱の賜杯に亡父生きている 右近
 桐箱へ遺した母の白い数珠 美穂子
 地 おみくじの箱に商魂詰める神 正敏
 天 ト口箱に満杯浜の大漁歌 草生
 軸 お土産は小箱にせよと雀言ひ

乱

西岡洛醉選

千金の夢を乱した黒い霧 三五島
 乱雑にしてるが八畳俺の城 新造
 脇役が乱れ主役もまた乱れ 明水
 しまい風呂呂月がのぞいた乱れ髪 上げお
 共稼ぎ夫婦へ朝の乱気流 カズエ
 乱れ旅旅の疲れを脱ぎ捨てる 圭介
 春闘へ波乱含みの不況風 大柏
 乱つづく家裁は男対おんな 三枝子
 乱伐にあるとき山が妥協せず 秋峰
 生活の乱れが覗く眉の隈 宵明
 玉砂利が心の乱れ責めている 悟郎
 乱立へ打ち勝つ男の眉燃える 雄々
 ドラマでは女美しく乱れてる 雀声
 乱れ咲く花に人生垣間見る 達子
 戦乱をくぐつた父の土性骨 公一
 戦乱の彼方へ青春置いた過去 浪速子
 乱雲が野良の仕事を忙がせる 浪速子
 乱世には乱世に生きる人の知恵 義男
 乱れを見せぬ強さを母に見る 有佳
 神様の心もたまに乱れます 芙久枝
 狂乱の恋におんなの性を見る 静子
 職安へ行く日乱れる靴の紐 文平

柳界展望

集録・板尾岳人

席題 当日二題

主催 川柳岡山社

★井関滋啓・傘寿並びに句集「伴侶」発刊祝賀句会

日・12月1日(日) 12時

所・高山自治会館(関西線

三郷駅西へ徒歩7分)

兼題と選者

友

空

曆

心

輪

各題2句

主催

★川柳「みまさか」

100号記念誌上川柳大会

兼題と選者

面

札

音

頑固

無

投句料千円

投句先下

箱第65号

★36題川柳大会

日・61年1月12日AM10時

所・広島市中央公民館

兼題と選者

炎

風

指

輝く

道

谷川

渥子選

所・広島市中央公民館

兼題と選者

鹿

幅・横・腰・筆・縄・油・

柱・罰・面影・先祖・公園

椅子・名簿・料理・無理・

自慢・半分・波紋・笑う・

長い・走る・舞う・頼む・

許す・軽い・丸い・巻く・

招く・ベルト・カード・ブ

ラン 会費千円・べ切り12

月31日着便 投句先下

島市西区三滝町23-6中村

義雄宛

主催 広島川柳会

★季刊「奈加川」春の大会

と鈴木可香長寿を祝う会

日・61年2月11日AM10時

所・名古屋市博物館

★函館川柳社創立70周年記

念川柳大会

日・61年5月5日AM10時

所・函館市民会館小ホール

★河野春三追悼号発刊

現代川柳の先駆者河野春三

師の追悼号が川柳aの会風

発行所より出ました。

申込所・高槻市大手町4-1

21竹村方。風。発行所

★川柳泉尾の一周年記念句

会が8月10日大阪市北区駅

兼題と選者

鹿

幅・横・腰・筆・縄・油・

柱・罰・面影・先祖・公園

椅子・名簿・料理・無理・

自慢・半分・波紋・笑う・

長い・走る・舞う・頼む・

許す・軽い・丸い・巻く・

招く・ベルト・カード・ブ

ラン 会費千円・べ切り12

月31日着便 投句先下

島市西区三滝町23-6中村

義雄宛

主催 広島川柳会

★季刊「奈加川」春の大会

と鈴木可香長寿を祝う会

日・61年2月11日AM10時

所・名古屋市博物館

★函館川柳社創立70周年記

念川柳大会

日・61年5月5日AM10時

所・函館市民会館小ホール

★河野春三追悼号発刊

現代川柳の先駆者河野春三

師の追悼号が川柳aの会風

発行所より出ました。

申込所・高槻市大手町4-1

21竹村方。風。発行所

★川柳泉尾の一周年記念句

会が8月10日大阪市北区駅

川柳塔七百号記念出版

須崎 豆秋川柳句集

「ふるさと」 復刻版

B6判・136頁 定価一、〇〇〇円

(送料三百円)

発行所 川柳塔社

大阪市阿倍野区三木町2-10-16

ウエムラ第2ビル

振替口座 大阪 8-33368番

前第三ビル「河久」で開か
れた。
▽お便り△
■西宮市のコミュニティ
誌に紹介された川柳掲示板
がすっかりおなじみになっ
て止めるわけに行かず、こ
れも亡父への供養と思っ
て張り付けてあります。
(若本 芳彦)

■路郎賞準備優秀作受賞の席
に出席出来ず申し訳ありませ
ん。これも健康回復途上の
折。わがままをお許し下さ
い。
(渡辺 独歩)

(尼 緑之助)
■7月31日松本市の石曾根
民郎(川柳しの主宰)氏
を訪問、諸家の色紙・短冊・
珍本等を見せていただき貴
重な三時間でした。

(塩満 敏)
■喜寿・金婚記念大会後よ
り意欲が湧き川柳塔への同
人・誌友を増やさねばと決

めて居ります。

(藤井 明朗)

■盛会の上に豪華な記念句会を一生忘れることもないと思えます。

(石垣 花子)

■記念大会が大盛会であつただけに、それ迄の皆様の御苦労のほどが大会を運営して来た私には痛いほど解ります。

(山内 静水)

■私も早や闘病生活丸三年いまだに川柳の真髄を掴むことも出来ず皆様方の励ましの言葉をありがたく戴

ております。

(喜島 ノブ)

■主幹はじめお世話下さつた方々お疲れはと気がかりでした。

(山口 美穂)

■唐津への旅
お疲れさまでした
万事不行届も
次の機会には……
ほんとに
嬉しいことでした

(仁部 四郎)

■大阪に居住していた十代のころ宝塚の大ファンで大スターに憧れせつせと宝塚

大劇場へ通つたものです。

記念大会のプログラムに元宝塚月組美代かほりとありましたので思わす舞台にかけ上つたという次第です。

(東野 大八)

■記念大会の余韻にひたつており、これからも出来るだけ大阪の会へ参加させて頂きたく思つております。

(赤川 菊野)

■祝賀大会はまことに盛大で路郎先生も草葉の陰で御満悦のことと存じます。今年中に第二回の単行本「江川柳」を出版致します。

(種 瓜平)

■米子へついてなつかしい清水寺へ行き夜はきやら木会の人たちに囲まれ会食、栗主幹の会の御礼を申しておきました。これから松江番傘60周年の大会へ出ます

(橘高 薫風)

新 同 人 紹 介

古 川 美津枝

薫風・鬼遊・紫香推薦

茂 見 よ志子

薫風・鬼遊・紫香推薦

第20回岡山県川柳大会

日時 昭和61年1月26日(日) 9時開場

場所 岡山県邑久郡邑久町 中央公民館

兼題

濡れる 田中 好啓選

腕 定金 冬二選

階段 小松原爽介選

銀 森中恵美子選

戸惑う 小出 智子選

悲劇 長谷川紫光選

残す 白岩 文衛選

句う 石部 明選

締切11時・各題2句

席題 当日一題

会費 千五百円

投句 縦22cm横4cmの句箋、各題2句以内

1月24日必着

〈投句先〉〒701-42

岡山県邑久郡邑久町山手1116

嘉数 幸栄宛

主催 白百合川柳社

本社 十一月句会

メンズフアツション
センター (MFC)

十一月七日(木)午後六時

栗主幹の喜寿金婚・句碑建立五周年記念川柳大会のあの感激と興奮をもう一度味わってもらおうと、白浜子さんが撮影、約四十五分に編集した8ミリを映写、鑑賞した。このため席題なし、メ切を十分早め、野村太茂津氏のおはなしは来月に繰延べとなった。ご了承下さい。

なお、この8ミリはVTRにして、ご希望の方に一本一万一千五百円(実費)でお頒け致します。本社宛お申込み下さい。

初出席は上田登志実(豊中市)、芦田静江(高槻市)の両氏。呼名賞は石川勝、上田柳影、田中隆二の三名。

今月の月間賞は江口度氏が獲得。

(進行)天笑 (受付)年代・冬葉
(記録)射月芳・金太

出席者 笛生・紫香・武庫坊・年代・天笑

作二郎・照子・敏・狸村・重人・弘生・満津子・道子・春蘭・美房・冬葉・凡九郎・紀雄一郎・眉水・水客・英子・勝美・千代三・柳伸・薫風・寿美子・正坊・登志実・柳影・みつ子・静江・柳宏子・規不風・雀踊子・太茂津・はつ絵・幸・いわゑ・亜成・隆二・三十四・英壬子・史好・章久・白浜子・白兔・鬼遊・射月芳・萬的・蕉露・悦郎・久子・勝晴頂留子・形水・ただし・勝・文秋・金太・あいき・恵美子・吐来・智慧子・山久・小路・千寿子・泰子・節子・智子・三男・光代・一二三・美代子・楓葉・吸江・寿美・緑良・度すえお・月子・岳人・寿子

兼題「綱」

齊藤三十四選

休場という手で綱が守られる
夫婦若永遠に結んで神の綱
中年の弾みへ手綱妻が持つ
離婚して子が綱引きの中で泣き
ご亭主に命あずけて海女の綱
年金という一本の命綱
中流の暮しの綱に縛られる
綱伸びる長さも妻の愛だろう
進水式えらいおんが綱を切る
さりげなく夫婦の綱引きまだ続く
痛み分かち合った綱は強くなる
見てる方はとても楽しい綱渡り
夢を抱くおんなの着い綱渡り
赤い綱持つと父から叱られる

洋敏
どんたく
秋峰
はるひこ
弘生
勝晴
雀踊子
雀踊子
眉水
水客
隆二
道子
寿子
岳人

エリートの椅子にもほしい命綱
テレバシー不思議な綱を持つおんな
血の通うごとく信じているザイル
命綱山のこわさを知りつくす
たぐり合う綱の長さに愛もえる
簡単に死ねると思う綱がある
綱引きへもつともらしい旗を振り
綱渡りの父の姿に眼をそらす
綱渡りうまい男は振りむかず
目に見えぬ手綱でポケットベルが鳴る
王様をきめる綱引きははじめよつ
鯨まち港に錆びた綱がある
ひとり身へじわじわ迫る綱があり
蟻じごく蟻の欲しがる命綱
一本の綱ターザンになつてくる
七光り綱は二本も三本も
綱張ってそれから神木おそれられ
命綱伸びる海女にある戦
方言で話してくれた綱男
住宅ローン組んで始まる綱渡り
綱渡りした頃もある社の歴史
手綱持つ妻がラッパを吹き鳴らす
未来図の中で綱引く子供たち
頂上へ二人の息が合うザイル
一本の綱で手品師飯を食い
命綱男ロマンの屋根つたう
綱渡りばかりしてきた女坂
論してる様なビエロの綱渡り
綱引きの一人ひとり童心で

寿子
柳伸
年代
笛生
緑良
恵美子
美代子
紀雄
智子
度
作二郎
吸江
度
柳影
美代子
雀踊子
悦郎
楓葉
天笑
射月芳
恵美子
金太
蕉露
凡九郎
英子
柳影
滋雀

神さまがときどき揺するいのち綱
綱引きに負けたんやろか流れ星
綱引きは止めてほしいな核の冬
綱を引く孫へ爺ちゃん声からす

兼題「野菜」 小出智子選

白菜を漬けて男を呼ぶ重石
味付は苦手サラダにしておこう
ピーマンへ悔しさ一ぱい詰めて焼く
何にでも使えるキャベツ買っておく
工夫した野菜料理に欺される
煮ころがし息子の機嫌が悪くなる
木枯しが吹いて大根うまくなる
泥ついた野菜を里のおみやげに
野菜好き悪女にはなれそつもなし
貝割菜土の温みも知らず生き
さんまより大根の値が気にかかり
意地のある胡瓜見事を曲りよう
便秘薬買えば野菜をすすめられ
スリムへの夢が野菜を絶やさない
青すぎる野菜を過信せぬように
特価日に少し疲れた野菜買う
京ねぎも水菜も多弁になって冬
取れ取れの野菜と威張る泥かぶり
一坪に大根きゅうりなすとまと
セロリかじって話のわかる祖母でいる
大根葉捨ててビタミンCを買う
あおものが並び朝市雨になる
虫も喰わぬ野菜に少しある不安

幸 いわゑ 敏 三十四 幸 是るひこ 妻子 喜代 弘生 綾珠 滋雀 勝美 敏 楓楽 一郎 鬼遊 勝 勝 柳伸 幸 英子 幸 章久 敏 あいき 英子 水客 美代子

血圧へもう一皿の野菜盛る
霜降りて水菜がうまいくじら鍋
生野菜食べる女の白い指
良い子になろうなうピーマン食てます
野菜売りがきて花街のあさうごく
大根の葉を大切にしておくあさん
スキ焼にしようお葱がおいしそう
裏の畑で初霜待っている水菜
実篤が画くと優しくなる野菜
大根をやわらかく煮る母の死後
五円でも安いキャベツを見るチラシ
泥ついたままの野菜は信じよう
菜食でこつ足の齢になつてくる
嚇されながら野菜を食べている
外食が続く夫へ生野菜
大根を干して男は村を出る
やわらかい野菜は冬に耐えた味
身籠つて野菜サラダをかかさない
コレクトコール野菜しっかり食べてます
菜を洗う背なに夕陽を溜めている
にんにくの匂いを嫌う秋野菜
大根をどつさり漬けて冬ごもり

光代 萬的 紫香 惠美子 年代 冬葉 弘生 智慧子 射月芳 惠美子 千代子 楓楽 文秋 天笑 隆二 吸江 道子 月子 三男 作二郎 惠美子 智子

兼題「のぞく」 岩本雀踊子選

のぞくから鶴の願いが消えた空
パーセントの裏を大臣のぞかれる
のぞき見は止そう男が小さくなる
数珠玉をのぞくと母に似た如來
じ首をのぞかせ夜をあまくみる

滋雀 どんたく 妻子 武庫坊 水客

第4回 没句供養川柳大会

施主あいさつ……両川 洋々
弔辞……………青木 長波
読経……………森田 布堂
焼香……………参加者全員
(参加者は数珠をお忘れなく)
日時 昭和60年12月15日(日)9時開場
会場 鳥取市共済会館「白砂荘」3階
駅より徒歩5分 電話(24)三三九四三
参加費 三千元(昼食、懇親会含む)
兼題 「敗者復活吟」 小林由多香選
(この一年間に入選発表、活字にならな
かった句に限る)
「成 仏」 渡辺 独歩選
「めつきり」 清水 一保選
「赤」 林 瑞枝選
「熟女」 新家 完司選
「洗う」 土橋 蛭選
席題 一題 各題2句
欠席投句 12月10日〆切。投句料七百元
〈投句先〉鳥取市東大路64両川洋々宛
主催 国鉄ふうもん川柳会
後援 鳥取県川柳作家協会

父の拳をのぞくと涙光つてる
 タイムトンネルのぞけば孤児に親の顔
 戸締りをしておけ師走の鬼のぞく
 お歳暮の量でくらしの差を覗き
 胸の内のぞく手前で嘘を見る
 五円玉穴をのぞくと美女が居る
 おとなの世界のぞいてしまった自閉症
 恋心運命線にのぞかれる
 隣の膳のぞくと隣も隣見る
 退屈な昼を雀にのぞかれる
 のぞき見たバラの赤さに騙される
 のぞかせる財布に罫が少しある
 プライバシーも覗いて行ったインスピ
 月の裏のぞくと兎がおりそつな
 のぞくときつと部屋二はいに宇宙色
 バックミラーにさむい背中をのぞかれる
 のぞくなくと書いてあるのは罪だろう
 子の瞳のぞけば青い空がある
 心の隙をのぞいていった秋の風
 胃カメラにとつとうと前科のぞかれる
 宇宙博のぞきそこねた月の裏
 胃の中を覗いてみたい胃のいたみ
 入ってない財布を妻にのぞかれる
 それ以上のぞくと軽犯罪になる
 極楽で格子覗くと地獄絵図
 竹人形が覗かすかなしいものがたり
 年上の女を空気銃からのぞく
 影法師が僕の弱点覗いてた
 夫婦でも心の奥まで覗けない

緑良
 みつ子
 白兎
 一三三
 寿子
 武庫坊
 亜成
 正坊
 眉水
 鬼遊
 悦郎
 柳伸
 天笑
 敏
 白兎
 幸
 英子
 みつ子
 智子
 勝
 寿美
 敏
 笛生
 勝
 形水
 萬的
 英壬子
 萬的
 隆二

顕微鏡のぞくとこわい別世界
 人の花のぞけば赤い色ばかり
 秋の女をのぞくゆとりも持っている
 楽屋裏のぞくと生きている嘘がある
 とときどきはのぞいてくれる息子達
 鳩時計のぞくとつても忠実に
 針の穴のぞいて不平ばかり言う
 あれからは裏目鴉にのぞかれる
 泣いている太郎の玉手箱をのぞく
 万華鏡のぞくと四次元が見える

兼題「準備」 大坂形水選

正月の虎の準備は出来ている
 昇進の準備にクラブ振りはじめ
 父危篤誰やら唇出して居る
 カロリーの準備が長い嫁の鍋
 会場の準備万端閉古鳥
 着ぬことを願う喪服も詰めて発ち
 思いやりのところで準備行きとどき
 円高に慌てない手を打ってある
 準備だけしとけと社長出たまんま
 死刑囚の心の準備思えるか
 再職の準備も出来た父の靴
 葬式の準備もして鬱続く
 震度八の準備はいつもしておこう
 のし袋準備している日の速さ
 山へ行く準備は軽すぎないように
 整えてここから愛の舟を漕ぐ
 朝晩の冷えにコタツを準備する

笛生
 章久
 恵美子
 幸
 智子
 射月芳
 美代子
 勝
 雀踊子
 はるひこ
 どんたく
 耕花
 秋峰
 幸一
 滋雀
 天笑
 天笑
 天笑
 史好
 はつ絵
 隆二
 笛生
 柳影
 柳伸
 英壬子
 寿子
 一郎

午前様白旗準備して帰る
 すき焼きの準備してあり妻のメモ
 シナリオがふくらんでゆくりハール
 嫁仕度父のふところ軽くなる
 明日果立つつばめに茶房灯を点す
 比翼塚こつそり妻が準備する
 準備万端整い菊が活けてある
 釣り糸を垂らし心の準備する
 木守柿雪の準備も出来ました
 砂時計心の準備が乱れ出す
 準備した鍋を見つめている時計
 準備しておけと嬉しい電話切る
 一目ずつ母となる日の毛糸玉
 島の冬忘れぬために毛糸編む
 準備してないのに当った宝くじ
 踏まれても雑草春へ準備する
 準備万端整ってから手につかず
 準備完了してるてるぼうずぶらさがり
 冥土への準備出来れば持直す
 結婚準備出来て相手がきまらない
 余生への準備花の種を蒔く
 夏を喘ぐこの蟻の汗笑えまい
 冬仕度父の基平がみつからぬ
 三の矢の準備も出来たふところ手
 万一の準備がタンスの底にある
 年賀葉書買って雀も冬になる
 準備も出来たか煙草ふかしてる
 人任せできぬ準備へ泊り込む

いわゑ
 正坊
 鬼遊
 作二郎
 みつ子
 萬的
 柳伸
 恵美子
 泰子
 英子
 水客
 吐来
 作二郎
 英子
 金太
 年代
 重人
 章久
 弘生
 道子
 一三三
 岳人
 岳人
 射月芳
 作二郎
 度
 形水

(清記・楓葉)



締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

城北川柳会

神夏磯道子報

細い糸つなぎ合せて共白髪
名の通り可愛いしぐさ洗い熊
高僧の洗心の顔よく見かけ
大晦日皿を洗えば鐘が鳴る
カラフルな芋の子洗う夏の海
淀川の水調節の洗堰
洗われて洗われ藍の色冴える
老いの背を流して知った弾の跡
土器一片学者歴史の糸紡ぐ
朝露が付いて輝く蜘蛛の糸
納豆が離れたくない糸を引く
おいしいと言われた夜の皿洗う
慕洗う過疎の町より逃げ出せず
糸とりの明治の遊び子に教え
ポケットに札入れたまま又洗い
糸と針持てばホステス母の顔
倦怠期らしい歯車狂ってる
案山子にも時代の顔が勢揃い

仙吉郎 喜代子 午郎 星斗 倫子 正之 満津子 頼一 公一 佐津乃 泰世 婦美子 茂一郎 温子 節子 右近 山久 晃世

運命のいつかは切れる細い糸
言い負けた涙は見せず鍋洗う
老眼鏡世間を丸くして呉れる
青楓目を洗われる寺の庭
母呪文唱えてもつれ糸をとく
七人の敵が持つてる蜘蛛の糸
糸通すたんびに齡を悟らされ
唱題で心を洗い日日精進
洗剤で洗ったような秋の空
洗っても消えない己が過去の傷
お三輪と求女情緒はつきぬ糸車
わびしくて娘の電話に元気づき
糸切れて夫の良さが身にしみる
捨て猫を抱いて孤独を温め合う
紫陽花は心変りを知って居る
どの道を折れてもまるい月が追う
野仏にロマン聞いてもまるい月が追う
糸切った子供を夢を信じ切る
暮参してきれいな涙置いて来る
風船を飛ばそう霊園の空高く
地下足袋をはいても詩集離さない
川柳塔まつえ10月例会 恒松

芙久枝 ふみ 悟郎 弘生 綾珠 道子 悦子 新一郎 久留美 千世子 寿美礼 麻黄 登志代 カネ 静子 達子 笑風 テルミ 静歩 覚然坊 町紅報 昭二 芳枝 瑞枝 鳳人 弁治郎 雄々 寿美子

ひとすじの涙人形の頼伝う
血と涙愛ひとすじに生き抜いて
ひとすじに生きる孤独へ雨がふる
ひとすじに生きる男で妥協せず
ひとすじに生きて見事な頑固です
空白を埋める色が噛み合わず
回り道した空白で爪を研ぎ
空白の心に重い鍵を持つ
四十一年の空白孤児の血の叫び
空白の余生を埋める一行詩
空白のノートを捨てて現代児
空白があった日記の旅疲れ
空白の日記が続く日のあせり
老いらくの空白ロマンの旅に立つ
瞬かす空白見入る恍惚の人
宅療の日誌空白が多くなり
空白へ文矢みごとにつきささる
文化の日誌の立つ丘へ見をつける
見事な碑苦勞話が語りかけ
海征かば口ずさみつつ碑を仰ぐ
顕彰碑残し未裔故郷を捨て
碑も移転峠もアスファルト
碑に初恋疼かくくれんば
芙美子の碑花の命をはかなくて
アメリカが好きになれない原爆碑
語りつく人もなきまき忠魂碑
二十一世紀へやがてかたむく岬の碑
拓本にして碑を持ち帰る
逢引の場所になつてる忠魂碑

秀子 玄艸 為一郎 ちかし 与根一 まさし 貢範 多賀子 由郎 幸一 静江 美治 妻子 翠星 ノブ 天痴人 紫叻 三和 友子 三男 代仕男 正朗 芳子 みえ 肇 きみえ 嘉寿子 愚童 長三

割り切れぬあと味のこし死後無罪
あと味を消すチューインガムを噛む
銘水に指定された池が澄む
痾高い声援見らへ秋が澄み

川柳聖尾

吉川

寿美報

百米駆ける子にカメラ間に合わず
運動会我が子が走れば気がはしる
一等にパパが裸足で伴走し

上役の台風すぎで縄のれん
我が家では豆台風で盆が明け
ふるさとの自慢は富士のある在所
大観のさわめつくした富士の山
近江富士見えてふる里近くなり
優しさも厳しさもある富士の貌
富士山に登って雲の裏覗く

御馳走に釣られて来たら色紙まで
三万円の食費がビールねだつて
過ぎ去れば春夏秋冬みな恋し
花の里銭の花咲く造幣局
カド番の力士よお前男だろ
胸底に情をたたむ秋扇

川柳しんぐう

川上

溪水報

御守の中味覗いた味気なき
お守が嬉しく産声聞いている
お守に母の思いが詰めてある
御守が命びろいを戒める
御守の袋眼を引く事故現場
アンテナを信じて風を見失つ
アンテナを捨て真直ぐな道をゆく

忠雄

壮樹
孤呂二
舞吉
叮紅

アンテナを時どき磨いている夫婦
ホスの座を守るアンテナ張りまわす
夫婦だけ解るアンテナ引いている
本棚の事典も冷えている多忙
金溜める術は事典に書いてない
学者ではないが事典は持っている
字り紙と交換されている事典
買う時はその気になっていた事典
ここ掘れという大ならば飼いたいな
のら犬も夢を見る事ありますか
猛犬有りひとり暮しへ身構える
飼いが通帳くわえて逃げてゆく
負け犬にならぬ意地持ち無職です
川柳わかやま
堀端
三男報

正子
柳宏子
まさ子
三千代
太茂津
大輪
輝子
英子
富子
十郎
溪水
英子
照子
克子
三男
正己
天彦
紀美女
千寿子
太茂津
信秋
忠

マヒの兎の一途に眺める目はきれいな
冷戦を眺めるだけの姑の知恵
遠景を眺め渴きを癒したい
嫁く娘を眺める父の胸の中
行く雲を眺めて故里の空恋し
亡父と子の誤解が溶ける古日記
ぶどう酒の甘さを誤解せぬように
戻つて来た噂に誤解満ちている
誤解されずたい女へ風が味方する
誤解とくための静かな茶を立てる
好きだから待ちます誤解とけるまで
ストローが詰る誤解だと思つ
水平線眺めて明日を考える
野次馬の眺め火の粉の外に居る
言い分けのしない誤解が春を待つ
歳月に誤解の種も朽ち果てる
わかあゆ川柳会
小砂
白汀報

忠雄
光代
正子
登志代
雅勝
康勝
幸
緑良
寿子
桂香
凡太
狂虎
山久
静生
裕美
三千代

人魚姫の悲恋は海が抱きしめる
灰色の心よせつけぬ海の青
生き延びて十指に余る思いなど
嫁がせて指の跡さえなつかしや

ハワイ川柳ワイロー社 市岡

曉舟報

骨壺へ父をころがす火葬場
玄関で蜂の巢人間威嚇する
植木鉢の音秋風を呼び寄せる
黙禱の静けさやぶる蟬しぐれ
披露宴旅立ち祝う歌の声
五月晴れ勇んで駆ける紙兜
夢よもう一度笑わぬ女になつていた
喉自慢老人ハッスルバスの旅
午前二時歌声がして夫帰る
新学期母子で宿題やと済み
年一度小袖眺める土用干
おふくろの味をほうばる祭り鯛
老妻の鉾先かわす一苦勞
その人の笑顔へ熱い目が出会い
夏休み子の宿題をもてあまし
ママさんの顔見に通う飲めぬ酒
細雪美人と衣裳が匂い立つ
湖の利いた浴衣へ亡母を重ね着る
コスモスの好きな女の影を追う

実男 葉香 紅月 礎石 悲子 秋信 越山 永楽 みつこ サワ子 孝栄 三枝 松石 瀝風 みね子 輝月 まとし

豊年の宴会神楽上演し
移民祭どこも宴会派手にやり
世は変わりデスコで宴会盛り上り
宴会をことわる方便首ひわり
宴会で長尻されて気がうずく
宴会で婦人揃って鳩ポツポ
宴会の教程ふえる妻の服
宴会で祝辞簡単大拍手
宴会に禿頭同士良く喋り
宴会妻の眼飲み過ぎず
創作家宴会記事を種にする

Y・F・C川柳会

人見 翠記報

網戸にし間仕切りはずし夏座敷
星影のワルツかけて廻り道
流れ星願いをかけて運針す
陸橋の二人に星が降っている
夏風邪や起きても暑し寝るも爰し
日盛りに黒を着て出る小さい義理
グリーンシヤワー浴びて父子の夏休み
一番星遊び疲れたすべり台

川柳塔唐津支部 久保 正敏報

紙かぶと被る息子に斬られよう
いじめっこくらいいつでもなかされる
好きな娘に贈る一句は胸で詠む
石見川柳会 中川 幸一報
素足から女の業がせめて来る
あさはかな思考を笑う窓の棧
情熱に負けて心の帯を解く
交番に平和を祈る花一輪
耳もとへささやく秋の蚊が一つ
初恋を沈めた井戸はもう汲まぬ
湯上りの素足の下駄を秋が這う
農一途赤銅色の父の足
素足になって女女をとり戻し

高明 六歳かおり 正敏 幸一報 秀子 勝子 弁治郎 秋峰 功 清子 軒太楼

網戸にし間仕切りはずし夏座敷
星影のワルツかけて廻り道
流れ星願いをかけて運針す
陸橋の二人に星が降っている
夏風邪や起きても暑し寝るも爰し
日盛りに黒を着て出る小さい義理
グリーンシヤワー浴びて父子の夏休み
一番星遊び疲れたすべり台

植村客遊子報

スビードへ追いつけぬまま老いていき
調停へ紳士淑女で判を押し
遠征の句会豊かな人に逢う
年寄りの福祉がなげく医療代
一声の咆哮やるせなき流狼
秋風にシルバーなりの粧いし
咲きかけたシオンが雨に打ち濡れて
大胆に天元の石打つ女
なら山の地ならしをした科学博

客遊子 久仁於 多駄子 義美 朴竜 ちよ

指切りの好きな少女に嘘はない
健康という宝物持っている
明け方の部屋にひとりの秋がある
火祭の夜は男が美しい
豊かさへ四角い西瓜売れている
時間給でも早退はままならぬ
水槽の金角にも居るいじめっ子
中年の猫でボールと遊ばない
気の合った仲間にくずが一人いる
無為無策では築けない蟻の塔

春蘭 金太 牧郎 礼子 博子 弘生 進 勝 柳宏子

川柳化粧槽

植村客遊子報

八人目の敵かも知れぬ深えくほ
くちなしの白初恋の人想う

大鷹 丘詩

佳句地10選 (前月号から)

森井 菁居選

素足から伝わる過去を切り刻む
善人の思考を阻む糸切歯
二十一世紀ヘロダンは何を思考する
傾けた首は戻らぬ十七字
鍵握る男の咳が気にかかる
一%の梓には鍵をかけ忘れ
鍵かけた心頑固に自己主張
善人の辞書に悪の字消してある
本当の善人でしたし三回忌
善人の小さな嘘を覗む月
情熱を小節にきかす晴れ舞台
情熱を燃した過去の人も去り
交番へ胡瓜の出来を見せに寄り
ささやけどもう知らぬ顔高いびき
野仏へ何をささやく秋の風
ささやきの狙にのる美人寡婦
芒野で恋をささやくちろろ啼く
ああ今日も墓穴へ迫る陽が沈む
愛知つてそれから沈む陽をほめる
善人と書いて阿呆と読めという
茶柱を信じ思考の輪をはずす

川柳大原
影法師来ては困るのこの先は
もう齢を鏡は隠してくれませぬ
おれの田に一匹嬉しや赤とんぼ
飼い猫も鈴が好きとは限るまい
鈴虫のかこには月も星も出ぬ
としよりという字がやけに目に入る
ペテランが言えは何でもない話

佐吉
久代
智恵
久道
裕
八郎
為一郎
美磯
幸一
久美子
光代
由紀子
義弘
由郎
重六
多賀子
独仙
早苗
美称子
昭二
文術報
玉恵
悦子
直二
はるみ
耕花
文衛
元江

誇るほどでもないが孫の皆勤賞
あきらめて見れば明日呼ぶ雲の色
講演の真ん中へんより禿げはじめ
改造の厨に亡母は来てくれぬ
孫寝かす童話少うし古びたか
野いちこの丁度こらが一千歩
みをつくし水の深さに迷う日も
台風目の中にある母の舵
台風一過空も唇も秋になる

サイクル檸檬
田形
美緒報
乱れ咲く萩の憂いをきいてやる
ふと祖の寒気がらしくポーズする
ご先祖の達筆残る雛の箱
その昔恋に乱れた女も妻
デザインのきれいな箱にだまされる
替くても紳士はちゃんと背広着る
紳士とはどんな人を言うのかしら
日航機乱れた文字がいたましい
寶石箱玉虫ビー玉イミティーション
タンボール箱のビーナッツは苦かった
紳士という貌に暗示をかけてみる
箱入りの娘は遠い物語
単調なりズム乱してやがて秋
揚げ底でないからとて小さい箱
乱世で大死したとは思うまい

藤田
泰子報
体力と能力くらべて月世界
飼われている猫で寝てるか身繕い
離婚への火種を抱いて耐えている

理恵
いさむ
辰江
みさえ
たけよ
みつえ
寿恵子
はやい
はじ芽
花梢
今日子
薫風
智恵子
千万子
千代女
登美子
久子
雅子
美緒
美代
三四子
森子
泰子
柳太

ありすぎて困らないのは愛と富
こぼれ種人の情を知らず咲き
傾いて来たなと思うきな臭さ
体力はまだまだ負けぬ坂の街
イデオロギー妻に傾く定年後
富くじが当たった時のことでもめ
山鳥が落した黄揚の種が咲き
ビノキオの鼻は無邪気な自閉症
赤と白どちらの方へ傾こう
お化粧をしたのに化粧しろと言っ
体力でゲートボールに勝つ女神
胸の奥の奥でしている種あかし
化粧した顔に化粧の浪花節
反抗期らしい無邪気さ残ってる
口紅を忘れた女で渴いている
出来心その償は高くつき
体力のあつた男に刻の風
女なる愉しき化粧して見とれ
無邪気な瞳赤ちゃん人を選ばない
体力はまだ七人に刃を向ける

京都塔の会
松川
杜的報
ありがたいこつちや友達皆若し
秋祭済むとさみしい赤蜻蛉
元の部屋へ戻って浮かぶ忘れもの
鬼瓦夕立を浴びて二枚目に
巖かな闇へ送り火溶けてゆく
無花果がふれば落ちる程に熟れ
大好きないちじくだから遠慮せず
いちじくにはやく熟れよと蟬が鳴く

庄次
花梢
美房
ミツエ
美緒
文次
綾子
岳人
春枝
泰子
シズエ
維久子
トシエ
山久
美代
森子
富久一
喜代
章久

花村
紫香
花代子
花代子
武庫坊
求芽
巨詩
笛珠
三求

花村
紫香
花代子
花代子
武庫坊
求芽
巨詩
笛珠
三求

花村
紫香
花代子
花代子
武庫坊
求芽
巨詩
笛珠
三求

子はみんな都会いちじく熟れ残り
故里のいちじく太陽の匂いする
いちじくは熟れて彼岸の墓洗う
いちじくが熟れておく手の娘が嫁ぐ

いちじくが熟れ頃素直に皮がむけ
無花果の熟れ自画像を濃ゆく塗る
ハッタイ粉遠い記憶につづく味
身を粉にしていたつもり一人舞

矢張り女母の静かな薄化粧
耳たぶの薄い女の不幸せ
肉親を探す記憶が薄い孤児
自己主張通す男の薄い耳

村歌舞伎しあわせ薄いものがたり
薄情路地に桔梗を咲かせてる
残留孤児母国の縁うすくなる
穂田 豊作報

穂田 豊作報
穂田 豊作報
穂田 豊作報
穂田 豊作報

飛鳥 冬子

鼓城 栄

芳子 水客

萬の 葉子

如 明代

杜的 白溪子

和友 年代

美穂 鼓草

文古 峯生

珍顔 和江

承平 承平

行江 行江

春一 春一

マラソンは最下位 汗の完走賞
老いらくの汗はお金になりません
川柳後楽

美しい心腫も澄んでいる
澄み渡る空へ十五夜まん丸い
夏やせを秋の味覚で補給する
南北の対面まだまだ肩がこり

1%出るからGNP変えて見る
的是はずれとんで矢羽のケセラセラ
的を射た苦の夫婦に離婚劇
的をえた苦のつもりが的はずれ

死角からの的は笑っているおまえ
ほんとうの的は笑っているおまえ
ポーズとる子供のしぐさに我を見る
どちらにもとれるポーズに困惑し

スナップに十人十色のポーズあり
出世のポーズマネキンになりきれず
平和へのポーズの下に履く軍靴
口止めのポーズに手話の手が躍る

ハンスとの抵抗母の方が折れ
抵抗ががちり受ける親父の胸
抵抗をすれば吹く飛ぶ蚤夫婦
打吹川柳会

好きな道心弾んで身も軽い
尻軽い男でやりすぎ帳消され
重い荷も夫婦で分けて軽くなる
尻軽で働き者よと見込まれて

朗報へヘダルも軽く弾んでる
長ローン終り心身軽くなる
八重子 豊作

哲郎 健一

進 博友

幸好 美智子

たけ志 拓治

柳五郎 草風

敬三 佐加恵

信善 弘隆

敏昭 照路

吟風 桃風

青銅 青銅

文子 孝美

道子 梅朗

美智子 寿満湖

二次会で軽い財布が袖をひく
大役を気軽に受ける子にあわて
四十年軽いと首相総決算
軽はずみ相槌打って眠まれる

しあわせを他人に言わず軽い自負
ハイハイと軽い返事がつきを呼び
嫁自慢返事が良くて尻軽で
おべんちゃら多くて人が軽く見る

膝枕噂を軽く聞き流す
軽い気で会ったお人が重くなる
結局は口の軽さが波紋呼び
子の言葉老いの心を軽くする

尻軽な性でみんなに親しまれ
むらくも川柳会 藤井 明朗報

長生きをしたし年金気にかかる
廻り道しても寄りたい実家の灯
茶話で皺を伸ばして笑いこけ
鈴虫の巫女の舞にも似た音色

竹箒子供けんかの武器となる
廻り道してライバルに先越され
決心がつかず店内二度廻り
嫁がせて嬉し寂しい母の夜

竹垣の庭がひきたつ新居の灯
コトコンコトン廻る水車も秋の音
年金のスライド分へ税が待ち
荷を背なに行商をする強い母

年金があつて長生き夢を追う
口喧嘩勝っておさまる腹の虫
茶話にはずんで今日も小半日
みをき 佳女

宗光 菊枝

雄々 節子

英治 亮二

早苗 弘生

舎人 康子

明朗 朗朗

とみ子 福子

yas子 武衛

よし子 千里

竹乃 竹乃

みどり 鶏生

マサコ 吉野

はる代 百代

富子 富子

富子 富子

茶話で貴女だけが外に洩れ
 ナイターの灯りへ虫が乱舞する
 よく廻る頭で世の中よく泳ぎ
 火の車廻して走る赤字線
 暑さにもたえて宵待つ月見草
 残月に朝露したたる草を薙り
 月を見て友はいずこの里だやら
 昼の月なせに淋しい老いひとり
 お日様に追われて消える朝の月
 もて過ぎるガイド美人で声もよい
 虫の音が誘う月夜に散歩する
 そつとしておきたい兎の月世界
 着陸の月に兎は見当らず
 都会の子綱をかついで虫を追う
 ただ一人聞くには惜しい虫しぐれ
 茶話に明るい人柄親しまれ
 廻りもの金は我が家を素通りし
 尺八は亡父の音色を秘めたまま
川柳塔きやら木 **石垣**
 野の花を器用に咲いたとは誉めぬ
 若いのに器用に世間泳ぐ人
 器用でもないが老いても針を持つ
 刻を忘れて器用に逃げる影法師
 余り物器用にこなす嫁の唄
 世の風に不器用な蝶乗りきれず
 大波も器用にぬけた日の安堵
 差し入れの器用な味が歯にとける
 輪の中で器用に笑袋あけ
 母さんは器用娘の針錆びついた

さつき 一葉 秀子 はじめ 幸子 三津江 なつえ ゆき子 峰雪 ふみ女 雪路 清祥 蚊声 光子 孝華 林蔵 正朗 芳子 花子報 花子 夕子 伊都 寿美子 千春 てい子 朗子 富美子 より子

器用さが逃がした魚自慢する
 器用さを買われて夜勤起こされる
 指がきれいきつと器用な女でしょう
 不器用な人だからこそ付いてゆく
 ロボットが増えて器用の火が消える
 丸木橋器用に渡る欠けた下駄
 古井戸を覗けば祖母の声がする
 何事も器用で尻尾つかまらぬ
 器用には出来ず別居の肚で居る
 器用に廻して青春理めてる皿廻し
 切り絵師は鉄リズムに乗せている
 曼茶羅の模写は兄貴の手を滑る
 鼻煙壺の器用な絵にはかなわない
 器用に生きて不器用に死ぬきりぎりす
川柳ひらい **行吉**
 罪悪感ないから罰金腹がたつ
 約束をほごに罰金酒に化け
 迷わずに成仏してねと手を合せ
 ふと迷う女心が笑いかけ
 溝なんか出来そうにないウサギ小屋
 迷ってる親父に鋭い子の意見
 鼻めがね上からのぞく眼がこわい
 きみどりの境界線に曼珠沙華
 人生の節目に迷う神だのみ
 兄嫁の祭りずしにも老母が生き
 母さんの罰金お尻を軽くぶち
 捨てた気になって罰金払ってくる
 脱線の子もいて老化防止なり
 作業衣を干して明日の星に聞く

時子 登栄 玲子 文世 富枝 みど里 とも子 田鶴 てい子 日枝子 八重子 荒介 瑞枝 千代 方巳 辰路 栄翁 博 托 美代志 柏峯 幸江 敏和 やすえ 美佐保 せつ子 志寿子 胤親

金魚鉢めだか得意に泳いでる
 迷いから覚めて仰げば青い空
 得意など無くて七癖ある夫
 からくりの裏は見ぬ振り聞かぬ振り
 ライバルの得意へ先手の矢をはなち
 笑い袋ひとつ背負うて四季を行く
 ウィンドに写る漫画になる私
 得意杖一つ自慢は子沢山
 ユニバーで人気のよいのはアヒルだよ
 溝一度出来て電話もときれがち
 日本晴れ迷いの消えた今朝の空
 うしろ向くその背に銀の涙雨
 母老いて得意な料理の数が減り
 得意げな夏の女の隙だらけ
 六・四の位置に間者が来て座り
 言い勝って夫婦の溝を深くする
 迷いなし夫婦夫婦の歩が揃い
 ジャンケンで迷いふっ切りベダル踏む
倉吉川柳会 **渡辺** **善句報**
 もう余生多少のわがまま許し合おう
 先生の鞭の重さが今わかり
 先生の人間愛に惹かされる
 ふる里が手ぶらの帰省待っている
 手ぶらでも話す友あり五十年
 先生と言つて欲しいが本音らし
 幼児には親より保母の言葉聞き
 わがままに咲くコスモスのいいポーズ
 わがままを皿に盛らせた生やさしい
 その帰り他人同士が連れになる

アヒル 寿子 千恵子 愛子 ともゑ 典子 孝子 良一 かずを 裕子 年子 博友 柳五郎 草風 青銅 真備雄 照路 紫泉 とめ子 寿満湖 幸苑 美智子 英治 小生 松女 みなと 次男

一族の島へ踊りの船が出る
 子ビ玉のおどり可愛い色気出し
 枝豆がとつても好きな僕が妻
 枝豆で夏の夕べの飲みはじめ
 枝豆の殻で灰皿盛り上がる
 枝豆にビール男の出ばんです
 菜園の枝豆月見待ち遠し
 ふるさとは今枝豆の美味い頃
 枝豆の皿にせわしい手がのびる
 枝豆が輪の中にいる子沢山
 枝豆のひとつぶずつに夏の恋
 旅帰りに枝豆だけがあればよし
 韓国から来た枝豆で酌む地酒
 旬のものみな好物な野の仏
 親しめる誰かにてゐる羅漢さま
 野仏が教えてくれた帰りの道
 野仏と遊んだ記憶のわらべ唄
 秘湯近く野仏さんの顔も冴え
 泣顔の野仏が立つ雨の道
 野仏のお顔を撫でる秋の風
 野仏は村の出来事知って立つ
 野仏にやすらぎもらう大和路で
 コスモスに頬なぶられて野の仏
 野仏もおどりの太鼓聞いてねる
 野仏が欠伸している農繁期
 表情に亡母をみつけた野の仏
 蓑虫が子離れ出来ぬ身を笑う
 折れそうでコスモス秋をしたたかに
 敬老の日に母からの宅急便

作一郎
 あき子
 山久
 盛雄
 紫香
 和子
 恵美子
 伊三郎
 春蘭
 静江
 明代
 水客
 和友
 求芽
 逸
 敏子
 花代子
 房子
 眉水
 鐘太郎
 一郎
 一子
 千歩
 陽露子
 とおる
 白浜子
 みつ子
 志津
 高子

秋晴れの調書に自転車を盗られ
 まか不思議純國産に毒が出た
 鎌道の空細長い京の秋
 まだひとり誰ぞいい人いせんか
 片蔭を待って整形外科へゆく
 引退を待てる次の次が居る
 陽に荒れた髪で彼岸の墓洗う
 ふれ合えば痛みのおかるホーセン花
 一年一組川上咲子はもういない
 川柳ねやがわ
 下請の谷間手形の綱渡り
 雨は踊り軒下に咲いた花
 科学とは別の目で追う流れ星
 経テブ佗びる気もする盆給仕
 真夏日に表は工事うらは蟬
 全力で生きて女振り向かぬ
 かたつむりいつも全力という自信
 キャンプ場みやげ小石に年月日
 相談に行きたし合わす顔もなし
 泳がずに見せたくなくて水着買つ
 鉢巻は全力引き出す神様か
 全力を出せば故障の年となり
 父の背を写し溜息つく鏡
 全力でたがやす母も背をのぼす
 裏通りパジャマが水を撒いて朝
 身売した田圃に水が入れてない
 アフリカの井戸に私の一円も
 税務署が又くると言うこのスリル
 法要に祖母は小さく行儀よく

さと美
 河瀬芳子
 秀男
 牙子
 如洲
 よ志子
 鼓城
 百合子
 鬼遊
 博泉
 速水
 壯助
 創吾
 松庄
 春の
 杜的
 求芽
 勝美
 一菁
 波留吉
 新泉
 藍子
 菜月
 とし
 章
 こう礼
 君子
 敏夫
 まさお

情熱に賭けた悔いやら捨てた悔い
 朝顔の水を忘れてメロドラマ
 人妻の相談聞いてる夜半の月
 打ち水の優しさ姑へ花は生き
 母の勸娘の相談に覚悟する
 全力を出した涙は直ぐ乾く
 山水をこころに尼僧お茶をたて
 相談をされて男の顔になり
 相談を待ちかねている母心
 全力で歩いた過去があたたかい
 非行の芽掘ればスリルに飢えている
 この愛に全力かけて悔いはない
 熱帯夜微動だにせず金魚鉢
 暴走のスリル求めて死を急ぐ
 恋人へ何度もおひや注ぎにくる
 することがないのか一日中水を撒き
 千変万化自由自在に水生きる
 盆休み身をもて余すノッポビル
 どよめきへ花火師全力かたむける
 スリル感プラス利欲の株を買い
 ありつたけの力で母の車押す
 裏切つて水をゴクリと飲んでいる
 故郷の水恋し片道切符買つ
 相談へ悪友親身にのつてくれ
 全力で当れと簡単には言うが
 御仏壇相談しても聞かばかり
 朝顔の水は忘れぬ二日酔い
 この一日に全力を出す蟬の声
 寝転んで聞けぬニュースの続く月

あやめ
 かすみ
 山久
 シマ子
 静江
 一途
 頂留子
 光子
 一笑
 一代
 勝一
 冬葉
 晴風
 三郎
 よしひろ
 博泉
 亞成
 度
 英壬子
 敬山
 吉之助
 磔
 鼓城
 亞鈍
 眉水
 あいき
 小路
 柳宏子
 薫風

南大阪川柳会 中川 滋雀報

大切にされて疑い湧いてくる
大切な人へ守り札を買う
あれ以来猿に大事な柿の種
大切にされて不自由がと託ち
大切に朝おはようを先に言う
大切にすると言うから添うたのに
大切にしてくれ地球が充てている
砂時計大切な時間過ぎていく
粗相のないよう両の手で受ける
他人伝ではあかん直接言いなはれ
触れてみて花にも棘がありました
好きですとぐらい直接言えんのか
直接に言えぬコトバを背に言わす
無駄承知直接にノー確かめる
直接の価値が数字の上に出る
直接に話せば誤解とけたはず
繕ってやるすべがない言葉尻
自省する今日を繕う語をさがす
網繕う漁師の頬に浜の風
子の落度繕う母の深い皺
倦怠期の夫婦にはしい身繕い
手始めにもうライバルの目がささる
手始めの罪蟬殻をポケットに
手始めと甘くみていたのが誤算
減量の手始めにまずウーロン茶
少しいびつて手始めに口説かれる
手始めに一寸吸わせた甘い汁
手始めの恋はカルピス飲んだ頃

重人 久子 律子 頂留子 曲ん手 あいき 雅風 智慧子 けんじ 柳宏子 隆二 文秋 慶三 弘生 晴風 綾珠 恒明 凡九郎 善信 公一 山久 雀踊子 作二郎 庸佑 楓楽 柳伸 寿美 千代三

手始めの花占いが吉と出る
見えずいたトリックだんん啞になる
出来すぎていたのでトリックだと判る
トリックの種もつきたり小銭入れ
人の目は死角ばかりという手品
トリックを見破られてる軽い貌
駒つなぎ川柳会
名月に大仏殿の鴟尾光る
大げさに言えば天皇家の血筋
背信を許した夜の月の暈
大げさに叱って行かせる医者きらい
銀行が合わせてくれたいくすり
さしつかえおへんどすえと会う電話
大げさに泣くハンカチが乾いている
月あかり匂う女に尾が見える
差し支えある病名と医者が言う
歩を合わす月へ質問してみよう
人情と伝統が好き置きぐすり
大げさな男がうわさ撒いて行く
臙ろ月男二人のあほらしさ
大げさに背中叩いた好きな人
じゅうたんを歩いた軽い罪一つ
大げさに言い過ぎましたと仲なおり
満月に逢うてはならぬ人と逢う
てっぺんを歩く男にピルの風
大げさな悲鳴乳房に一寸ふれただけ
毒薬を盛りそう妻にその気配
老犬と見る月もまた寂しかり
差し支えない役割に回される

章久 滋雀 洋子 千梢 やよい 凡子 小路報 弘生 善信 佐代子 頂留子 甘平 以兆 たつお 規不風 金三郎 凡九郎 国公 文秋 史好 素灯 幹斎 幸治 八重野 育園 重夫 千代三 冬葉 恒明

悔いの道歩いて来たと思つまい
差し支え出来た不義理の罪を負う
大げさな身振りて下戸は下戸に酌ぎ
口数が少ない訳がある電話
夜の道月に教わる水溜り
置き薬亡母の掛けてた釘のあと
差し支えとてに忘れた泥の舟
ひとり娘が帰って来ない月の夜
大げさに言つて話の腰を折る
孤独になりたくて雑踏を歩く
里いもを一つつまたお月さん
荒れた道歩くバズルを解きながら
それぞれ傷が話をさけている
くすりなどいらぬ何処にも行かず寝る
母の行方にああコックリさんは歩く
大げさにボスが笑う自尊心
あの場合抓るに如かず堪忍ね
酒が欲しいめしめ欲しいので歩く
錠剤をかぞえ男の曲り角
差し支えあるから橋を渡らない
決着がつかず月夜の窓を開け
半分に開いても話大き過ぎ
蟻のあゆみ明日のたしかな糧に向く
十五夜に詩人が増える坂の街
差し支えあるので鉛筆はずつてる
尼崎尾浜川柳会 春城武庫坊報
デパートは短い秋を売り急ぐ
ウイंकをうつつかり受けた日の狂い
うつつかりが効を奏する事もある
柳右子 凡子 曲ん手 外吉 覚然坊 春蘭 邦晴 智子 真砂 礼子 美津枝 浩二郎 美代 健勝 雀踊子 翠公 白兔 信治 美幸 柳影 庸祐 潔 柳伸 小路 貞吉 歌子 すす

うっかりと口すべらせて悔いている
同情がうっかりしていて買わされる
へそくりをうつかり寝床で言うている
よく笑う女と一緒に旅の夜
年上で少うしうるさい夜がくる
言い過ぎて夜はベッドで独り寝る
振り向けば手を振る人も遠くなり
無器用を売物にしてふところ手
無駄なこと言わぬ男で頼られる
遺言も書いたし空の旅支度
ふるさとが恋しかったとコアラ逝く
大役をお暇でしようと持ち込まれ
終戦の思い出胸に喜寿迎え
名優の晩年悲し秋の風

川柳藤井寺

赤木

和子報

策のない男がうっかりけつまずき
固いとこ少しはとれた女坂
気まぐれな言葉でくずれ去るも恋
気まぐれの恋をそろそろ整理する
吹く風に彩あり九月小さな秋
髭面のごつい男の京なまり
気まぐれな彼女に合わせ踏むステップ
祝電の以下同文の合わす僕
美しい星だと思つ亡母だろう
祝勝のデパート疲れて戻る妻
孫相手固い頭を馬鹿にされ
女みな美人に見える日の自嘲
気まぐれの言葉を孫は忘れない
この暑さ豊作喜ぶ祝い唄
白露の日秋場所告げる触れ太鼓
気まぐれはうちの女房と気象庁

昌子 江美 十四郎 夢之助 寅之助 弘治 礼子 武庫坊 紫香 牧郎 すみ 良征 よしおぐ いわお

真夏日が終つたとたんに風邪をひき
祝電の中にまじつて恋敵
定年のケチケチするなど見栄をはり
気まぐれな猫で外泊して帰る
祝宴の句碑満月に覗かたる
祝出征あゝの旗二度と見たくない
青愁を吹き抜ける風故里は秋
好打者は風を頭に入れて打つ
気まぐれはよしてと女身構える
梓に明け梓に暮れてる昨日今日
気まぐれが慕う心になる鼓動
又今年秋を運んで赤とんぼ
気まぐれに出した葉書でヨーロッパ

川柳はびきの

塩満

選挙戦幽霊人口後援会
ロンヤスを手玉にとるかゴルバチヨフ
感覚が老いて来たのか蚊が笑う
河内音頭すんで明日から夏が去り
噂と噂唐草模様にして女
万雷の拍手あいまには出来ぬ
突然の恐怖子のこと熱帯夜
妻ダウン新聞手にする暇もない
生きている幸せ朝の陽と遊ぶ
孫が来るラーメンカレーハンバーグ
弥次喜多で名所巡りした昔
洪ちんに誘われ飲む酒味気ない
あらゴメン山蟻ふんだ急ぎ脚
台風がそれて家計簿ほつとする
嫁が来て米屋も朝はパンにする
丁寧に受話器握れば妻の声

美佐 繁男 たかし 美恵子 末一 和美 雅美 彩のる 麻雄 清心 正枝 伴子 和子 敏報 満州子 清二 昭子 末一 寿美 美代子 シメ子 昇 弘子 伴子 忠義 一宏 隆二 比沙胡 吐来

富士の影背に樹海のハンモック
岩田帯扶養家族が動き出す
グルマの眼片眼はいつも浮動票
あいまいに挨拶続く悔み客
あの人のタクト信じて夫婦坂
もつ二度と車にはタクト渡すまじ
雷がタクト振っては夏の雨
名曲があんな棒から出る不思議
六法にタクトを振れとは書いてない
名所地をテレビで見物がまんする
時の人名所コースに織り込まれ
古都税に名所巡りも道をかえ
夕焼けの名所に遠い日のロマン
名所を友とつれもて旅をする
嫁の事ほめて姑の株を上げ
嫁姑遠く離れて波立たず
知恵袋しばつて明るい嫁姑
いい嫁が来たと十勝の薯の花
フルムーン道祖神の里を往く
東大阪文化祭川柳大会秀句 斉藤三十四報
指しやぶる子に父の影がない
神様の知恵があふれている五体
顔いろがええので何でも頼まれる
平行線のままで夫婦は絵をたたむ
自分の名どこにも出ない社史を編む
裏通りから早朝が動き出す
枯れ草のあわれ火つけば泣けるごと
故郷はよきかないつも夢に出る
豊中もくせい川柳會 田中正坊報
野仏の菊はしおれてそのままに
何かある大家の菊を賞めに行く

憲太郎 泰子 優 蛙声 ケイ子 久治 淑樹 白水 徳子 繁男 隆一 保江 喜代子 喜代子 胡村 敏 冬葉 孤舟 天笑 珠梨 笑俳 十郎 三郎 良京 満女 武庫坊

仁王門長きわらんじ千社札
姑が嫁の草履を揃えてる

母の草履に母の温もり脱いである
何だろう小包解く手のもどかしく
前編の謎解き甘栗食べながら

セーター解く子の成長のすさまじさ
小包の仕組みながら栗らしい
趣味の友好的顔で電話口

憎いこと明る顔でいうてくれ
譲り合った切符が暗分けた事故
通夜の朝明るい町に消えて行き

都会には都会の顔で駅の前
赤い蛾が舞うからバラが妖しげに
いとおしく触ればこぼれる花の性

いつも見る顔が見えない萩の雨
ゲートポール軍隊調の声を聞く
肩書がなくて気楽に出す名刺

足向けて寝られぬ言うたまま来ない
落葉樹いろあでやかな余生かな
悔いのない枝を残して葉が落ちる

手まり唄のつて仏になつた祖母
掌を合わすされど仏に逢えなくて
芸一途たぎる老優腫澄む

仏頂面參食う虫もあつてよし
おのずから頭が下がる神ほとけ
澄む心きこえぬ声がかきこえる

天国がのぞける程に青く澄み
姑の足少しよけて萩の道
まっ先に季のうつろいを知る素足

理屈より足で歩いてきた強み

光子 楓 楽 光子

正坊 博史

作二郎 房子

春子 よし子

富子 明吉

花村 隆

福一 美祢子

登志実 紫香

綾子 風童

宏子 良江

照子 登志実

兼治郎 君子

みつ子

光子

荒れそうな気配いちじくの葉がさわぐ
木の仏石の仏もやさしかり

三幸川柳教室 桜井 千秀報
洗いざらに話して誤解の紐を解き
歳月に洗われてゆく罪ひとつ

生きる汗洗い流すもせつさない
洗い合う背中積木をくずさない
お年頃まだ洗つてる長い風呂

先生に長寿法聞くクラス会
先生も労働者です旗を振り
先生と辛掘る生徒いわし雲

曼珠沙華詮ないことを墓に言う
汽車の窓そつと消している頭文字
すらすらと梵字を書いて墨をつぎ

豆粒のような字手型に添えてある
金釘流亡母の手紙はわが宝
読めぬので変体がなへ漢字振る

目を閉じて点字の案内ふれてみる
結局はひらがなに於いてペンを置く
三人が三様に読む寺の額

ペン皿の会 小出 智子報
画廊出て余韻静かなティールーム
秋最中画廊へ誘う友があり

いつも春画廊の中で夢を追い
絵ころの貧しさで見える霧の数
画廊出て秋の日射しが温かい

秋の画廊に心の乱れ捨ててくる
人不信人のかきたる絵に向う
画廊から温い慰めもち帰る

画廊には遠い暮しの秋刀魚焼く
尼崎いくしま川柳会 角野かず子報

春子 鬼遊

文子 かなめ

千秀報

みね

千秀

ふく代

重次

靖子

孝子 忠昭

愛子 桂香

三千子 和子

美代子 智水庵

満津子 勝子

妙子 年代

好子 田鶴子

土壇場で金の話と切り替える
チラシ見て赤いトマトを買いにゆく
年金の首に手頃なルーブタイ

逢いたき人十月の空群青に
自信から野心に変わる直木賞
螺旋階段九月の海に陽がかかる

店たたむ話聞いたる招き猫
もつ少し距離を詰めた影法師
八月の草はいくさの夢をみる

夏水仙逝く夏惜しむように咲き
本心を小出しにしているラブレター
秋ですぬもつ米びつが軽くなる

十月になればゆく娘の毛糸編む
団子とすすき供えて月が出てくれぬ
指鳴らす男の胸にある自信

ふとんから出ると他人の顔でいる
余白まだ自信の彩がみつからぬ
本心を妻に言う日がきつとくる

愛している事の本心出し難く
人形のような美人は売れのこり
聞き流しもう馴らされて嫁の知恵

ふり返る顔に自信が充ちている
一人旅十月の風友にする
どつさりヒラを運んだ朝刊紙

初対面言葉の裏を見つめ合い
人形のある日淫らな瞳に出会う
長風呂を出たら阪神負けており

参観日真つすぐ上る自信の手
腹の立つネクタイ紐にしてやった
母の棚こけしは好きな方を向き

風に病んで人形は親の名を知らず

静 眞子 幸子 春子 保蔵

かすみ 幸次郎 紫香 一郎 君郎 静江 文夫 すえ 郁栄 晴子 定人 礼子 かね子 みち子 歌子 美代子 玉子 かず子 佳秋 はじ芽 牧郎 伊代 年代 伊三郎 良征 正一

■各地句会だより

翠洋会

奥田みつ子

大阪の真ん中、環状線玉造駅から五分程のところの思いがけなく静かな一郭がある。その玉造地域集会所で毎月第三水曜日に翠洋会が開かれる。

締切り一時半、今月は薫風先生がお休みで残念だが、鬼遊先生はじめ十五名の句が出揃った。法事や旅行でお休みの人も投句は欠かさない。順番で選者に当った人は黙々と句箋とにらめっこ。一方ではお茶やお菓子を配る人、句報をホッチキスで止める人、黒板に物差しで縦横に線を引き互選の句を書く人、皆それぞれに忙しい。

今日は北田綾子さんが自宅の庭の柿を丁寧

に皮をむいて沢山持ってきて下さったので早速ご馳走になる。
やがて選も出来、披講が始まる。中西兼治郎さん、堀江光子さん、そして鬼遊先生が没句の添削も交えて兼題三題がすみ、コーヒー

を飲みながら休憩。その間に黒板の句を各自好きなだけ選び紙に番号を書いて互選当番に渡す。当番はそれを集計して黒板の各句の上の欄に得点を記し、いよいよ互選の意見交換となる。互選は一人一句とし、今月の題は「葉」である。

得点の少ない句から順に感想を発表して貰う。推薦した人はその句の長所を述べるが、それに対して反対意見も出る。作者名は伏せてあるので遠慮なく批評する。下五を変えたらとか、中七が平凡とかなかなか手厳しい。でも着想が良い、言葉の響きがきれいなど褒めることも忘れない。笑ったり、ドキドキしたり、時に議論もして、たっぶり一時間以上もかけてそれぞれの句を勉強する。

葉脈を描くと水墨息をつき
葉があつて花の風格ととのえる
秋の風地下まで落ち葉連れて行き
青い葉も巻いてみの虫風の中
落ち葉踏む靴の高さの見えかくれ
柿の実も実る日までを葉は落ちず
菊の葉を料理に添えて秋を食べ
悔いのない枝をのこして葉がおちる
円満へ枝葉のことは言うまいぞ
どの葉にも照る日てらぬ日しぐれ空

君子 登志実 兼治郎 良江 為子 光子 照子 風童 楓 楽 いつを

八つ手の葉ふところ深い父であり
落葉樹色あでやかな余生かな
諍いのはての落ち葉はふきたまる
荒れそうな気配いちじくの葉が騒ぐ
朴葉みそ飛騨高山は雪だろう

みつ子 綾子 宏子 春子 鬼遊

それからおもむろに作者を聞いてゆく。作者としての意見も併せて聞かせて貰う。「こんなつもりで作ったけど思いが伝わらなかつた」「下五をいろいろ考えたが思いつかず、時間切れで仕方なしにつけた言葉より皆さんの言葉を頂きます」など。

四時半まで和やかな雰囲気の中にも充実した時が流れ、皆それぞれ満ち足りた思いで会場をあとにした。

いつをさんが朝日カルチャーの受講生に声をかけ薫風先生、故酔々先生を中心に「和」をモットーに始めた勉強会の句報も三十八号を数える。兼治郎さん、光子さんと代々手書きしてきたが、今は井上照子さんのきれいなカットまで入っている。

交通の便の良い所ですから一度覗いてみようとお思いの方は御遠慮なくお越し下さい。その節は会長山根いつをさんまで御連絡下さい。(電話)〇六一七六八一三四七四

12月各地句会案内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 わかやま	8日(日) 午後1時より 慌てる・影・苦勞	紀之国会館2F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口 川 柳 会	9日(月) 午後1時より 壁・札(さつ)・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 200円(郵便切手可)
菜 の 花	10日(火) 夕6時より 風邪・手袋・凍る・ホット	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市山本町5-4-6 内海幸生
川 柳 塔 まつえ	14日(土) 午後1時半より 単線・無心・編む	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 ねやがわ	15日(日) 午後1時より 目安・継ぐ・王様・自由吟	寝屋川市立総合センター1階会議室 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川 柳 会	16日(月) 午後1時半より 雪・終り・旅・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87-2 田中正坊
堺川柳会	17日(火) 夕6時より 彼・帰る・カレンダー・元旦	堺青少年センター3F 阪堺線綾之町西南 〒590 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
南 大 阪 川 柳 会	19日(木) 夕6時より 拝借・ひどい・福・閉口	寺田町高松会館 大阪市阿倍野区天王寺町北1丁目3-11 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木) 午後1時より 手袋・越年・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻 白浜子 句会費 500円 投句料 200円(小額切手)
南海電鉄 川 柳 部	19日(木) 夕6時より 精算・来客・リズム	南海会館ビル内 南海電鉄本社地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
富 柳 会	19日(木) 午後1時より 三角・楽しい・投げる	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3-22-18 藤田泰子
東 大 阪 川柳同好会	26日(木) 夕6時より ナツメロ・好き・茶・策	東大阪社会教育センター2F 近鉄布施駅北5分 〒579 東大阪市新池島町1-4-14 齊藤三十四 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ川柳会はお休みです。		

★特に記載なき場合・句会費 500円、投句料 300円(郵券可)

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

本社12月句会

日時 十二月六日(金) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階

東区内本町一丁目 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

兼題

「襟」

野村太茂 津
西出楓 楽 選

「南極」

藤井一二三 選

「還る」

堀端三男 選

「敬語」

西田柳宏子 選

席題 二題 当日発表
会費 五百円

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

1月の兼題 「盛る」 「緑門」

1月の本社句会は7日(火)

『夜市川柳』募集

第7回 「奪う」 森中恵美子選

第8回 「ふんばり」 黒川紫香選

投句先 下593 堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

● 募 集 ●

二月号発表表 (12月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選
水煙抄(10句) 黒川 紫香 選
愛染帖(3句) 橘 高薫 風 選
課題吟(各題5句以内)
「家」 弘津 柳慶 選
「のん気」 中川 幸一 選
「腹」 吐田 公一 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

三月号発表表 (1月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選
水煙抄(10句) 黒川 紫香 選
愛染帖(3句) 橘 高薫 風 選
課題吟(各題5句以内)
「削る」 波多野 五楽庵 選
「調子」 行吉 照路 選
「裏」 木村 はじめ 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をこゝで使用ください。

12月の常任理事会は2日(月)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十年十一月二十五日印刷

昭和六十年十二月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)6611691 一四番

振替口座大阪8133336八番

編集後記

☆十二月になると毎年のことだが、一年を振り返って十大ニュースが発表になる今年には嫌な事件が多かったが、川柳塔は順風に乗り平穩な航海を続けた。

☆私の思い出す第一は、某主幹の喜寿金婚句碑建立五周年記念川柳大会で、これは、川柳塔の仲間の方々の印象であろう。川柳塔の和のすばらしさを自他共に認識して貰うことが出来た

川柳塔七百号発刊の記念に須崎豆秋句集「ふるさと」を刊行したことも意義の深いもので、売れ行も群を抜いて、発刊間もなく出版費用は回収出来た。いい企画だとい結果が出るのが実証された。保育社から出た拙著「川柳にみる大阪」も好評を得た。

☆今年の川柳塔の行事は、地方の大会への参加を兼ねた旅行も多く、それぞれ実績を挙げたことも特筆もので、四月には郡上八幡から白川郷へ、十月には唐津の

支部へ大挙出席した。私は九月にも東野大八さんの随

行で青森県川柳大会、十一月に松江番傘六十周年記念大会にも参加することが出来た。六月の奈良に於ける日川協の大会と共に、それぞれの特色ある会の模様をつぶさに体験したが、参加者の多少にかかわらず、主催者の熱意には一様に心を打たれた。

☆NHKの「川柳天国」のテレビ放映。その後の句集の編集には手間取り、十一月初めにやっと出版の運びとなった。「お達者くらぶ」という番組への出演も加えて、寺尾俊平さんに多大のお力添えを頂いた。

☆寒さも暑さも敵し長い冬と夏を、どうにか健康で過せた年に感謝している

☆来年は丙寅の歳で、私は還暦を迎える。「虎は千里行つて千里帰る」と言うが来年は自分を見詰め直す年としたいものだ。

☆路郎先生に教えられた、「作家は仕入れが大切だ」とのお言葉を思い返してい

る。売れ行きだけに勵んでいては品物（人間）が枯渴してしまふ。

▼古くは干支（えと）による性質の相違や、最近では血液型による性格分類が盛んである。それなりの根拠がない。と言うより信じないように努めている。

▼異性と戦を信じて破れ、また、会社を頼んで裏切られ、わが身を鎧う一枚々々の殻が信じることを拒んで

いるらしい。

▼家の宗旨が浄土真宗なので、親鸞聖人の座談「歎異抄」を読み始めた。それは信心からでなく彼岸が近く

なった歳の所為だと思ふ。

▼「南無阿彌陀仏」の念仏を誦すれば、如来の慈悲に通じての結構な教えである

でも、仏壇に向つて素直に掌を合して唱えられないところでは、到底救われそう

ない。

▼不信の殻は豊田商事から守ってくれたが、それは我欲の世界のことである。川柳曼陀羅があるなら殻を破って信じて。

▼仏陀如来はこれ救済なり救済は安住なり、安住は摂取なり、摂取は他力なり、他力は如来なり、如来は弥陀なり、弥陀は南無阿彌陀仏なりと、悪人正機の本願を有する如来のお誓ひ、愚人成仏の全能を有する仏陀のお在すを信じて、ナムアミダブツより長い十七音字を、はてさてどのように唱うべきか迷いは限らない。

※ともかくもあなたまかせの年の暮 一茶（き）

☆食事ときなど店が立て混んでいると合席させられることがよくある。時間にすればせいぜい二、三十分

神経を使う必要もないのだろうが、相手によってはイヤな思い、腹立たしい気分になることがあるものだ。

☆いつぞや、四人掛けテーブルで合席になった中年の女性二人、食事よりお喋りに夢中で、それも話題は

もっぱら利殖のこと。世の中すべてカネ、と言いたげ

な会話を聞くともなく聞いている内に、もうムカムカしてきて食事を味わうどころではなかった。

☆先日、うどん屋でおもしろい経験をした。向い合つて座つた、船のころは四十前後、中肉中背のごく平凡な男が、ザルそばの大き盛りを注文したのである。十一月のこの季節に？とひそかに注目していると、この男、ちよどスパゲティをフォークにくるくる巻く如く、そばを箸の先に大きな団子状に丸め、それを付け汁にザンブとつけて口の中へ入れる。豪快というか、大盛りそばは、またたく間に無くなつてしまつた。そして、艶から色とりどりの錠剤、カプセル十粒ほどのトリ出しで掌にのせ、コップの水で一気に呑み、席を立てて行つた。

☆まさしくアレヨアレヨの出来事で、僕は注文した卵とじを、まだ半分も食べていなかった。今思い出しても、あれは一場の白昼夢ではなかつたか。

（史）

昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和六十年十一月二十五日 印刷
 昭和六十年十二月一日発行(毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通巻七〇三号 川柳 荅
 十二月号

日刊



投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と

明示すること)。投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉

〒五三〇・大阪市北区中之島三十二・朝日新聞

ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551